

---

# 行け！軍隊野球部！

マホロバ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

行け！軍隊野球部！

### 【Nコード】

N4841E

### 【作者名】

マホロバ

### 【あらすじ】

私の自伝です。軍隊？刑務所？のような野球部時代のお話です。

## 集合

押忍！自分は軍隊野球部OBの上田（仮名）と申します！

この度は軍隊野球部に興味を持っていただき有難うございます！

これより私の過去の経験を脚色なく（ちょっとしたかも）お話しさせていただきます。

まずは簡単に軍隊野球部の概要を説明させていただきます。

当野球部は全寮制となっております。

この「寮」はルールの無い刑務所と言っても過言でございません。

昔に聞いたことのある「1年は奴隷」「4年は神様」まさにこの世界であります。

築50年以上経つ木造のオンボロ寮に、1年生と4年生合わせて100名程が住んでおります。

寮の部屋は大部屋（15名）・中部屋（8名）・小部屋（4名）の3種類。

特に小部屋は6畳の部屋に2段ベッドが2つと押入が4つ…

歩けるスペースは、ほとんどございません！

この狭い、狭い部屋で私の地獄生活が始まりました。

まずこの刑務所のルールから簡単に説明しておきましょう。

2年生までが下級生で、3年生以上が上級生という絶対的な壁があります。

そして、下級時代の運命を変えと言っても過言ではない部屋割りはどうして決まります。

3・4年生が1・2年生を選別し、気に入ったやつを「子分」いや「舎弟」いや「奴隸」として迎え入れます。

下級生は言われた指示に従うだけで、割り当てられた部屋に決まった理由すら知らされません。

たちの悪い先輩の舎弟、いや奴隸になれば最低でも1年間は地獄モード確定となります。

この奴隸とは日々何をするのか？

簡単なことです。

先輩の…

洗濯・部屋の掃除・食事作り・おつかい・マッサージ（寝るまで）  
酒の相手・ストレス発散先・スパイク磨き・大学の代返などなど…

これを「ハイッ！」と切れの良い、嫌味のない、気持ちの良い返事で、ただただ実行するだけで良いのであります。

まゝ言われた事だけをやっていては、「使えない奴」になってしま  
い、後々目を付けられることになるので、自分なりに先輩の顔色で  
色々と解釈しなければいけません。

さてさて、そんな恐ろしい野球部生活ですが本当に色々な事があり  
ました。

絶対に戻りたくない、あの下級生時代の2年間！

特に恐ろしかったのが「集合」でした。

さてその「集合」とは何か？

集合とは教育の一つで、上級生様より有り難いお言葉と、若干のお  
仕置きをいただく儀式です。

この集合の発生要因は基本的に上級生様のご機嫌次第であります。

例えば煙草がバレたり、（下級生は吸えない）掃除をさぼったり、  
練習中に声が出ていなかったり、態度が悪かったりと様々です。

中には、お前の顔が生理的に受け付けないからと理不尽極まりない  
理由もありました…

「おい！1・2年！ 今日19時から集合や！」

上級生の小林集合隊長（仮名+補欠）が、超いきがった顔で下級生  
に指示をする。

この時点で集合は確定となり、どんなことがあっても執り行われる。

集合と知った下級生は、その瞬間から練習どこぞいけません。

あつちこつちで誰が何をやらかしたのかで大騒ぎ。

特に1年の粗相が原因で集合となった場合は、集合終了後に2年から集合を受ける確率変動に突入する。

だから1年は粗相の原因を必死に探る。

色々噂をまとめると、どうやら1年の態度が悪いことが理由らしい

：

これで確率変動が確定した。

で、今度は具体的に誰なのかを探っていると、なんと！

なんと！

原因は！

俺！

え？何でなん？

愛想笑いには自信もあつたし、むしろ1年中じゃ出来る奴で通っていたはず！

しかし、身に覚えはないがメインは俺らしい…（集合の理由は様々

だが、一番のきっかけを作った奴をメインと呼ぶ)

確変確定の上にメイン確定の、暴走モードが確定した…

同期のみんなは、「そんなに落ち込むなよ！一緒に乗り切ろうぜ！」と声をかけてくれるが、どことなく余裕が感じられる。

同じ集合でもメインとサブでは天と地の差。

この日だけは永遠に練習が終わらないでくださいと神に願った。

願いむなしく17時には練習が終わる。

いつもより早い…

私の精神力は限界に近づいていた。

いよいよ集合場所である寮へ移動する…

帰りの2年は無言だが、確実に1年を睨んでいる。

同期はそれを悟ってか、全員うつむいたまま2年と目を合わさない。

私は無視するわけにいかず必死で謝りまくる。

この時点で既に私の精神力はK点越え！

グラウンドから寮までの帰り道で2回ほど胃液を吐いた…

それほど集合は恐ろしいのです。

この時、寮に入って一回目の「脱走」という二文字を本気で考えた。

精神的に限界を越え、さらに肉体的にも限界を迎えるのかと思うと…

脱走…

脱走⇨退学…

退学⇨負け犬。

やっぱ出来ない！

極限状態ながらも色々考えていたが、無情にもその時は来た

- 1・食堂に集合
- 2・机と椅子を端に寄せる
- 3・上級生用の椅子を並べる
- 4・横一列に2年が並ぶ
- 5・その後ろに1年が並ぶ
- 6・全員正座する
- 7・手を後ろに組む
- 8・目を閉じる

これで準備完了。

この待っている時が一番恐怖を感じる。

食堂の上にある2階の廊下が騒がしくなってきた。

上級生独特の、足を高く上げずにスリッパを引きずり歩く嫌な音が聞こえる。

その音がだんだん近づいてくる。

それも複数人。

階段を降りてきた。

食堂のドアがゆっくりと開いた。

恐怖感MAX！

ガラガラガラ

カサツカサツカサツ

ドサツ ドサ ドサツ

食堂のドアが開いて、上級生が席まで歩き、そこに座った。

目を閉じているため、全神経を耳に傾け音だけで全てを把握する。

しばらく音がしない。

聞こえるのはめっちゃくちゃ早くなっている自分の心臓音のみ。

しばらくすると、前列の端の方からゴバァッと鈍い音と同時に「グハッ！ヒツヒツヒッ」という声がする。

まずは前列の2年が腹を蹴られ息が出来なくなっている。(目を閉じているので想像です)

何度も集合を経験すると音だけで何が起きているか理解できる。(想像だけ)

バシッ！バシッ！！

今度は左側から強めのビンタ。(しつこいようですが想像です)

そろそろ俺の番かな？

すると突然全身に強い衝撃を受ける！

っ、っいにきた〜。

思わず声が出る。

「フウアッ」

ん？

あれ？

目を閉じているので、どこに攻撃がくるかわからないため、全身に力を入れる。

多分この時の俺の顔はイキが気合いを入れている時か、亀が「シャコラッ」って言った後の顔に近かったと思う

顔も体も受け身は完璧なのに、一度目の衝撃以降何も来ない。

な、何なん？

どうしても気になりバレないよう薄目で確認する。

すると隣の1年が目の前に倒れ込んでいる。

なるほど！

どうやら隣の奴が蹴り飛ばされた勢いで、俺に倒れ込んできたらしい。

ん？

太ももに違和感が。

ぬお〜！ な、なんと！

隣の奴の汗と鼻水がべつとり！！！！

「ぬぐぐぐ〜！このクソバーゴンめ！」と心の中で叫ぶ！

そう！俺に倒れ込んできた1年とは「バーゴン！」

顔が猿人なので、入寮当日には先輩からバーゴンと呼ばれていた。

しかも、顔が超〜むかつく！

さらにKYである！

こいつの顔がむかつくのとKYのせいで、1年は何度か集合を受けたこともあるほど！

「こんにやろ〜！めっちゃ痺れている足に倒れかかった上に鼻水まですつけやがって！後でお前は俺の集合じゃ！」と、心に誓った。

その後もバーゴンは特に悪いこともしていないのにボコボコいや、色々と教育を受けていた…

今度は遠くでコーンコーンと綺麗な音がする。

何だ？今までに聞いたことのない音だ！

しかも集合に相応しくない綺麗な音。

またまた気になり薄目をあける。

すると何と！

日本酒の一升瓶で頭を何度も！

あ〜〜〜

い〜た〜そ〜

かなり振りかぶっていた…

また目を閉じる…

次は近くで「う〜う〜」と苦しいような低い声。

今度はバーゴンの隣位から聞こえてくる。

通常は衝撃音の次に声が聞こえてくるはず。

しかし、今聞いている苦しそうな声は、ひたすら唸っているだけ。

衝撃音がない。

たまにブイ〜ンって扇風機のような音もする。

あ〜もう駄目だ〜！超〜気になる〜！

こんのクソ上級達め〜！

次から次へと新技を開発しやがる！

またまた気になり薄目でチエック！

すると〜〜〜〜〜〜〜〜〜！

鼻の右穴と左穴の間に洗濯バサミがはさまっている…

よく見ると、その洗濯バサミから紐が！

その紐の先端には何と！

超でっけ〜

すんげ〜でっけ〜

黒光りしている、

強そうで、

元気な!?

カブトムシが(雄)：

しかも!

しかもだ!

ブイ〜ンって!

ブイ〜ンってさ〜!

飛んでんの!

それが飛ぶ度に、痛いみたいで「う〜う〜」って唸るわけよ!

俺だって我慢に限界がありますよ!

いくらなんでもよ〜!

こんな仕打ちはさ〜

集中中だけどさ〜!

集中なのによ〜！

俺がメインの集合なんだけどさ〜！

我慢が出来ず！

ついに！

吹き出してしまった…

や、やばい〜

「ブハツ」と声が出た瞬間に、我慢し過ぎたので鼻水もかなりの量が出てしまった。

目は閉じているが完全に上級生の視線は俺に向いていると確信する。

めっちゃくちゃピンチ！どうする俺！

この間コンマ2秒程で頭をフル回転。

出た答えは咳払いへのミラクルチェンジ。

しばらく静寂に包まれる。

やっぱりダメか？

ん？

どうなんだ？

この間が怖いから駄目押しで、もっかい咳払い。

すると何事もなかったかのようにスルーした！

危なかった。

メインのくせに集合中に爆笑なんてしてみなさい！

猿に核爆弾のスイッチ周りを掃除させるくらいやばかった。

そんなピンチも乗り切り切りホツとしながら様子を見ていたが、一向に俺のお祭りは開催されない。

シバかれている音もいや、教育を受けてる音も徐々に少なくなり終わりムードだ。

こゝ、これは奇跡のメインスルーか？

あゝ神様〜！

あんた偉いよ。

やっぱいたんだね〜神様って！

しばらくすると、2年が話し出す。

終わった！

本当に終わってしまったのだ！

ゆっくり目をあける。

顔の形が原型を留めていない奴、頭から血を流している奴、Tシャツが裂かれている奴、パンツ一枚の奴？

色々な奴がいるが奇跡的に俺は無傷！

それにしても今回の集合はいろんな意味で疲れた。

一気に体の力が抜け、何の感覚も無い正座していた足をゆっくりと崩す。

今は何も考えることはできない。

ただ呆然と一点を見つめるだけ。

ただただ一点を見つめるだけ。

一点を見つめるだけ。

前にいた2年の背中を、ただ見つめるだけ。

2年の背中…

2年で一番怖い先輩の背中…

背中に…

俺の…

力いっぱい…

振り絞られた…

鼻水がべつとり…

確かにあの時、確実に鼻水が飛び出したけど、それどこではなかったのを忘れてた。

またまたピンチ到来！

どうする俺！

やっと終わった集合の後に…

しかも、よりによってYKKの背中に鼻水が…

YKK？

そう、2年の中でも抑えておくべき要注意人物の頭文字。

矢沢・岸谷・小林の3人。（仮名）

その中でも一番気を付けるべき矢沢先輩の背中に…

ばれたら100%やられる。

他の2年に矢沢の背中を見られる前に何とかしなければ！

考える。

とにかく考える。

恐ろしい集合直後に良い案は思い浮かばない。

しかし、2年がぞろぞろと食堂を出て行く。

やばい！やばい！

軽くパニくる。

何かしなきゃ。

何か！

あゝ

もう駄目だ！後でバレるより、今正直に言って数発殴られようと思心。

俺はとつさに「や、矢沢さん！」

すると矢沢先輩は「あん？」と答える。

「あん？」って…

まだ呼んだだけなのに、なぜか切れ気味に返事が返ってくる。

だ、駄目だ！もう既に切れ気味なのに背中に鼻水つけちゃいました！なんて言えない。

この数秒の間で別プランを考えるが時間が無さ過ぎる！

考える前に言葉が出てしまう。

「あ、あの背中に…」

「背中にですね…」

「む、虫が付いているので払いますね！」

すると、矢沢先輩は「マジで、早く取ってくれ！」とびびりながらお願いする。

我ながらナイスプラン！

「わかりました！」と明るい声で、鼻水を満遍なく伸ばすように虫を払う真似をする。

ほっとけばカピカピ間違いないが、現時点では汗程度にしか見えなくなっただけ！

「と、取れました！」と伝え、矢沢先輩は「さんきゅ〜」なんて言いながら部屋に戻って行った。

俺に鼻水飛ばされ、さらに引き伸ばされたのに「さんきゅ〜」だって！

この日2度目のピンチを乗り切った俺は、なぜか爽快な気分ですつた。

この頃から嘘や演技が猛烈に上手くなった気がする。

どんなピンチも乗り切れる気がする！

しかし、調子に乗ってはいけないと、この後に気付かされることに…

あんな朝礼がきっかけで…



そして最後に軍隊のような儀式がある。

(これまでも軍隊みたいだけど…)

それは、

大学の野球部訓を皆で声を出し読み上げること…

その方法はキャプテンに指名された1年が前に立ち、1文ごと読み  
挙げ、それに皆が続いて読み上げるといふもの。

かなり声を張り

「イチ！学生としての本文を……………」

「二！常に礼節の心を……………」

「サン！……………」

(ここは各自アホになってください。上段です…)

この部訓が7つほどある。

普段は完璧に覚えている。

入寮3日目までに完全に暗記した。

しかし！

朝からいきなり上級生様の前に立ち、部訓を読み上げるプレッシャ  
ーは相当なもの！

途中で少しでも詰まるようであれば、何をされるか分からない…

しかも朝は機嫌が悪い。

いきなり朝から集合確定なんてモードもある…

1年は皆、指名されないよう前の先輩達の影に隠れる。

俺もいつも通り、大きい先輩の後ろに並び隠れている。

だから安心

ここ数週間指名されたことないし

しか〜し！

キャプテンが指名した名前は！

「上田！」

………

まさか指名されると思っていなかったので、「ヒァイツ！」と返事が裏返る。

前に立ち部訓の1つ目を言い終えたところで…

頭が…

真っ白になった…

やばい…

完全に忘れた。

今まで多少詰まる奴もいたが、前に立っていない1年が口パクで次の文を教えてくれる。

しかし、俺は…

皆必死で口パクヒントを出してくれているが…

パクパクしているだけで何も分からない。

既にパニックの俺にはそのヒントすら解読できなかった。

駄目だ…

完全に出てこない。

しばらく沈黙が続く。

上級生様が立ちながら貧乏揺すりをしている。

表情も段々変わってきた。

それが余計プレッシャーになる。

通常1分程で終わる部訓は既に5分を超えている。

見かねたキャプテンが、「もういいや、お前下がれ」と…  
変わりに別の奴が指名された。

次の奴はこんな空気の中スラスラと終える。

ようやく長かった朝礼が終わる。

寮に戻る上級生様全員が俺を睨んでいる…

そして、その中でも一番やっかいな最上級生「B」が俺に一言。

「今日の練習楽しみにしておけっ」って…

俺は「は、はい…」と小声で答える。

「B」とは4年のボス。

ボスだから「B」。

ボスと言っても統率力や野球の実力ではない。

喧嘩の強さである。

俺はこの時、寮に入って2回目の「脱走」の二文字が頭に浮かんだ。

いつもなら、運と演技で切り抜けられると自負していた俺も、今回だけは絶望的だ。

理由は「B」を怒らせてしまったこと。

「B」はとにかく怖い。

殴り方の加減をしらない元ヤンキー…

どっかのチーム（族）ではキャプテン（総長）だったようです…

「B」のリンチいや、教育は半端じゃない…

以前、親友のハルが、これこそボコボコって呼べるリンチいや、教育を受けた。

顔は原型を全く留めていなかった…

教育の理由は「B」に頼まれた大学の代返（先輩の代わりに授業に出ることで、うちの大学の場合、出席日数が重要視されていた）をシカトしたこと…

シカトの理由は…

俺がハルを誘って、大学に行かずパチンコに行ったからだ。

ぶっちゃけ俺のせいでもある…

では、なぜバレたのか？

そう！普段はそうそうバレることはない。

ってか先輩の指令をシカトする方が珍しいが…

で、バレた理由は「運」である。

俺の親友ハルは元々「運」が悪い。

その日の夜、ハルと二人でパチンコの話して盛り上がっていると、他の1年が駆け寄ってきた。

「ハル！大変！大変！Bが呼んでるけど何かしたの？」と…

俺とハルが顔を見合わせ全身が凍りつく。

数秒目を合わせたまま生唾を飲み込む。

ハルは不安を吹っ切るように「多分違う用事だべ」なんて言いながらBの元へダッシュで向かった。

俺は待った。

とにかく待った。

祈りながら待った。

しかし、10分しても戻ってこない…

多分マッサージさせられてんだな〜何て良い方に考えていた。

30分経っても戻ってこない…

そっか！酒でもつき合わされてるんだ！何て考える。

ハルが俺の前に戻ってきたのは、結局1時間後であった…

ハルを見た俺は自分の目を疑った。

ハルの顔が左側だけ2倍近く腫れ上っており、頭には超でっかいたんこぶが…

血のついたTシャツはよれよれ…

汗でびしょびしょ…

腕と太ももは所々紫色。

あ~~~~~

あ~~~~~

イヤア~~~~~

ば〜れ〜た〜の〜ね〜

俺は何も言わず寮の外にある、上級生がこない裏の駐車場にハルを導く。

ハルも何も言わず俺についてくる。

駐車場に着いたが、しばらく沈黙が続く。

俺はタバコを吸いながら、申し訳なさそうに聞いた。

「何でバレたの？」

するとハルもタバコに火をつけ、ゆっくりと煙を吐き出し、夜空を見上げながらこう言った。

「休講だったみたい…」

???

俺は疑問に思った。

休講だったら元々出席しなくて良いのに、何でぶつとばされるのかと。

俺はすかさず「え？何で休講なのにぶつとばされるの？」と聞く。

するとハルは「カマかけられた」と答える。

どうやら出席カードの色をBに聞かれたので、パニックしたハルはつい「緑でした」と答えてしまったようだ。

(出席カードは出席日ごとに異なる)

これで代返に出なかったことがバレた。

休講だから出席カード自体配られることは無い！

これで！

バトルボーンスゲット！

ハルの証言を北斗風に例えると、

(スロット知らない人はだいたい理解してください！)

フフフ！(レインボーオーラ)

まずは物凄い赤オーラに覆われたBいや、ラオウ登場！

ラオウの右ストレートが10発ほど連続で顔面に打ち込まれる。

ハルいや、ケンシロウは倒れこむ。

さらに倒れこんだケンシロウに容赦なく蹴りが飛んでくる。

蹴りも収まり、倒れたケンシロウは「これで終わった」とホットする。

しかし！こんな時に限ってリングが出てきてケンと叫ぶ！

バトルボーンス継続！ラオウは「立てやコラア！」と…

またまたラオウの攻撃！

ついに出ました！ゴースヨーハ！

ラオウは右手に持った掃除用のほうきを振りかぶる！

ふらつきながらようやく立ち上がったケンシロウの頭にヒット！

ほうきは真っ二つに折れ、折れた片方は窓ガラスに突き刺さる。

ケンシロウの頭から青い血がブシューと吹き出る。

血を見て怯むかと思っただラオウは何と！

「だから立てつつつてんべ！」と叫ぶ！

バトルボーンズ継続…

この後の攻撃はよく覚えていないらしい。

しかし、ケンシロウの攻撃が確定する青いオーラが出ることは、  
1度も無かったことは言うまでもない。

怒涛の大連チャンで、気が付いた時は一人で倒れていたらしい…

気を失うほどのリンチなんてありえない…

いくら上級生でもありえない！

俺の怒りはピークに達した！

こんのラオウめ〜！

ケンシロウだってやるときゃやんぜ！

ついに下克上の始まりじゃ〜！

俺がハルの仇を取ってきてやる！

と言う気持ちがあることだけをハルに伝えタバコを吹かす…

ってなことが昔にあった…

そう！朝礼でミスった俺は、確実にラオウとの戦いが待っている。

俺もケンシロウいや、ハルのようになるのかと思うと胃がキリキリ…

とうとう練習の時間がやってきた。

やっぱり脱走は出来なかった…

冬練だったので筋トレがメイン。

いつものように淡々とトレーニングをしていると…

2年で唯一仲の良い金本先輩（仮名）が俺を呼ぶ。

金本先輩はいつも俺を「ウエッチ」とあだ名で呼ぶ。

しかし今回は「上田〜！」と名前で呼んだ…

この瞬間、俺はBに呼び出されたのだと知る。

超スーパーダッシュで金本先輩のもとへ。

金本先輩は悲しい顔をしながらBがバックネット裏で待っていると俺に言う。

その言葉を聞き、俺は大きく深呼吸をし覚悟を決めた。

金本先輩も無言だが「頑張ってこい」という目で俺を見送る。

恐る恐るバックネット裏に行くと、いきなりラオウが現れた。

突然耳を引つ張られ奥へと連れ込まれる…

「おめえ何だ朝の朝礼は？」

「なめてんのか？」

「あん！」

俺は「すみませんでした」と大きい声で誤る。

しかしラオウは「すみませんじゃねーよ」と言いながら俺の太ももに蹴りを入れる。

それも連発する。

ケンシロウは何とか耐える。

しかし10発目を超えたあたりから左足に力が入らなくなってきた。

ついに倒れ込む。

「立てやこらあ！」とラオウ

「すみません！」と言いながら立ち上がるケンシロウ

すかさず得意の右ストレート炸裂！

3発目でケンシロウ流血！

ラオウの攻撃を受けている間、不思議と恐怖心は無かった。

緊張で痛みもさほどない。

意外にもこの程度かと…

つてか俺はラオウに勝てると思ってしまった。

蹴りもパンチもこの程度かと。

確かに攻撃を受けるだけなので（避けると怒られるから）当たってはいるが、本気でタイマンOKなら、ラオウをボコボコに出来ちゃうかもと！

そんなことを考えていたので、殴られている最中も半笑いだつたことを覚えてる。

目も据わっていたと思う。

それを見て気持ち悪いと思ったのか？逆切れされると思ったのか？  
Bは突然殴るのを止めた。

「てめえ、次は無いと思えよ！」と言いながらその場を立ち去った。  
いつもなら「すみませんでした！」と頭を下げながら終わるのだが、  
今回は何も言わずに立ち去るBを半笑で見つめていた。

なぜか俺はこの瞬間「勝った!」と思った。

流血が酷く鉄の味がする口の中を舐めまわしながらボコボコの顔で…

また一つ肝が据わった。

その日以来、俺はBにやられることはなかった。

## 合コン

相変わらず1日1日を恐怖に怯えながら過ごしている1年にも、さ  
さやかな楽しみがあるのです。

それは練習が休みの日です。

休みにもランクがございまして、その決定権は上級生様次第であり  
ます。

前回の休みから次の休みまでに、どれだけ良い子にしていられ  
たかがポイントです。

Sランクは外泊OK！門限さえ守れば1泊2日は自由をゲット  
できるのです。

Aランクは外泊は禁止だが寮は出てOK。

Bランクは寮の周辺なら出歩いてOK…

Cランクは寮から出ちゃだめ…

Sは半年に数回…

ほとんどがA・B・Cの繰り返し…

その数回しかないSランクでの思い出を紹介します。

あれは寒い寒い、とても寒い1月下旬のことでした。

私達はようやくゲットした外泊日に合わせて合コンを企画していたのです。

お相手は看護婦！

何と1年のキャプテンが怪我で入院した時に合コンをセッティングしたらしい。

看護婦は4人！

こちらも4人！

山奥に住んでいる我々は1時間以上かけて、いざ花の都大東京へ！  
待ち合わせ場所に早めついた俺達は緊張しながら相手を待つ。

何せ数ヶ月ぶりの外出！

4人とも、それぞれの想いがあったのか、自由の喜びに浸っていたのか会話は無かった。

しばらくするとキャプテンが「こっち！こっち」と叫ぶ。

キャプテンが叫んだ方にすばやく目を向ける残りの3人。

うん？

2人しかいない。

どうやら残りの2人は遅れて来るらしい。

先に来たのは幹事の子と、その友達。

向こうの幹事はかなり可愛い。(あくまでも私の好みです)

と言うことは、先に顔を知っているキャプテンは間違いなく幹事狙い。

幹事がイマイチなら他の子狙い。

幹事が良ければ幹事狙い。

そう これは幹事の特権。

この暗黙のルールを破る奴なんていない。

しかも、ただでさえ、いつ休めるか分からない俺達の休みにタイミングよく合コンをセッティングしたキャプテンは偉いのである。

すると必然的に残り3人の争いとなる。

先に来ているもう1人の友達はと言うと…。

非常に残念な結果に。

(あくまでも私の好みです。ちなみに我々も人をどうこう言える顔ではございませんが、好みは自由と言うことでご了承を！)

となると、希望は遅れてくる残りの2人。

この2人をキャプテン以外の3人で奪い合うことが全員揃う前に決まった。

遅れてくる2人は後で合流することにし、先に店に向かう。

この移動中からバトルは始まっている。

そう！席位置の奪い合いだ。

通常は店に入った順に席に座る。

だから先に入った方が好きな席を選べるので得なはず。

しかし、ここで入れ込むのは素人だ。

よく考えてみなさい！

向こうの幹事と、その友達は先に来ている。

当然、幹事同士はお互い近い位置に座る。

しかも、恥ずかしがっている他の奴らより先に入店するため自然と奥に座る。

すると、幹事の友達は確実に幹事の隣に座る。

するとどうなる？

先に入るとキャプテンにロックオンされた幹事の子と、その友達に近い位置に座ることになるでしょ？

だから 今回の場合は後から来る2人にかけているのだから、一番最後に入った方が得なのだ！

しかも、空いてる席にしようがなく座った、自然な感じまで演出できる。

どうだ！この先を読んだ綿密な計算！

我ながらあっぱれだ。

しかしだ！

俺がいる位置は幹事2人+その友達と、ライバル2人の間を歩いている。

又オ〜！さすが俺のライバル達。

同じ計算をしてやがる。

フツ！こんなんでも勝ったと思うなよ

俺にはまだまだ引き出しがあるんだよ！

フツ！俺は決して焦らない。

素人はすぐに焦り、入れ込んだ感じを出しまくる。

それでは、まるで久々に外出できて、テンション上がりまくりで、久々に見た女に興奮しまくっている山奥の野球部みたいなもんだ…

そんな素振りを見せた時点で終わりだ。

いかに自然に、いかにさりげなく。

ギリギリまで動いてはいけない。

もうすぐ居酒屋の入った雑居ビルのエレベーター。

まだだ。

エレベーターに乗り込み目的の階へ上がる。

まだだ。

居酒屋に入り靴をげた箱に入れ、案内に付いて行く。

まだまだだ！

この時点でもライバル2人は俺の後ろを陣取っている。

フツ！それでいい。

ようやく席に案内され、みんなが座りかけたその時！

そう！今だ！

携帯が鳴ったことにして、慌てて外に出る！

ここで忘れてはいけないのがこの一言。

「ちよつと緊急だから先に乾杯してて」

この一言で、結構厄介そうな電話だから長引きそうだと思う。

そして、長引く奴を待つとシラケるので先に乾杯する。

乾杯するってことはみんなが集まる。

すると自然と幹事側の席が埋まる。

俺天才！

5分ほど時間を潰し、鳴っていないなかった携帯を閉じる。

どうよ！ライバル達！

前半戦を完全に圧勝した俺は上機嫌で席に戻る。

案の定、幹事側にみんな寄っている。

これで後から来る2人がどこに座っても近い位置は確保できた。

しばらくすると幹事の子の携帯が鳴る。

ようやく来たようだ！

フッ！ようやく俺の本領を發揮できる時がきた。

幹事の子が詳しく席位置を説明する。

残り2名、ようやく到着！

2名ようやく到着！

ようやく到着…

そうです。

到着してしまったのです…

俺は2人を見た瞬間、朝礼の日に指名されたかのように頭が真っ白に。

まず先頭に入ってきた彼女はぼっちゃり系いや、

ガッチリ系いや、

ごめんなさい！

どっからどう見ても太いのです。

体格が自分より、しっかりされているのです！

そしてさらにショックを受けたのが2人目の彼女！

俺はこの日以来、女性を見上げて会話したことは未だに無い。

185cm以上の彼女。

モデルさん？スポーツ選手？

背が高いのはかっこよいけど、俺も180cmはある。

さすがに俺より高いのは…（あくまでも私の好みです）

口を閉じても前歯が隠れない185cmの彼女。

俺のこれまでの綿密な作戦は何だったのか…

と、言うことで無事？全員揃い合コンスタート！

そりゃ〜話しは弾む弾む…

俺はとにかく飲み続けた。

会話なんて覚えていない。

確かぼっちゃり系の実家は長野の酒造だったとか…

しばらくして、そこそこに酔った俺は幹事側の席をふと見る。

なんとビックリ！幹事の友達が可愛く見える。

そうなんです。

男って、いくら自分の好みに合わなくても、その日の一番を無理やりにも選んでしまうのです。

もちろん幹事の子が一番だけど、そこには手を出せない。

だから幹事の友達は急激にランキングが上がったのだ…

2時間が経過し相当酔ってきた。

そんな合コンでも、滅多に外出できない俺達は楽しかった。

1次会は無事終わり、帰ろうかと男同士で相談したが、せっかくなので2次会のカラオケには行くことに！

しばらく歌っていると、遅れてきた2人は遅れてきたのに先に帰ると言い出し帰った…

それに合わせてライバル2人も出ていった。

後々聞いたのだがライバル二人は先に帰った2人を追いかけたのではなく、今回の合コンを諦めナンパに繰り出したのだ…

合コンで駄目だからナンパ…

酷い話のように聞こえるが、俺たちには滅多にない自由時間！

有意義に過ごさねばならない。

まだ上機嫌で騒いでいるカラオケの幹事同士は完全に良い感じ。

俺は帰ると言うタイミングを逃し、しばらく幹事に付き合うことに。

その頃の俺は相当酔っていた。

つてか泥酔寸前…

数時間が経っただろうか？

とうとう幹事の友達も帰ると言い出した。

どうやら幹事の子とその友達は看護学校の寮に住んでいるようで、カラオケから歩いて10分ほどだと言っ。

時間も夜中の1時を回っていたので俺は送っていくことに。

夜中に女性1人は危険と純粹に思ったから送ったのだ。

下心はもちろんゼロ！

多分ゼロ…

だってその証拠に、すぐ戻るつもりだったから財布も携帯もタバコも、ぜくんぶカラオケに置いてきた。

冬だったが酔い覚ましにと思い、上着も着てこなかった。

これが後でとんでもないことになるとは知らず。

泥酔の俺は「ここで大丈夫」と女の子が言うので、「また遊ぼうね！」と社交辞令をかましバイバイした。

だいぶ体も冷えてきたので、急いでカラオケに戻ることに。

来た道に戻るだけ。

そう！来た道に戻るだけである。

いくら見知らぬ街でも、10分ほど歩いた道を忘れるわけがない。

でもね…

俺泥酔…

ま〜〜〜〜〜つたく覚えてないの…

え〜え〜！そりゃ何度も来た道を思い出し、色々な道を試しましたよ！

右と左に道があれば両方試しましたよ！

でも全然カラオケにつかない。

真冬の1月に

酔いが覚めてきた頃、

Yシャツ1枚で、

街をうろつろ。

ライフラインの携帯・財布ございません…

所持金はズボンのポケットに入っていた152円。

まとめますと、泥酔後に酔い覚めし、見知らぬ街で、夜中の2時に、財布も携帯も持たず、Yシャツ1枚で、真冬の1月に都会で迷子になったのだ…

10分程度しか歩いていない道。

右が駄目なら左へ。

その曲がった先も右が駄目なら左へ。

全然分からない。

運悪く人通りも少ない。

しかしゼロではない。

それでもシャイな俺は中々聞けなかった。

だって真冬なのにYシャツ1枚でうろつろしてんだもん。

絶対怪しまれる。

でも、まじで寒い！

死ぬほど寒い！

だから聞いた。

優しいような女性に近づいて、「あの〜すみません!」と声をかける。

俺を見るなり「キャッ」つと言いながら走って逃げた…

そりゃそうだよな。

真冬にYシャツ1枚で、唇真っ青なんだもん。

でもとにかく寒い！

今度は男性に聞いた。

「この辺にカラオケボックスってありますか？」って。

すると男性は、「ないです」だって。

何でやねん！ここから10分以内には絶対あるもん！

さっきまで歌ってたもん！

って叫びたかった。

まだまだめげずに聞きまくった。

歯をガクガクさせながら。

すると5人目当たりで「カラオケ？あつ！そこを右に曲がったところに確か1件…」

「マジっすか！マジでカラオケあるんすか！」

感激のあまり大声で確認する。

「有難うございました！」でかい声でお礼をし、言われた通りの道をダッシュで戻る！

カラオケあった！

本当にあった。

でも何となくさっきのカラオケと違う気も…

でもこれだけ探したんだから、きっとここだと自分に言い聞かせエレベーターを上げる。

エレベーターが開く。

ドアには「本日は閉店しました」…

ここから壮絶な生死をかけた冒険が始まる…

## 冬

もう一度おさらいします。

場所は東京だが人通りの少ない田舎街。

現在の時刻は深夜2時。

持ち物は小銭152円。

季節は真冬の1月中旬。

夜の温度は氷点下に近く、冷蔵庫より確実に寒い…

靴はスニーカー。

ズボンはジーパン。

上着はダウンジャケットを着ていたがカラオケボックスにある。

部屋の中が暑かったので、ダウンの下に着ていたトレーナーも脱いでいた。

だから今はYシャツ1枚。

既にビール・焼酎を10杯以上飲んでいる。

今は酔いが完全に覚め、とにかく寒い。

そして何より迷子である。

1時間以上も寒い中歩き回り、ようやく見つけたカラオケボックスは閉店。

携帯・財布はカラオケボックスの中。

何とかなりそうので、何ともならないこの現実！

この時、初めて真剣に「やばい死ぬかも」と思った。

普段何気なく使っている携帯電話の有り難味を知る。

冬場、当たり前のように着ていたダウンジャケットの暖かさを思い出す。

やばい！手足が冷たくなり過ぎて痛くなってきた。

指も思うように曲げられない。

そろそろ限界だ…

この時点でカラオケ探しは止めた。

朝まで生き抜く方法を考えることにした。

まずはこの冷え切った体を復活させようとコンビニを探すことに。

いつも目にするコンビニもない…

東京とは思えないほど田舎だ。

ようやく見つけたコンビニで暖かいコーヒーを購入。

しばらく立ち読みしながらコンビニで温まるが、大量に飲んだ酒が睡魔を誘う。

「あゝ！ここに座りたい」

「出来れば横になりたい」

さすがにコンビニで寝ることはできない…

でも酔いと疲れで眠さがMAX！

しょうがなくコンビニを出て、安全に寝られるところを探すことにした。

ここは本当に田舎なので街灯すらまばらで真っ暗だ。

とにかく灯りを見つけ、栄えているところを探す。

しばらく歩くと、そんなに明るくはないが、駅らしきものが見えてきた。

「よし！駅で寝よう」とつぶやき早歩きで向う。

駅ビルと一体化し、コンクリートに囲まれて、軽くベンチがあるよ  
うな駅を想像した。

しかし、予想とは程遠い駅だった。

線路とホームだけしかなく、風がビュービュー吹き込んでくる。

このまま寝たら確実に凍死すると思い、辺りを見渡す。

うん？

あ！

ATMコーナー発見！

しかも24時間と書いてある！

急いで入る。

暖かい！

最高に幸せを感じた！

やっと寝れる！

すると！

先に入店？されていたホームレスの方が、「ここはだめだよ！」  
と一言。

俺は素直に「あ！すみません」と言い、慌てて外に出た。

出てから我に返り「なんでやねん！」と突っ込んだ。

縄張り？

しょうがなく他のATMを探す。

24時間空いているATMは1店舗しかなかった…

もう寒さの限界を超えている。

電話BOXに入る。

したからビュービュー風が吹き込む…

落ちていたダンボールに包まる。

嘘じゃなかった！

ダンボールって暖かい。

でも包まった部分だけが暖かい。

包まっていない部分が猛烈に寒い。

寒さのあまり、ダンボールに包まりながら、もっさもさに生えている植木に飛び込んでみる。

木と木の隙間から風がビュービュー吹き込む…

しかも飛び込んだから傷だらけになった。

木の枝で切った腕の血も、寒さのせいかすぐに固まる。

この寒さの中、Yシャツ一枚でうろついているだけでもおかしいのに、

頭や洋服に葉っぱがたくさん付いて、

傷だらけになって、

益々変な人になった。

もう何をやっても駄目だ。

ここに寝てしまおう。

以外と死なないかもしれないし。

ちょっと寝てみた。

物凄く眠いのに震えが酷く全く寝られない。

ふと思った。

東京でホームレスでもない大学生が凍死って。

「ありえね〜」とつぶやいた。

すると突然ひらめく！

ってか何でもっと早く気づかなかったのか悔しくなった。

小銭で公衆電話から助けを呼べば良いじゃないか！

さつきは寝るつもりで入った電話BOXに、今度は電話をかけるつもりで入る。

ポケットに手をつっこみ小銭を探る。

手をつっこみ小銭を探る。

小銭を探る…

手のひらには20円。

しかも10円玉1枚と、5円玉1枚と、1円玉5枚…

今の俺の全財産20円…

なぜだ？

さつきまで152円もあったのに。

あ~~~~！

コーヒー！

確か132円だった…

150円出して8円のおつりをもらった…

普段のように値段も気にせずコーヒーを買ってしまった。

俺はこの時、お金の大切さを改めて知る。

まゝ良い。

10円あれば話は出来る。

しかし数分で切れることを想定し、俺は頭の中で簡潔に助けを求める文章を作り上げた。

数回、口に出して練習もした。

完璧！

受話器を上げる。

プッシュホンに指を…

電話番号が分からない…

しかも誰にかける予定だったのか？

友達のアドレスは全て携帯電話に登録されている。

俺はこの時、改めて携帯電話の便利さを痛感した。

昔なら親しい友達の電話番号は暗記していたが、携帯電話になってから1件も覚えていない。

泣きたくなってきた。

酔っ払い、死ぬほど寒く、極限状態の中、ふと思いついた。

実家だ！

俺が今現在、唯一暗記している電話番号は110番、119番、117番と実家！

俄然やる気が出てきた！

今度は親バージョンで助けを求める文章を簡潔に作る。

やっぱり口に出し練習。

いざ！勝負！

トゥルルルル

トゥルルルル

トゥルルルル

トゥルルルル

トゥルルルル

トゥルルルル

……

頑張れ！起きろ！俺の親！

トゥルルルル

トゥルルルル

トゥルルルル

すると突然！ガチャッ！

奇跡的に誰かが出た！

すかさず先ほど練習した通り、早口で簡潔に話し出す。

「今ね、東京の…」と話したタイミングと同時に「ただいま留守にしております…」

しかし、俺は諦めない！

留守電にコメントを残すことにした。

しかし、先ほど練習したのは会話を前提にしていたので、留守電メッセージは考えていなかった。

しかし深く考えている時間はない。

既に電話はつながっている。

音声ガイダンスは3分以内でと言ってくる。

軽くパニックってしまい無言が続く。

とにかく助けを求めようと思い、ようやく話し出した。

しかし、時間もなかったため、かなり話しを省くことにした。

「助けてくれ」の「助け」まで言ったところで、100円分の通話時間を使い果たした…

不甲斐ない自分に切れる。

これじゃ何にも伝わっていない。

助けもこない。

こんなに話し方練習したのに。

でも俺は諦めなかった。

まだ10円ある！

しかし5円玉1枚と1、円玉5枚。

さっきのコンビニで10円玉にしてもらおう…

コンビニから今いる駅まで結構歩いたよな…

しかし、このままでは寒くて死んでしまう。

迷わず俺はコンビニに戻った。

本日2度目のYシャツ男を見たコンビニ店員は、明らかに嫌な顔をした。

いつもの俺なら、ここで怯み諦める。

しかし！

今日の俺は違う！

生きるか、死ぬかの瀬戸際なのだ！

俺はずかずか店員に近寄り、逆切れ気味に5円玉と1円玉をレジに叩きつける。

そして「両替してください！」と、何が悪いんだよ！的なオーラを出しまくりに言い放った。

すると店員は「1円にですか？」と冷めた口調で言う。

「はあ〜？」

こいつなめてんのか？

「何で5円を1円にする必要があんだよ！」っと、切れてやった！

すると店員は「両替じゃなくて10円にするんですね？」と、またまた冷静に言いやがる。

俺は小さな声で「お願いします」と言っただけ…

何はともあれ10円玉をゲットした俺は、極寒の外をダッシュで駆け抜け、駅に向かった。

再び駅に到着。

電話BOXに飛び込み、今度は留守電用の文章を考える。

しばらくしてから我に戻る。

ここから実家まで軽く2時間はかかる。

何だかんだで、今の時刻は明け方4時…

助けにきた頃は始発が出ている。

俺は冷静になり始発で帰ることにした。

が、しかし！

またまた問題発生！

始発が来たとしても電車賃がない。

現在の俺の全財産は10円である。

また考える。

深く考える。

寒さのあまりじっとしてられず、駅周辺を歩きながら考えていた。

すると交番発見！

何とかなるかも！

色々考えた末、交番でお金を借りてみようと考えた。

ゆっくりと交番に近づく。

かなりガツチリした体系の警官が立っていた。

「あの〜」と声をかける。

ギロツと俺を睨みつける。

警察なのに人相悪い。

しかも怖い…

何だか急にお金を貸してくれとは言えない雰囲気…

とっさに出た言葉は「財布の落とし物ありませんでしたか？」だった。

俺の思惑では、

財布を落とした大学生がいる。

お金がないから困っている。

困っているからお金を貸してあげよう！

と、こうなる予定だった。

しかし、警官は「届けられていません」と一言。

その後に警官からの言葉は何も無かった。

全く気の利かない空気の読めない警官だ！

俺は「そうですか・・・」と言い交番を離れた。

微かな希望がまた消えた。

その後も様々な事を考えたが、疲れきった俺にはうずくまるしかなかった。

やっぱり寒い。

駄目だ本当に死ぬ…

俺はもう一度交番に行き、お金を借りる決心をした。

交番に着くと、先ほどの警官ではなく、優しそうな警官に替わっていた。

この人なら言える！

そう思った俺は「財布を落として家に帰れないので、お金を貸してください！」と言った。

警官は「あらそう。大変だったね」と優しく言い、俺に千円を貸してくれた。

「普通はお金貸したりしないんだけど、君は誠実そうだから信じて貸すよ」と言ってくれた。

この時、本当に助かったと思えた。

俺は必ず近日中に返しますと言い残し、暖かい始発で帰宅した。

朝早く実家に着くと、母親が「昨日の夜中に悪戯電話があったのよ  
〜！怖いわね〜」なんてぬかしていた。

その翌日キャプテンから上着、財布、携帯を返してもらった。

昨日の結果を聞くと、キャプテンは幹事の子と「うまく」いったそ  
うだ…

俺が外で死にそうになっていたのに！

それにしても本当に優しい警官だった。

あれから13年ほど経過した。

あの時に借りた千円。

まだ返していない…

本当にあった話…

突然だった。

今まで感じたことのない、物凄い圧力を感じた。

しかも、確実に何かいた…

ここに居たらやばい！

1秒でも早く移動しなければ…

確実に何かが起こる…

なぜか慌てると良くない気がした。

俺は焦っていたが落ち着いて、ゆっくりと、そして静かに言葉を口にした。

「おい！今すぐ場所を変えよう！」

………

「何でみんな返事しないんだよ！」

「ほら！行くぞ！立って！」

俺は両隣に座っていたハルと高橋の手を取り立ち上がった。

二人ともうつむいたまま何も言わない。

「ほら！何してんだよ。早く行くぞ！」

無理やり二人の手を引きその場を離れた。

あれは8月のお盆を過ぎた頃。

昼間は熱中症で2人倒れるほど猛暑の中で練習をした。

山奥だからか、夕方には涼しいと感じるほど気温は下がってきた。

「キキキキキキ…」と、ヒグラシの鳴き声が遠くの山から聞こえてくる。

うーん！これぞ日本の夏！田舎の夏！

昼間の辛い練習を終え、ホッと癒される一時である。

し・か・し！

俺たちは荒れていた。

辛かった練習がやっと終わったのに荒れていた。

理由は「外禁」だからだ。

そう！外出禁止…

20日ぶりに明日が練習休みだったのに、俺たちは外出禁止をくら

っていた。

それも最低のCランク（休みランク）

原因は同期のマコトが、大学の図書館で本を盗んだのがバレたからだ…

しかも、「労働経済白書なんたら？」とか言う難しそうな本で、購入しても4000円程度の本…

もちろん、きつちり集合は受けました…

俺たちは4000円の本のせいで外禁をくらっていた…

（この詳しい話しは後ほどします）

まゝ理由も理由だが、外出できない事に変わりないため、1年同士で敷地内の駐車場で飲むことにした。

メンバーは俺・ハル・高橋・タミヤの4人。

片道30分かかるコンビニで酒とつまみを買ひ、まだ明るいうち19時頃から飲み始めた。

初めは外禁のショックで凹んでいたが、仲の良いメンバーなので飲み始めれば楽しかった。

気がつけば0時を過ぎており、ビール数十缶と2リットル入りの焼酎は既に空いていた。

会話は酔うと恒例になっているタミヤのUFO話し。

酔つと毎回タミヤが話すUFO目撃談だ。

タミヤの実家は東北で、じいちゃんが地主なので家がでかい！

俺も何度か泊めてもらったが旅館みたいだった。

2階は5部屋あり、10畳ほどある一番広い1室がタミヤの部屋だ。

タミヤは喉が弱く、クーラーが嫌いである。

そのため、寝るときは必ず窓を開ける。

その日もいつも通り窓を開け、電機を消してから床に就いた。

真っ暗の部屋に微かな月明かりが入ってくる。

そんな中、うとうとしていると突然！

全身が動かなくなった。

手や足を動かそうとするがピクリともしない。

やばい…

金縛りだ。

しかし、目だけは開く。

体は動かないため、目だけを動かし辺りを見渡す。

すると、キ~~~~ンと耳鳴りのような音が遠くから聞こえてきた。

その音はだんだん大きくなる。

「うお〜！おつかね〜」とタミヤは心の中で叫ぶ！

その音は寝る前に開けた窓の方から聞こえてくる。

耳が痛くなるほど音は大きくなってきた。

その時！

窓から！

小さいUFOが入ってきた！！！！

タミヤが言つには手のひらより少し大きかったと…

その入ってきたUFOは部屋を旋回している。

恐怖心もあつたようだが、UFOを捕まえようと思ひ体を動かす。

しかし全く金縛りは解けない。

部屋を5周ほど旋回し、タミヤの頭の上でしばらく止まった。

その場をフワフワ浮いている。

その直後、物凄い光を発せられ、タミヤは意識を失ったらしい。

目が覚めた時は朝だったようで、結局UFO捕獲は失敗に終わった。

この話しを必死に毎回する。

入学当初からしていた。

しかし誰一人と信じる奴はいない。

みんなは「円盤型のラジコンで、いたずらされただけよ」と笑って馬鹿にする。

この話を聞いた当初は「そのUFOにTAMIYAのマークついていたやろ？」なんて馬鹿にしていた。

(模型やプラモデルで有名なTAMIYAのことです)

しかし、タミヤは本当にあったのだと怒り出す。

ちなみにタミヤは本名ではなくあだ名で、本当は武井(仮名)という。

そんなUFO話して盛り上がっていたがネタもつき、続いて夏といえは恒例の幽霊の話になってしまった。

ぶっちゃけ俺は怖がりだ。

出来れば話題を変えたかった。

しかし、みんな過去の体験談や、噂話を始めてしまった。

赤い目をしたお婆ちゃんの話し…

校舎から兵隊が銃口をこちらに向けている話し…

廃墟になったホテルに子供の…

色々聞いたがどれもマジで怖かった。

こんな話しをしていると、「お化けさん」が寄ってくるなんて聞いたことありません？

だからなおさら嫌だった。

時計はちょうど夜中の2時を指していた。

俺の右隣に座って、怖い話をしていた高橋が急に話しを止めた。

随分と中途半端なところで話しを止めるので、おかしいと思い高橋を見る。

すると、高橋は目を見開いて一点を見つめている。

左隣にいたハルも下を向き青ざめている。

俺はふと高橋の見ている方向に目をやる。

今までに感じたことのない、物凄い圧力を感じた。

同時に黒い大きな影のようなものが見えた。

その影はとても大きく、人の大きさを遥かに超えていた。

ここに居たらやばい！

1秒でも早く移動しなければ…

確実に何かが起こる…

なぜか慌てると良くない気がした。

俺は焦っていたが落ち着いて、ゆっくりと、そして静かに言葉を口にした。

「おい！今すぐ場所を変えよう！」

……………

「何でみんな返事しないんだよ！」

「ほら！行くぞ！立って！」

俺は両隣に座っていたハルと高橋の手を取り立ち上がった。

ちょうど影の見た方向と真逆を向いて座っていたタミヤは何も気付いていない。

「え？何で？せっかく盛り上がってきたとこなのに！」とタミヤが言う。

俺は真剣な目で「いいから言うこと聞いてくれ！」と静かに話した。  
タミヤも俺の表情を見て、ただ事ではない「何か」に気付いたよう  
で、立ち上がった。

ハルと高橋はうつむいたまま何も言わない。

「ほら！何してんだよ。早く行くぞ！」

無理やり二人の手を引きその場を離れた。

休み前の寮は消灯がないため、4人は食堂に戻った。

4人とも酒ではなくお茶を口にした。

凄い勢いで飲みほし、俺は重い口を開いた。

俺「とりあえずタミヤは何も言わずに聞いていてくれ」

タミヤ「わ、わかった」

俺「まず高橋！お前何を見た？」

高橋はまだうつむいている。

俺「おい、どうしたんだよ？もう大丈夫だよ！」

高橋は小さく頷いた。

高橋「白い女を見た。それもかなり大きかった。階段をエスカレー

ターのように上がっていったんだ。」

俺「白い女？」

高橋「そう。見た瞬間すぐに分かったよ。見ちゃいけないものだったって」

俺「そっか…」

続けてハルにも質問をした。

俺「ハルは何で下を向いていたの？」

ハル「俺は高橋が急に目を見開いたから、その方向を瞬時的に目で追ったんだ。そしたら俺はとて大きい手ひらがこちらを向いて通り過ぎるのが見えた。きっと高橋が言っている女の手だと思う」

俺「…」

ハル「で、お前は何を見たの？」

俺「俺は黒い大きな影を見た。確実に白ではなかったと思う。」

すると突然高橋が言った。

高橋「そっだよ。白い女の後に黒い影ができてたよ」

タミヤ「おい！おい！おまえらマジかよ！4人いて3人が同じもん見たのかよ！」

タミヤは続けた「本当に人じゃなかったのか？見間違いだろ？」と

3人に聞く。

3人は本当だとも、見間違いだとも言わなかった。

大きさ、色、移動スピード、変な圧力、3人が同時に見た事、どれを取っても普通でないことは確かだった。

俺は正直影だけしか見てないので、何とも言えなかったが：

ただ、物凄い強い圧力みたいなものを感じたのは事実だった。

翌日には、この話が寮中に広まっていた。

どうやら、俺達が話していた場所は、「首塚」だったらしい。

その場所は30分かかるコンビニへの近道で、寮に住んでいれば誰でも通る場所。

しかし、なぜか先輩の中で近道を使わない人達が多かったことを知っていた。

その場を通った先輩で、急に吐いてしまったり、頭痛がひどくなったりと色々あったようだ。

昨日見た「白い女」とその場所の関係は未だに分からない。

それ以来、俺達は遠回りしてコンビニへ行くようになった。

いやマジの話ですみません。

俺もこの日に見たのが最初で最後！

才子無しです。

## マコト

皆さん覚えていますか？

お化けの夏の日。

外禁の理由。

そうです。

あの馬鹿のせいで…

俺達は、

数日前に集合を受けていた。

異変を感じたのはマコト本人を見た時。

俺は食事当番だったので朝5時には起きていた。

当番でないマコトも起きている。

俺は気になりマコトを見ると、なぜか「5厘刈り」になっていた。  
(バリカンのアタッチメントを外した状態で髪を刈ると一番短い5厘刈りとなる)

そして、うつむいている。

あまりに元気のない顔をしていたので、俺は心配になり「おはよ！

その頭どうした？」と聞いたが、うつむいたまま「行ってくるわ」と言い、外に行ってしまった。

俺はとても嫌な予感がした。

その日は午前中に学校で、午後から練習という予定が組まれていた。いつも通り、学校から戻り練習が始まる。

しかし、気になるマコトがいない。

さらに4年生のキャプテンもいない。

おまけに監督もいない。

これは、ただ事ではない何かが起きていると俺は核心した。

5厘刈りのマコトを目撃しているのは俺だけのようで、周囲はその異変に気付いていない。

俺は一人でドキドキしながら練習をこなしていた。

2時間ほど遅れてキャプテンとマコトが練習に合流してきた。

練習帽を取り、「こんにちは〜！」と馬鹿でかい声で先輩達に挨拶するマコトは間違いなく目立っていた。

当然この直後からざわつきだす。

「あいつ何で5厘なの？」この話題で持ちきりだ。

5厘であることは知っていたが、その理由は俺も知らない。

練習中に無駄話など見つければ集合になり兼ねないので、気になりながらも練習をこなす。

辛くて長い練習もようやく終わり、上級生が帰った頃に1年が集まった。

そしてマコトに何があったのか聞いた。

すると本人の口から衝撃の事実が…

「みんなごめん。俺…万引きで捕まった…」

……………

しばらく無言が続く。

俺は気になり「何をどこでパクツたの？」と問う。

マコトは「学校の図書館で本をばくつたのが見つかった…」と。

正式に言えば間違えて鞆に入れてしまったらしく、気付かず外に出してしまったようだ。

そのお詫びとして学校側に監督、キャプテンに同行してもらい、謝罪に行ったらしい。

5厘はその誠意として…

マコトに悪意が無かったのは明らかだった。

理由は「労働経済白書なんたら…」というまじめな勉強のために必要な本であること。

買っても400円程度の本であること。

マコトは俺たち以上に勉強が必要であること。

99%のメンバーが野球推薦で入学している中、マコトだけは一般入試に合格し、さらに野球部のテスト（実践）にも合格し、入部してきている。

推薦入学のメンバーとは学部も異なり、文武両立しなければならぬ厳しい立場であった。

（野球推薦メンバーの学部は比較的单位が取りやすい）

こんなマコトの状況を知っている他の1年は、今日中に集合があることを確信していたが、誰一人怒ることはなかった。

「ちょっと理由はギャグっぽいけど、みんなで集合乗り切るべ！」と1年のキャプテンが明るく言った。

みんな自分も励ますかのようにマコトに声をかけ「頑張るべ！」と元気づけた。

寮に戻ると、「今日は指示された奴だけ集合じゃ！選ばれた奴はすぐグラウンドに来い！」と小林集合隊長（仮名＋補欠）

で、でた〜！初の選抜集合！

しかも食堂ではなくグラウンドで！

相当な集合になると容易に想像できた。

俺はまた祈った。

「神様どうか今日だけは選抜メンバーに選ばれませんように！」

寮に戻るとすぐに食堂へ集まり、選抜メンバーが発表された。

2年のキャプテンが選抜メンバーを読上げる。

「マコト！ 高橋！ タミヤ！ バーゴン！……」

結局28名いた1年のうち20名が選抜された…

しかし！

また奇跡が起きた！

俺は呼ばれていない。

「神様やっぱりいるんですね！有難うございました！」と心の中でガッツポーズ！

早速、選抜メンバーは移動用のトラックに乗り込む。

まさに地獄行きの車…

残りのメンバーが選抜メンバーを見送る。

俺は目の合った2年のキャプテンに「頑張ってください!」と深く頭を下げた挨拶をした。

キャプテンは不思議そうな顔で俺を見る。

するとキャプテンは「あれ?お前呼ばなかったっけ?お前もだよ。」

.....

ショックで数秒ほど頭が真っ白になったが、ふと我に帰る。

「そうですよね?自分もおかしいと思ったんですよ」と言いながらトラックに乗り込んだ...

天国から地獄。

落ちるのが早かった...

見送る側から見送られる側に。

1年20名と2年8名の合計28名が火の車に乗り込み地獄へ出発した。

食堂ではなくグラウンドで行う集合は初めてと2年は言う。

俺は移動中なのに3回目の「脱走」という2文字が頭に浮かぶ。

この状況ではどう考えても無理だった…

あっという間に地獄へ到着。

既に上級生側のベンチには、キャプテンをはじめとする主要メンバーがお揃いだ。

集合選抜メンバーはグラウンドに入ると上級生ベンチ前に急いで駆けつけ、正座し、手を後ろに組み、目を閉じた。

キャプテンは一番にマコトを呼び出し「てめえくみてえくな奴は前代未聞だ！」と怒鳴りながらマコトをサウンドバックにした。

俺は薄めで見えていたが、半端じゃなかった。

今回はマコトがメインなので、選抜されたメンバーはなぜ呼ばれたか？が不明である。

どっちにしても、ついでにやられる。

「ついで」に選ばれた俺は、「ついでに」やられる理由も分かっていた。

数日前の練習中の出来事。

4年～1年が1組となり、筋力トレーニングを行っていた。

1年はトレーニングと同時に、かけ声をかける役目もある。

「腹筋行きま〜す！」と叫び、1〜50までの数字を2秒間隔ほど

で数えていく。

俺は2年の安藤さん（仮名）とペアを組んでいた。

俺は腹筋をする安藤さんの足を押さえ、声に出しながら数字を数えていた。

「イチ！ ニ！ サン！ シ！ ゴ！……」

そう！今でも忘れない。

腹筋も終盤の44回を越えた時だった。

次の「45！」と叫んだ声と同時に「バフツ！」と安藤さんが屁をこいた。

足を押さえていた俺は確実に風圧を感じた。

安藤さんは出た瞬間「ハッ！」と声に出し、恥ずかしそうな顔をした。

同じ組の3、4年生には、屁の音より俺の声の大きさが勝っていたため、聞こえていない。

俺は安藤さんの恥ずかしそうな顔と、タイミングの良い屁に笑を我慢できなかった。

笑ってはいけない時ほど、笑いたくなるもんだ。

しかし数字は45！

後5回で終わる！

乗り切れ俺！

48まで何とか乗り切った！

このままいけると確信した瞬間だった。

「49！」と同時に余震がきた。

「プウ〜」と可愛いやつが。

俺は最後の50を笑いながら叫んでしまった。

こんなの笑わない奴はいない。

安藤さんの「畏」としか思えない。

何も知らない3、4年は「何がおかしいんや？」と俺を睨む。

「すみませんでした」と俺は謝る。

安藤さんは俺を見るなり、「すまん」と小声で言った。

しかし、俺は完全に目を付けられてしまったことを確信していた。

グラウンド集合も終盤に入った頃、やはり俺は前に来るよう呼び出された。

屁の事件があった時と同じチームの4年生に。

4年の前に正座する。

いきなり顔面に蹴り3連発。

3発目に後ろに倒れる。

「起きろやあ！」と4年生。

再び正座。

今度は腹にトーキック！

息が吸えない。

もがき苦しむ…

変な汗が大量に吹き出てきた。

マジで死ぬかと思った。

しばらくのた打ち回り、数分後にようやく息が整ってきた。

その頃は集合が終わっていた。

本当に死ぬかと思ったが、「内臓って思っているより頑丈なんだ」と関心する。

腹の痛さは残っていたが、集合が終わったことに安心する。

しかし、この日の事件はこれで終わりではなかった…

## 武田鉄也

前代未聞のグラウンド選抜集合もようやく終わり、地獄寮に歩いて戻る俺たち。

蹴られた腹がズキズキ痛む。

1年20名中18名が何かしらの教育を受けていた。

通常の集合でやられるのは多くても4〜5人。

これを考えると選抜集合のヒット確率は驚異的だ。

もう二度と選ばれたくない和本気で思った。

ほとんど会話もなく寮に着く。

既にクタクタだが集合が長かったので消灯までの時間がない。

消灯は23時。

現在20時…

一見、時間があるように感じると思うが、ここからもバトルだ！

まず何よりも優先で先輩の洗濯をこなす。

洗濯機は8台で、うち4台は全自動だが残りは二層式。

(二層式は洗濯と脱水が分かれているため、時間を見計らって入れ替えなければならぬ)

8台あっても上級生は30人以上…

だから洗濯機の取り合いが何より激しい！

順番をキープするために、洗濯機の前に数十個の選択カゴが並ぶ。

次に飲んでいる先輩のつまみを作り、その間に自分たちの食事を済ませます。

通常であれば、次に終わった洗濯を干し、先輩達のアカが浮きまくっている濁った風呂に入る。

しかし！今日に限って！

先輩達の焼酎が無くなったようで、運悪く買い物頼まれる…

片道30分かかるコンビニまで2リットル入りの焼酎を買いに行く。

しかも30分以内を買ってこいと指令を受ける…

片道30分かかるのに、30分以内って…

しょうがなくタクシーを呼び20分ほどでノルマを果たす。（タクシーは自腹）

この20分のロスを取り返すために自分の洗濯は諦め、その後に食器荒いと食堂掃除をし、先輩のスパイク磨きをする。

これでギリギリ22時50分。

消灯後に起きていたから集合！何てザラにあるため1年は大急ぎで部屋に戻る。

これでようやく寝れる。

本当に今日は長かった。

「ふう」と長いため息をつき俺は床に就いた。

部屋の先輩達は飲み会をしている。

普通ならつるさくて寝れないが、疲れているので問題ない。

「また明日も練習か〜」なんて考えながら眠りに着いた。

.....

「いいから飛び込め！」

先輩が俺に指示をする。

10m近くある崖から川に飛び込めと命令された。

俺は恐怖で中々飛び込めない。

下にいる先輩の顔が引きつってきた。

やばい。

これ以上引つ張ると殴られる。

俺は目を閉じながら川に飛び込んだ！

バツシャーン！

うん？

なんかやばい。

全然水の中から出られない。

い、息が吸えない。

助けて！

誰か助けて！

苦しいのに先輩達は笑っている。

その顔が信じられない！

この人達はやっぱり鬼だ。

やばい。

マジで死ぬかも！

「ゴバツ！」っと口から水を吐き出す。

それと同時にパンチが飛んできた。

意味も分からず、とりあえず謝る。

よく見ると自分のベッドにいる。

そして口の中が酒臭い。

うぐん？

あっ！

ようやく現状を把握した。

口を明けて寝ている俺に、酒を飲ましてくれたいらしい…

夢の中で必死にもがいていた俺は、ベッドから飛び起きる瞬間、先輩の顔を引っ掻いてしまったらしい。

それで殴られたようだ…

すかさず先輩は「てめえ、指が目に入ったべ！」と怒ってる。

俺は慌てて謝る。

「一気しろっ！これ一気したら許してやる！」

先輩が差し出したコップは大ジョッキになみなみ注がれたウイスキー

！…

おいおい寝起きでジョッキでストレートかよ…

でも殴られたくない！

「いただきます！」

覚悟を決めたものの、半分ほど飲んだところで心臓が有り得ないほど早くなってきた。

完全に体が拒否反応を示している。

口を付けたままバレないように数回休む。

少しずつ流し込み、何とか飲み干す。

さすがにジョッキでウイスキーストレートの一気は誉めてもらえないと思ひ、先輩の顔を得意げに見る。

すると先輩は笑顔でこう言った。

「酒が無くなったやないかい！」

…

「す、すみません！すぐに買ってきます！」と言っしかなかった。

「オウ！んじゃついでにつまみも買ってこい」

…

まゝ結局つまみと酒が無くなったので、おつかいを頼みたかっただけだ。

随分と手の込んだ頼み方だ。

俺は注文を取った。

「一度しか言わないからメモを取れよ！」

「はいっ！」

んなこたあゝ言われなくても1年はみんなメモ帳とペンは常備している。

「聞き直すと殴るくせに！」と心の中で抗議した。

5人の先輩が次々にオーダーする。

「えつとね〜、

焼酎2リットルと〜、割る用の烏龍茶と〜、氷5袋と〜、ビーフジャーキーと〜、ポテトチップス2袋と〜、たこ焼きと〜、唐揚げ君3個と〜、ピンクレディー3個と〜、ガリガリ君5個！

あ、あと武田鉄矢も2個ね！

こんだけゆっくりオーダーしたんだから完璧だよな？」

「あ、はいっ。でもピンク…」と俺が言いかけた時に「完璧だろ？」と先輩が言葉を被す。

俺は慌てて「はいっ！完璧です」と答えてしまった。

先輩は続けて「よし！今日は特別に30分時間をやる！さっ行ってこい！」と笑顔で言った。

特別に30分って、いつもと変わらないし、普通に歩けば片道で30分だっつゝの！と怒りながら準備をする。

30分…

この時間ではタクは拾えない。

俺は迷わずおつかい専用自転車に飛び乗りコンビニに向かった。

向かう途中で聞けなかつた疑問の答えを考える。

「…から揚げ君3個と〜ピンクレディー3個」???

ピンクレディー…

「あ、あと武田鉄也も2個ね」???

やばい…

どうしてもピンクレディーと武田鉄也が分からない…

色々考えたが答えが出る前にコンビニ到着。

先に分かる物だけカゴに入れる。

さて、ピンクレディーと武田鉄也って何だろ？

コンビニを隅々まで見たが、そんな品名の物はどこにも無い…

どうしたものか。

そうだ！

誰かに聞こう！

しかし、この難題を誰が解けるか？

俺はおつかい隊長のバーゴンに電話した。

携帯に出ない…

頭の良いマコトに電話した。

やっぱり出ない。

時計を見ると夜中の2時…

そりゃ出ないわな…

やばい、後15分を切った。

俺は再びコンビニをぐるぐる。

眠いし、一気したウイスキーを吐きそうだし…

全く思い当たらない。

コンビニから寮まで自転車（立ちこぎ）で10分。

寮を出てから既に15分が経過。

となると、コンビニにいれる時間は後5分…

5分でピンクレディーと武田鉄矢を解読しなければならぬ。

考えながら、ふとカップラーメンコーナーの陳列棚を見ると！

テ〜レ〜

テ〜レ〜

テ〜レ〜レ〜

UFO

発見！

ピンクレディー＝焼きそばUFO！

1件解読！

なるほど。

このレベルで考えれば良いのね！

ってことは武田鉄矢もカップラーメン系か？

贈る言葉？

金八先生？

僕は死にましえん？

うん？

又オオオオオ！

マルちゃん！

マルちゃんや！

赤いキツネと緑のタヌキ！

武田鉄矢がCMしてた！

俺天才

しかし武田鉄矢は赤と緑が…

せっかく解読したのに色違いで怒られるのは嫌だ！

ここは両方買って、違った方を俺が買い取ることによろう。

ちなみにピンクレディーにも普通サイズと大盛がある。

少ないより多い方が良いはず。

だから大盛を買った方が無難。

が、しかし！

以前、コーラを頼まれて買った時、350ml缶を買ったら殴られたことがあった。

その先輩は250ml缶が適量で気に入ってたらしい…

同じ値段なのに…

そんな先輩の好みまで把握する必要がある。

結局UFOも両方買うことにした。

これで頼まれた物は全て買った。

時計を見ると残り10分！

立ちこぎじゃないと間に合わない！

チャリにカゴがないので、ハンドルの両方に買った物をぶら下げ、めっちゃこぐ。

とにかくめっちゃこぐ。

ブレーキしないでめっちゃこぐ。

カーブも気にせずめっちゃこぐ。

街灯なくてもめっちゃこぐ。

とろい軽自動車を追い越す。

そして最後の難所！

200m以上続く下り坂のモンスターカーブが見えてきた。

もう何十回も曲がってきたこの坂。

いつもノンブレーキで曲がっているこのカーブ！

俺はオートレーサーばりに体を横に倒し曲がる方向に重心移動する。

キュルキュルキュルとタイヤから煙を出しながらドリフトで曲がりきる！

見事成功！

このスピードで曲がりきった自分に酔う。

そして、ちょっとかつこ良いと思っている。

夜中の2時過ぎに物凄いスピードで自転車に乗った大学生がドリフトでカーブを曲がりきった。

しかし！

いつもと違うことが1つだけあった。

2リットルの焼酎をハンドルにぶら下げていたこと。

カーブを曲がると同時に遠心力で2リットルの焼酎が飛び出しそう！

何とか飛び出さずカーブを曲がりきったがその直後！

すごい勢いでハンドル側に戻ってきた。

その反動でハンドルがグリングリン揺れる。

物凄いスピードなのにハンドルがグリングリン！

この感じ分かります？

スピードが速すぎるもんだから、ぶれ出したハンドルを自分の意思では元に戻せないほどグリングリンしちゃう感じ。

その後はもちろん！

ご想像の通りです。

畑にノーン…

夜中の2時過ぎに自転車に乗った大学生が物凄いスピードでカーブを曲がり、ハンドルにぶら下がっていた焼酎のせいでハンドルがグリングリンしちゃって畑に突っ込んだのです。

街灯のない真っ暗な畑にピンクレディーや武田鉄矢が飛び散る…

耕してあったので、すり傷程度で済んだ。が！

せっかく買った品物が畑に散乱している。

とにかく急いで拾い集める。

しかし足りない！

ガリガリ君1個と、解読に成功した緑のタヌキがなぐい！

田舎の上に裏道なので街灯も無いため、よく見えない。

ライターで照らすが範囲が小さくて探せない。

やばいやばい！

時間もなしタヌキもない！

灯りがないと、どうにもならない…

そうだ！

自転車をこげば灯りがつく！

しかし、後ろタイヤを持ち上げるタイプの自転車スタンドじゃないため、走らなければ灯りはつかない。

俺はハンドルがグリングリンし始めた辺りまで戻り、もう一度灯りをつけて走る。

しかし、かなりのスピードを出さないと明るさが出ない。

だけど、カーブなのでスピードを出すと灯りが照らされるのは一瞬。  
ちやうど良いスピードに調整しながら畑を照らす。

なんと一回目で泥まみれのガリガリ君を発見！

よしよし！

この調子！

残りは緑のタヌキだけ！

もう一度自転車をこいで畑を照らす。

しかし3往復ほどしたが見つからない…

コンビニまで戻って買い直した方が早いかもしれない。

しかし、コンビニまで戻れば完全に遅刻。

このまま寮に向かえば何とかなる。

しかも探している緑のタヌキは必要無い可能性もある。

俺は赤いキツネにかけた。

もうダッシュで寮に戻る。

自転車を投げ捨てて部屋の前に。

上がった息を整えドアをノックする。

「失礼します！只今戻りました！」とドアをゆっくり開ける。

すると2年の先輩が宴会の後片付けをしている。

先輩は一言「もう終わったよ」

.....

この壮絶な30分間は何だったのか？

この時初めて泣いたよね。

殴られても、蹴られても泣きはしなかったけど。

今回は本当に頭使って、体張って、頑張ったもん俺。

俺は泣きながら半分融けたガリガリ君を食べた。

その数日後にコンビニに言った2年の先輩がこんな事を話していた。

裏道の畑に生えている木に緑のタヌキが突き刺さっていたと。

## 儀式

9回裏2アウト満塁。

2点差で負けている。

4年生最後の秋季大学リーグ戦。

監督が審判に代打を伝える。

代打「B」！

ベンチ入り出来なかったオウメン（レギュラーにはほど遠く、終わっているメンバーの略）はスタンドから応援する。

野球の実力に学年は関係ない。

実力があれば1年だってベンチ入りできる。

小さい頃からエースで4番！

高校時代も4番を打っていた俺！

もちろん！

スタンドにいた…

1年はみな声援を送っているが心の中では三振しろ！と祈っている。

クソ4年は威張っているくせに野球は弱かった。

この試合に勝ったとしても5位が決定している。(全6チーム中…)  
しかし、勝ってしまつと1勝1敗になり明日も試合になってしまう。

1日も早く4年とおさらばしたい。

だから1年だけでなく下級生は全員Bに向かって「てめえ」三振しろ！」と心の中で叫んでいた。

9回裏2アウト満塁カウント2ストライク3ボール！

ピッチャーがセットポジションに入る。

緊張の一瞬！

ピッチャーが投球モーションに入った。

一斉に走者がスタートを切る。

ピッチャーの指先からボールが離れる。

Bは高く足を上げスイング態勢に入る。

スイングしたバットがホームベースの上を通過する。

ボールもホームベースの上を通過した！

「バシッ！」

キャッチャーミットにボールが収まる！

「ットラ〜イク！ゲームセット」

審判が大きな声で叫び試合が終了した。

と、同時に4年の野球部生活も終わった

俺たちはグラウンドのメンバーにはれない程度で喜ぶ。

まだ下級であることに変わりはないが、洗濯・掃除・食事・マッサ  
ージ・おつかいなどの頼まれ事が減るだけで嬉しいのだ！

数日後、4年生は全員寮を出て行った

秋季リーグ戦が終わったのが10月。

次の4月に新1年が入ってくるまでの約半年間は1〜3年だけになる。

しかし、この半年間で立場が大きく変わるのだ。

まず3年は4年が抜け、天下を取った顔つきに変わる…

次に2年！

この2年の変化が一番大きい。

そうです。

1月の成人式に！

なんと上級生になれるのです。（条件付）

と、言うことは…

1月～4月までの間は2・3年生が上級で1年だけが下級…

俺たちは知らなかった。

結局4年の仕事が無くなっても、2年が上級になるために仕事量は変わらないのだ。

ま～4月までの間だ。

頑張るべ…

あっという間に成人式の日が来てしまった。

2年が上級になれる日。

1年が下級に取り残される日。

まさに天国と地獄。

では上級生になるための条件を説明します。

ま～一般的に成人式と言えば、地元で指定された会場に集まり、昔の仲間と酒を飲む！

なんて同窓会チックに楽しいイメージですよ？

あまい！あまい！

男たるもの成人式は寮で祝うもの…

そうなんです。

地元の成人式には出られません。

いつもより早めに練習が終わり、18時頃から寮の食堂に集まるのです。

スーツや袴など着ている人は1人もいません。

むしろ、よれよれのど〜でもよさそうなジャージで集まります。

食堂にはあり得ない量の日本酒が並べられています。

つてか1年が買いに行ってきた。

紙パックに入った1.5リットル入りの安い日本酒30パックを・

これを2年生が上級になるために飲み干すのです。

いよいよ成人式が始まりました。

上座に3年生。(バリバリの上級生)

その前に2年生。(間もなく上級生)

一番後ろに1年が座ります。(まだまだ下級生)

初めに3年生のキャプテンから2年生に対し祝辞を述べます。

次に2年生のキャプテンからお礼の言葉を述べます。

そして乾杯!

しばし、ご歓談を。

1時間ほど経過してから3年がざわつく。

ラーメンどんぶりになみなみ日本酒がつがれていきます。

いよいよ儀式の始まりです。

3年生から次々に2年生が指名されます。

指名された2年生は前に立ち、なみなみつがれた日本酒を手に持ち一言述べる。

そして一気に飲み干す。

ここで一気に飲めなければ、再チャレンジとなり後回しとなります。

そうなんです。

上級生になる条件とは、ラーメンどんぶりになみなみつがれたクソ安い日本酒を一気に飲み干すことなのです。

酒の強い人でも一撃でやられる致死量です。

飲んでいる途中で吐き出す人。

せっかく飲み干したのに、直後に吐き出す人。

そんなこんなを繰り返し全員が飲み干した頃には全員グデングデン。

食堂の床は酒とゲロと何だか分からないものでびっちゃびちゃ。

1年は酔い潰れている2年生を部屋まで運び出し食堂の大掃除：

1年には何のメリットもない成人式がようやく終わりました。

ついに下級生は1年だけになってしまった。

次の日からガラッと変わる2年もいれば、前と変わらずに接してくれる2年もいる。

総体的に見るとレギュラーの人達はそんなに変わらないが、補欠に限って威張り腐る。

野球で実力を発揮できない奴ほど、野球意外で威張っていないと威厳を守れないからだと思う。

で、昨日まで下級同士の会話をしていた、補欠の2年生内山（仮名）！

こいつが凶変したのはあの時からだ。

## 痛い沼

2年が上級になってから1週間ほど経過した1月下旬。

山奥はかなり寒い。

池や沼は凍りつき、屋根には氷柱が出来るほど。

そんな中でも冬練は毎日続く。

筋力トレーニングが中心の冬練は夏と比べ早めに終わる。

その日も午前中には練習が終わった。

グラウンド整備・ボール拾い・後片付けを行い、上級生全員が寮に帰ったのを確認してから、俺たち下級も寮に戻ることに。

ほとんどの上級生は寮までトラックに乗って帰る。

俺達たち下級は片道20分ほどある寮までの道のりを歩いて帰る。

舗装された道路を通ると20分。

しかし、山の中の獣道を通ると15分程度で帰れる。

当然、俺たちは近道を選んで帰る。

クタクタの体で獣道を歩いていると、嫌な奴に遭遇してしまった…

そう、成人式から凶変したバリバリ補欠の内山（仮名）！

1年の間では、下級時代に目立たない存在だったくせに、上級になった翌日から凶変した内山を良く思っている奴は1人もいなかった。

その内山が俺たち1年に気付く。

獣道の下にある凍った沼と、俺たちを見ながら不敵な笑を浮かべている。

俺たちは確実に何かされると察した。

下級時代は俺たち1年でも名前でも呼んでくれていた内山が

「おい！クソ1年！」と俺たちを呼ぶ。

内山だけならタイムンでも余裕でボコボコに出来る。

態度に出して「お前は調子乗ってんじゃねーよ！」と言ってやりた  
い。

しかし、内山が気に障る態度や言動をした瞬間、他の上級に話しが  
行ってしまっ。

すると当然「集合」が待っている。

したがって、1年がどんなにむかつく先輩でも態度に出すことは出  
来ない。

それを知ってか知らずか内山は「お前ら沼に降りろ！」と一言。

俺たちは内心むかつきながら、1秒もずれることなく全員で「ハイッ！」と切れの良い、嫌味のない、爽やかな返事をする。

その場に8人いた1年は全員転げ落ちるように凍った沼に降りた。

8人全員が沼に降りると、内山が「全員手をつないで輪を作れ！」と指示する。

俺たちは荷物を丘に置き、凍った沼の上で輪を作る。

予想はしていたが、この一言。

「全員でジャンプしろ！」

…

あのね、凍っているとは言え、数センチですよ！

しかも凍ったのは夜中。

現在は昼間！

所々確実に融けだしている。

俺はクソ内山にばれないよう、みんなに小さな声で案を提示した。

「普通にジャンプしたら確実に氷が割れる！だから膝を使ってジャンプしているように見せようぜ！」

みんな目でOKサインを出す。

そしてゆっくりと、極力氷に負担がかからないよう、膝を使って上  
下運動する。

沼全体がユサユサ揺れている感じがする。

今にも割れそうな沼から、内山を横目でちら見する。

中々割れない沼にイライラしている。

しばらくすると内山は「もっと高く飛べや!」と一言。

俺たちはむかつきながらも「ハイッ!」と気持ちの良い返事をする。

すると突然!

俺の隣で手をつないでいた高橋が消えた。

それと同時に沼に手を引っ張られる。

高橋は一気に胸まで落ちた。

俺は必死で高橋の手を引き上げる。

高橋は何か言っている。

「痛い!痛いって!」

みなさん知っていますか?

水って冷たすぎると痛いんです！

しかも急に落ちた高橋は体がビククリしたようで、筋肉が固まっている。

これはやばい！と、思った俺は高橋の手を強く握り直した。

続いて足を踏ん張り引き上げようとした瞬間！

バツシャーン！！！！

俺も沼に落ちた…

しかも！

俺の方が深い場所だったようで、一気に頭まで全部潜った。

水の中から落ちた場所を見上げる。

田舎の山奥だから水は綺麗に澄んでいた。

みんなの慌てた顔までよく見える。

あまりの冷たさに体が固まる。

筋肉が固まっているせいか、浮き上がらずに沈んでしまう…

やっぱり水が痛い…

心臓がギュインと収縮したのが分かる。

まるで悪魔に握り締められているようだ。

こりゃマジで死ぬかもと冷静に思った。

となりの高橋もまだ落ちたまま…

俺の手を引き上げようと、高橋の逆側にいたハルが強く引っ張る。

「ハル！頼む！そのまま上げてくれ！」と、心の中で祈る。

すると案の定！

バシャーン！！！！

ハルも落ちる…

手を引っ張ろうと足を踏ん張ると氷が割れる。

誰か落ちる。

隣が引っ張る。

氷が割れる。

そいつも落ちる。

これを6人目まで繰り返した。

初めに落ちた高橋の顔は真っ青、唇は真紫…

さすがにやばいと思ったのか、上で笑いながら見ていた内山から口  
ロープが垂らされた。

「何でロープまで用意したんねん！」と心の中で突っ込む。

それにつかまり1人ずつ丘に上がる。

既に足の感覚は何もない。

必死にもがきながら上がったため靴下と運動靴が右だけ沼の中に…

結局8人中、6人が凍った沼に落ちる大惨事…

全員が無事丘に上がった頃には、命令した内山はいなかった…

この時1年8人は心に誓った。

内山が卒業したらみんなで「やるつ」と…

ちなみに俺は生まれつきお腹が弱い。

こんな冷たい水に入れば当然お腹を下す。

落ちている時は上がるのに必死で気付かなかった。

上がってから判明した…

漏れていた。

それも全部。

ありえないと思うでしょ？

それほど必死に沼から這い上がったのよ！

でもこれだけは絶対にばれたくない。

俺はしばらく疲れたふりをして中々立ち上がらなかった。

みんなが獣道に戻っていく。

それを確認してから俺は最後尾を歩く。

ラッキーなことに、沼だったので泥なのか、「なに」なのかよく分からないほどぐしゃぐしゃ。

俺は外の冷たい水道で泥と「なに」を落としてから洗濯機に突っ込んだ。

また一人で泣いた…

## アスカ

「じゃ〜ね、本当に切るよ。」

「うん…」

「ね〜本当に切るからね！バイバイ。」

「うん。元気でな…」

…あれは大学2年の夏。

俺は5年付き合っていた彼女と別れた。

とても辛い地獄寮生活の中、唯一俺を癒やしてくれたのは彼女のアスカだった。

アスカとは親同士が親しく、小学校からの幼なじみ。

学年でもトップクラスの美人で、度々告白されるほど。

そんなアスカが俺は大好きだった。

大好きだったが俺は幼なじみということもあり、恥ずかしくて告白は出来ないでいた…まだ小5だし。

そんなもどかしい日々を過ごしていると、ある日突然同じクラスのタツヤが何の前ぶれもなくアスカに告白した。

しかも俺の目の前で。

俺はかなり慌てた。

突然のことで慌てはしたが、俺は根拠の無い自信を持っていた。

アスカも俺のことが好きはず。

だって、2人の時は手もつないだし、たくさん笑ってくれるし、ほつぺにチューもしてくれたもん。

幼なじみ同士、恥ずかしがっているから気持ちをはっきりさせないだけだと。

告白したタツヤは目を閉じてアスカの答えを待っている。

俺は猛烈に気になりながらも、聞いていないふりをする。

横目でアスカを見ると困った顔をしている。

ホレ見ろ！

アスカは好きでもないタツヤに告白されて、困っているじゃないか！

ほら！アスカ！

言っでやりなさい！

他に好きな人がいるって！

1分ほどの長い沈黙の後、アスカはようやく言葉を発した。

アスカの口元を横目でガン見する。

「うん！いいよ、付き合おう！」

返事を聞いたタツヤは猛烈に喜び廊下を走り出した。

俺は放心状態：

「まーくんなんか大嫌い！」

まーくんは俺の小さい頃のあだ名です。

????

そう言い残しアスカはタツヤと一緒に下校した。

タツヤがアスカに告白した。

これは2人のやり取りであり、俺は関係ないはず。

しかし、タツヤが喜んで廊下に出た後、アスカは俺に向かって言った。

しかも告白もしていないのに「大嫌い」と言われた…

子供だった俺は意味がわからず、ドキドキしていた。

結局その日は何も出来ず1人で下校。

どうせすぐに別れるなんて期待しながら。

しかし、翌日にはアスカとタツヤの噂は学年中に広まり、本人達も嬉しそうにしている。

俺はようやく気付いた。

これが失恋だと…

今までにない切ない気持ち。

心にぽっかり穴が空いてしまったようだ。

しょうがない、諦めよう。

まだ小5だし。

そんな切ない気持ちのまま小学校生活が終わり、俺は中学生になった。

もちろんアスカも一緒…

さらに宿敵タツヤも一緒…

俺は入学してすぐに野球部へ入部。

タツヤはサッカー部に。

野球部は坊主。

サッカー部はサラサラヘア！。

付き合ってもいなかったが、中学でアスカを取り返してやると勝手に思い込んでいたのに…

何だか差が広まった気がした。

俺はこの時に決心した。

女なんかいらない！

野球に打ち込もうと！

心の傷もようやく回復した中学2年の時。

転機が訪れた。

2月14日のバレンタインに、1年の時にはくれなかったチョコをくれたのだ！

しかも、手作りのクッション付き！

しかも！

手紙には！

「ずっと好きだったんだから！アスカじゃダメですか？付き合ってください。」

フィーバー

中学2年の冬。

俺にもようやく彼女が出来た！

見たかタツヤ！

お前はたかが小学生の付き合い。

どうせその辺の公園でデートするか、一緒にファミコン止まりだろ？

俺はちやうで〜

なにせ中学生や！

最近の中学生は大人やで〜！

俺は嬉しくてたまらなかった。

週に1回は必ず遊んだ。

手紙もいっぱい書いてくれた。

ディズニーランドも行った。

そして、

ついに、

大人の階段を…

アスカと付き合って10ヶ月。

チューはしたけど、ほっぺまで。

だってまだ中学生だし…

でも多感な時期。

ちょっと早いけど、

何かね〜

あってもさ〜

あれは今でも忘れない12月24日のクリスマスイブ。

アスカが俺にクリスマスパーティーをしようと言ってきた。

しかしまだ中学生。

どこかのお店に行けるほどお金はない…

家だと2人つきりになれないし。

「せっかくだけど、外食するほどのお金がなくて…」と、小さい声で言った。

しかしアスカは「大丈夫！とにかく18時にうち来てね！」と、にこりと笑った。

何か意味あり気な笑いに俺は気づいた。

きつと親は出かけるのだと。

俺は言われるがまま、アスカの家に向かった。

家に到着すると、アスカは玄関で待っていた。

はて？

そんなに待ち遠しかったのかな？

アスカが俺に気づく。

すると人差し指を口の前にもっていき、「シー！」とポーズを取る。

俺は訳もわからず静かにした。

アスカは俺を手招きし、自分の家を通り過ぎ隣の家を案内した。

俺は全く意味がわからないまま隣の家に入る。

中には誰もいなかった。

それどころか何もなかった。

引越したのか、空き家だ。

しかし、なぜアスカがこの家の鍵を持っていたのか？

アスカは満面の笑みで、きよとんとしている俺を見る。

「へっへっ 凄いでしょ」とアスカがおどける。

俺は心配になり、真相を尋ねた。

すると、アスカは自慢げに「ここのおうちは知り合いだったの！引越すと聞いたから、この家のお姉ちゃんにお願いして合い鍵を作ってもらったの！」

なるほど。

めっちゃ計画的犯行だ…

しかも引越したのは10月らしい。

ってことは2ヶ月も前から今日の計画をしていたことになる。

ずる賢さに関心すると共に、嬉しさがこみ上げてきた。

俺と2人でイブを過ごすために。

こんな危険を犯してまで…

俺は軽く涙ぐんだ。

しかも、さらに！

「じゃ〜ん！」と言いながらアスカは赤い布をめくる。

すると、そこにはアスカが事前に用意してくれた手作り料理とクリスマスケーキが！

地べただったけど（笑）

なぜかカクテル風の酒まで用意されていた。

「じゃ〜乾杯しよっ！」と、アスカが微笑む。

俺は飲んだことがない酒を、飲んだことがあるかのように手に取った。

「かんぱ〜い」

酒は何の問題もなく飲めた。

アスカも平気な顔をしている。

余裕をかまし俺は2本目をあげた。

1時間ほど経っただろうか。

アスカの目がとろんとしてきた。

アスカはたった1本しか飲んでいないが、ほろ酔い気分だ。

俺は割りと冷静であった。

アスカは突然部屋の明かりを消した。

俺は意味を知らながらも「どうしたの?」と、聞いた。

アスカは「ツリーの電気だけの方がクリスマスっぽいでしょ!」と笑顔で答える。

ツリーの電気が真っ暗な部屋の中で2人を照らす。

チカチカと消えたり点いたり。

しばらく沈黙が続く。

俺は緊張から何も話せなかった。

根拠はないが、ぜったいキスをすると思っていたからだ。

「横に行ってもいいかな?」

アスカの突然の声にビツクとする。

俺は「う、うん…」と小さく答える。

アスカは恥ずかしがりながら俺の横に座る。

また続く沈黙。

次に話したのもアスカだった。

「キスして」

「…」

「ね〜キスして！」

アスカがもう一度言う。

俺はなぜかいけない事をしている気になっていた。

「本当にいいの？」と俺は何度も聞く。

多分10回以上は聞いたと思う…

アスカは「いいよ」としか言わない。

何度も口元に顔を近づけたが、中々できない。

「本当にしちゃうよ」と自分に言い聞かせ、アスカの唇に俺の唇が軽く触れた。

1秒ほどだったと思う。

驚くほど柔らかいアスカの唇にびっくりした。

この後は…

感想は「こんなもんか」でした。

もつと凄いことかと思っていたが、自然な行為なんだと思った。

2人は中2の冬に、ちょっと早い大人の階段を上った。

中学卒業後は遠距離恋愛になってしまう。

アスカは地元の高校に。

俺は…

今じゃ禁止されている野球特待で県外の高校に進んだ。

会えるのは正月とお盆の休みだけ。

青春真っ盛りの高校時代に、年に数回しか合えないアスカ…

アスカは電話する度に「会いたいよ〜」と言ってくる。

その声を聞いて俺も泣きそうになる。

消灯後は電話ができない。

携帯電話がなかったこの時代。

ポケベルでやり取りした。

東京テレメッセージ？数字だけのやつ…

変換もよくわからず意思疎通に苦しんだ…

アスカは月に数回手紙をくれる。

俺は毎日ポストを確認していた。

それほど楽しみだった。

アスカは必ず手紙に香水を付けてくれた。

その香りがアスカをより近くに感じさせてくれる。

高校の寮生活も結構辛かったけど。

アスカのお陰で頑張れた。

3年間の中では喧嘩もあった。

しかし俺たちは我慢に我慢を重ね！

見事に3年間の遠距離恋愛をクリアした！

アスカは3年間も我慢してくれた。

だから俺は約束通り大学は地元に戻ることにした。

アスカもようやく会いたい時に合えると喜んでくれた。

しかし！

アスカは知らなかった。

地元の大学でも寮生活であることを…

そう！

アスカと分かれる原因は、大学も寮生活であったこと。

3年も我慢したのに、さらに4年も我慢できない！

そりゃそうだな…

散々話したが今回ばかりは駄目みたいだ…

「もう本当にこんなの我慢できない！じゃ〜ね、本当に切るよ。」

「う、うん…」

「ね〜本当に切るからね！バイバイ。」

「うん。元気だな…」

小5の記憶が蘇った。

「ま〜クンなんて大嫌い」

今でも胸がキュンとする...

シロー

「お前！ほら！すぐあれをしろっ！」

「ハ、ハイッ！」

???

監督さんはバックネットを指差しながら俺に言った。

バックネットを見ながら考える。

うん…

よく見るとバックネット付近には雑草が多く生えている。

「これだっ！」

俺は「あれをしろ」を自分なりに解釈する。

その場の空気と、監督さんの表情だけで何をすれば良いのか推測した。

「さすが俺！」

普通の奴なら「あれって何ですか？」なんて、監督さんに聞いただろっ。

監督さんに「あれ」の質問はタブーだ。

なぜ聞いてはいけないか？

「あれつつつたらあれしかないだろっ！」「って怒られるからさっ…

俺は少ない言葉で相手の気持ちを汲み取れる、つかえる奴！

出来る奴！

秋の高い空を見上げながら自分に酔った。

この時の俺は、もちろんオワメンです！

(レギュラーに程遠い終わっているメンバーの略)

雑用ばっか…

俺は監督さんの指示通りバックネットに生えている雑草を必死に引っっこ抜く。

頭の回転も速いし、仕事も早い！

30分程度で草むしりを終えた。

どうよ監督さん！

見なさい、この綺麗になったバックネットを！

俺は誉めてもらおうと監督さんの様子を窺う。

するとタイミング良く、監督さんが振り返る。

俺と目があう。

俺は誇らしげにバックネットの方をちらっと見て、自慢げな顔で軽くうなずいた。

心の中では「監督さん！もう終わってますって！お次のご注文はなんでやんしょ？」

つてな顔で。

すると監督さんが「お前あれは終わったのか？」と俺に尋ねる。

俺は「当然ですよ！」と言わんばかりの顔でバックネットを指差し、うなずいた。

すると監督さん。

「何を偉そうにしてんだ！さっさとやれっ！」と、怒鳴られた…

????

俺はまた何か分からないのに大きな声で返事をしてしまった。

やっべ〜間違えたみたい…

もう完全に分からんぞ…

困った俺は仲の良い先輩に聞いた。

「監督さんから、あれをやれ！と指示されたのですが、あれって何ですか？」

すると先輩は「あれか、あれは4年になれば分かるようになるよ」と一言…。

…

「あ、有難うございます！」とお礼をした。

俺はしょうがなくタブーと分かっているながら監督さんに改めて聞こうと決めた。

恐る恐る監督さんに近づく。

ギリギリまで気付かれないよう、静かに接近する。

1メートル以内の射程距離に入る。

監督さんが急に振り向く。

俺はビクッとする。

監督さんは俺を見るなり「お前はいったい何をしてんだっ！」と、また怒鳴った。

ここで怯むと、また同じ。

俺は勇気を出して質問した。

「あれ」が何かを。

すると監督さんは急に怒り出した。

「お前は何を聞いてたんだ！さっさとバッティングマシンを片付けろっ！」

「ハ、ハイッ！」と、俺は慌てて返事をした。

監督さんは呆れた顔で「つたくしよ〜がね〜奴だな〜」と、ぼやく…なるほど。

確かにバットネット裏にバッティングマシンが置いてある。

めっちゃ「あれ」を真剣に考え、推測で動き、出来る奴になるはずが…

しよ〜がね〜奴になってしまった…

最悪だ…

俺は言われた通り、急いでバッティングマシンを倉庫に片付けた。

倉庫から出ると、監督さんが俺を呼ぶ。

ぜって〜怒られる…

俺はダッシュで監督さんのもとへ。

すると意外にも穏やかな表情で話し出した。

「お前はあれだな」と、話したところで監督さんの携帯が鳴った。

監督さんは、ちょっとごめんと俺に言いながら携帯に出る。

俺は電話が終わるまで、その場で待った。

結構長い電話であったが、監督さん直々のお声かけ。

背筋をピンと伸ばして待機した。

この間に何を言われるのか色々考える。

もうかれこれ雑用暦2年。

最後に気持ちよく打球を飛ばした日を思い出せない…

大学の野球部でも首とかあるのかな…

その場合学校はどうなるのかな？

なんて色々考えていると監督さんの電話が終わった。

俺は再度背筋を伸ばし、話を聞く体勢に入る。

監督さんの顔を真剣な表情で見る。

監督は俺を見るなりビクツとした。

????

何でそんなにビクツリしたのか分からなかったが、俺は改めてキリツとした表情に戻る。

監督はゆっくりと歩き出す。

俺もそれに合わせて歩き出す。

監督さんとの距離は数十センチ。

急に監督さんが振り返る。

今度は2人でビクツとする。

すると監督さんの表情が激変！

「お前は何をうろろしてるんだ！早く倉庫整理をしろっ！」「っと一喝。

俺は「ハ、ハイッ！」と返事をして慌てて倉庫に向かった。

それにしても「お前はあれだな」の続きが今でも気になる。

それにしても「あれをしろっ」「って

主語がないくせに、あれをしろっ！あれをあれしろっ！

これが監督さんの口癖。

だから、あだ名はシローだった。

## シロー2

「全員乗ったか？出発するぞっ！」

「お願いしますっ！」

プシューっとバスのドアが閉まる。

そのバスは田舎から、ちょっとだけ都心に近い大学に向かう。

途中どこにも停まらず、寮から大学までの直行便。

約1時間の旅である。

この直行便は野球部専用のバス。

野球部の遠征用でもあり、毎日の通学用でもある。

なにせ寮は田舎にあるもんで…

そして何と言っても、この直行便の運転手は！

ご存知シローである！

シローの運転で走るこの直行便は、シーズン中のみ運行する。

はて？

シーズン中とは？

このシーズンを説明するには、大学野球の1年間を説明する必要があるため、少し話しが脱線します。

さて高校野球よりマイナーな大学野球とはどんな存在か？

ざっくりとご説明いたします。

大学野球は高校野球と違い、公式大会は春と秋の2回だけです。

(高校野球は春、夏、秋の3回)

高校は都道府県単位(高校の数が多い地区はA・Bなどで分けられる)でトーナメント戦(1回勝負)を行い、優勝した1チームが全国大会(甲子園)に出場できる。

高校球児であれば誰もが憧れる「甲子園」に出場したいからこそ、毎日辛い練習に耐えられるのだ。

では大学野球は？

一応…

マイナーであるが全国大会がある。

ま〜やるからには全国大会に出場し、そこで優勝(全国No.1)することを目指して頑張るのだ。

この大学野球は高校野球と異なり、連盟単位で総当たりのリーグ戦(勝率・勝敗で勝負)で試合が行われる。

連盟はざつくりとしたエリアで分けられており、全国に26ほどあります。

例えば東都大学野球連盟とか、首都大学野球連盟とか、有名どころでいえば東京六大学野球連盟とかね。

連盟はそれぞれ加盟大学数が異なり、少ないところでは6大学、多いところは20大学以上もある。

しかし、全国大会には各連盟で1大学しか出場できない。

さらに、その代表校を決めるには、6校のリーグ戦で優勝を決めなければならぬ。

6校しかない連盟は問題ないが、6校以上ある連盟はどうするのか？

それは、1部、2部、3部など1つの部で6チーム単位に分けられる。

(2部以下は6チーム以上となる場合もある)

加盟大学が6校しかなければ1部リーグしか存在しないが、6校以上の場合は2部、3部など「部」が増えていく。

当然、1部リーグが一番強く、数字が多くなるほど実力も下がる。

(2部や3部でも1部と同等の力を持っている激戦連盟もある)

1部の最下位と2部の優勝チームが入れ替え戦を行い、先に2勝した方が1部となる。

当然、2部と3部も入れ替え戦はある。

こうして常に1番強い大学が1部で競えるよう仕組みが出来ている。だから当然、1部リーグで優勝したチームしか全国大会に出場できないのである。

この優勝を決める為のリーグ戦は、1部であれば6チームの総当たり戦。

1つの大学と2勝を賭けて戦い、2連勝すれば2試合で終了。

1勝1負となれば3試合目で決着をつける。

したがって、同じチームとは最大3試合となる。

総当たりなので自分の大学を除けば5つの大学と戦うことになる。

5つの大学と全て2連勝or2連敗で勝敗が決まれば最短の10試合でリーグ戦が終わる。

逆に1勝1敗となった場合は3試合目に突入するため、5大学×3試合で15試合も行うことになる。

このため、約2ヶ月かけて1つのリーグ戦が行われる。

これを、春と秋の2回行うわけだ。

なもんで大学野球部生活も、この大会を中心としたスケジュールとなる。

筋トレ中心の冬練を終え、春先に暖かい南へ移動してボールを使った本格的な実践練習に入る。

この南へ移動して数週間練習を行うことを「キャンプ」と呼んでいる。

プロ野球などでも「今日からキャンプイン！」なんて聞いたことがあるだろう。

キャンプを終えるとホームに戻り、練習試合が中心となる。

そしてようやく春のリーグ戦を迎える。

春のリーグ戦を終え、少しだけ休みをはさみ秋のリーグ戦に向けた練習が始まる。

春のリーグ戦で3位以下なら休みはない…

そしてすぐに、地獄の夏練が始まる。

ここでの練習量が秋に大きく影響する。

高校と大きく違うのはここ！

大学や連盟にもよるが、1部をはっている大学に進んだ選手のほとんどは、元々高い素質も持っている。

甲子園経験者や、高校時代に有名だった選手が多い。

このため、少ないチャンスをものにすれば、たった数ヶ月で補欠と

レギュラーが入れ代わるなんてこともざらにある。

2年生の頃の俺は、草むしりと倉庫整理をしていましたが…

一応、言い訳をさせてもらえば、肩を壊していたから故障者組です…

どんな理由でも「おわめん」であることに変わりませんが…

で、4年にとって最後の大会となる秋季リーグ戦を終えると、長かった大学野球生活の幕が閉じます。

秋季リーグ戦に優勝出来れば全国大会に進むが、うちの上級は弱かったのですぐに終了

この秋のリーグ戦を終えると、ようやくシーズンオフとなり、冬のトレーニングが変わっていきます。

と、シーズンオフとシーズン中の違いを説明するのに、だいぶ遠回りしましたが、ご理解いただけましたでしょうか？

だいぶ話はそれましたが本題に戻ります。

で、シーズン中に限りシローが運転する通学バスが運行されます。

理由はシーズン中のスケジュールにあります。

とにかく練習がメインとなるので、大学の授業に午前中（2限）までしか出られず、午後から夜までは練習となります…

この通学バスは朝7時に必ず出発する…

ちよつと早い…

つてか早過ぎる。

しかしシローはおじいちゃんなので朝はめっちゃ早起き。

俺たち下級は練習と先輩の面倒で疲れきっており朝は辛い。

1分でも遅ければバスに乗れない。

だからみんな遅れないよう必死で支度する。

本当に必死になる理由は…

下級は毎日バスに乗らないと集合なのだ…

理由は上級のほとんどが学校に行かないため、下級が行かないとバスがガラ空きになってしまう。

ガラ空きになるとシローが怒る！

まゝsonだけです。

そんな慌ただしい中、バスに乗り込み大学までの1時間は爆睡する。

しかし！このバスの中でもバトルがある。

それは、バス前ジャンケンだ！

バス前とは2年の中から1人だけ、シローの隣にある補助席に座らなければならぬ。

バスガイドさんの位置です。

役目はオーライ、オーライとか、シローの飲み物渡しとか、たいした仕事はない。

しかし！

めちゃくちゃ眠いのに、バス前は寝られないのです…

この睡魔との闘いから逃れるためジャンケンには必死だ！

私のバス前経験数は同期でベスト3に入る。

そうです。

ジャンケンめっちゃ弱いのです…

その日も最後の3人まで負け続けていた。

早々に勝ち抜けた奴らは、最後に誰が負けようがお構いなく、さっさと寝る。

何て冷たい奴らだ！

ま〜良い。

この3人の中で勝てば良いだけの話し。

1/3の確率。

ここ最近、バス前ジャンケンの傾向を見ると、やけにチヨキが流行っている。

普通であれば流行っているチヨキの裏をかきグーだ。

しかし！

決勝に残っているのはバーゴン、ケンジ、俺。

ケンジはとにかくアホだ。

最初はグーをせず、突然早口でジャケツポツ！と始めると必ず焦ってチヨキを出す。

しかも、ちょい遅出しのくせに、グーだらけの戦場にチヨキで飛び込んでくる。

本当アホだ。

したがって、ケンジには焦らせて、俺はグーを出せば確実に負けることはない。

しかしだ！

クソバーゴンが読めない。

空気は読めなくせに、相手の出し手は読める。

なぜ決勝まで残っているのか？

しょうがない。

バーゴンの出し手は読めないため、流行っているチヨキにかけよう。

そして、焦らすと絶対にチヨキを出すケンジ。

決まりだ！

グーで行く。

仮にバーゴンがグーを出しても、ケンジはチヨキだから1人負け

最悪バーゴンがパーを出しても、あいこだ。

あいこになれば、また考えればよい。

よし、突然ジャンケン音頭を始めてケンジを焦らせよう。

俺は携帯をいじりながら、バーゴンとケンジを油断させる。

「ちょっと、このメール処理するまで待っててね」オーラを出しまくる。

チラ見すると、二人は完全に油断している。

今だ！

俺はここぞとばかりに音頭をとった！

「最初はグー！あっ！」

焦らそうと思った俺は、自分が焦ってしまい、「最初はグー」を入れてしまった。

もう後戻りできない。

俺はこの0.2秒の間に、再度出し手を考える。

ここは変えずにいくべきか？

「ジャン…！」

いや、焦らせていないケンジは逆にチヨキでこない可能性大！

そうだ！チヨキの可能性が低いということは、パーかグー！

俺が出そうと思っているのはグー！

「ケン…！」

つてことは負けかあいこにしかならない！

よし…ここは最悪でも負けることはないパーでいっしょ！

「ポン！」

「ヤッタ〜！勝った〜！危なかった〜」

と、2人が叫ぶ…

2人でハイタッチまでしやがった…

結局、二人は流行っているチヨキで普通に来た。

…

俺は朝から超不機嫌。

こんな日は1日中、良いことは無い気がしてならない。

ま〜今考えれば、この日に負けたからこそ、あの恐怖を味わえたのですが…

俺はふてくされながらシローの隣にある補助席を降ろし座った。

「何だ、またお前か！ガハッハッハッ」と、シローが笑う。

俺はとつさに笑顔を作り軽く頷く。

きつと目は笑っていないかっと思ったと思うが。

そんなこんなでバスは出発した。

駐車場を出る。

左に曲がる。

1つ目の信号にひっかかる。

青になり今度は右折する。

…

やばい。

もうやばい…

朝の時点では、寝る気満々だったし。

案の定、奴がやってきた。

出発5分でやってきた。

いくなんでも早過ぎね〜か？

睡魔君よ！

俺は100トン位あるまぶたを必死に持ち上げる。

ちょっと太ももとかつねる。

頭の中で好きなB・Zとか歌う。

ほっぺたを軽くピンタする。

ま〜ったく効かない。

おれはついにアイテムを取り出す。

激からガムを大量に噛む。

5分ほどで味がなくなる。

意識が遠くなってきた。

気付けば首がカクンカクンしている。

あまり熟睡すると、首が大きくガクンとなるので、ギリギリの意識で首をコントロールする。

さらに、シローに寝ているのがバレないよう、カクンの後は咳払いとかして、起きてるアピールをする。

もう意識がほとんどない。

首も相当曲がってきた。

も〜い〜や〜みたいな気持ちになってきた。

夢と現実の狭間にいる頃。

突然！

キキキキキ〜！！！！

シローがキューブレーキをかけた！

補助席の前には何も無い。

前に50センチほどの空間があり、その先はバスの大きいフロントガラスだけ。

いくらバスがキューブレーキをかけても、起きていれば前に飛び出すことはない。

ってかそんな奴は今まで見たことがない。

しかし、俺は軽く寝ていた。

いや、熟睡していた…

だから踏ん張るなんて、出来るわけない。

ブレーキとほぼ同時に、補助席から前に飛び出す。

しかし補助席からフロントガラスまで50センチほどしかないので、転ばずには済んだ。

しかし！

体勢は軽く膝を曲げ、フロントガラスに両手をついて突っ立っている。

間抜けな体勢で、めちゃくちゃびっくりした顔で前を見つめている。

俺は何が起きたのか全く分からなかった。

心臓が物凄い早さになっている。

つい数秒前まで寝ていたのに、なぜか今は立っている。

俺は寝ていたことがバレないよう、ごまかすために何か言わなければと思ってしまった。

2秒ほどで今の状況を考える。

俺は何故フロントガラスに両手をついているのか？

そっか！

俺は窓を拭けとシローに言われたからフロントガラスに手をついているのだと決め付けた。

しかし、外側の汚れか、内側の汚れか見た目には分からない。

俺はとっさにキリツとした顔を作り、シローに向かって「内側ですか？」と聞いた。

するとシローは「何がだ？」と答える。

まるで不審者を見るかのような表情だ。

そりゃそつだろう…

ブレーキと同時に、補助席から勝手に飛び出し、フロントガラスに

両手をつき、いきなり「内側ですか？」と、質問した奴を普通とは思わないだろう。

俺なりに数秒で色々考えたが、一般的に言つと寝ぼけていたってことになる。

シローの「何がだ？」が俺を再びパニくらせた。

なぜか分からないが、俺は「有難うございます」と言ってしまった。

もうこの時点では何を意味の分からないことを言ってしまったんだと自分で認識はしていた。

シローをゆっくり横目で見ると、すごい不思議そうな顔で俺を見ていた。

その後、シローは俺に一切話しかけなかった。

きつと怖かったんだと思う。

それからはシャキッと目が覚め学校まで寝なかった…

しかし、この話のメインは帰りのバスでございませう。

今度はシローが…

### シロー3

2限のチャイムと同時にダツシユでバスに戻る。

ほとんどの下級は上級に代返を頼まれなければ授業には出ない。

そのままバスで熟睡するか、近くのパチンコに…

全く何をしに来ているのか…

それぞれ時間を有効！？に使い、バスの出発時間に戻ってくる。

ちなみに、帰りのバスに乗れなくても集合だ。

俺は帰りもシローの隣に座る…

比較的帰りは睡魔に襲われにくい。

俺はこれ以上、変な奴と思われないうつ、どんな事があっても睡魔に勝つと心に決めた。

プシユー

ドアが閉まりバスが出発した。

大学の校門を出て左に曲がる。

突き当たりの信号を右に曲がる。

しばらく道なりに走る。

道なりに走る。

ただまっすぐ走る…

やっぱり奴はやってきた…

やばい。

また眠い…

しかし、この直後から俺の眠気は一気に覚めることに。

まっすぐな道なのに、やたらバスが蛇行している。

みんなが寝ている中、俺はシローを横目で見る。

…

なんと…

シローも寝ていた。

お前は絶対寝ちゃ駄目だろ！

30人以上の命を預かっている意識は無いのか！

俺は軽くパニックになりながらもシローの様子を冷静に見極める。

たまに首がカクンとなる。

カクンとなった時にハンドルがブレて蛇行する。

どろしよ〜。

完全に寝ているわけじゃないし、何と声をかけて良いか分からない。

「監督さん寝ていますよ」「なんて言ったら」「誰がだ!」「何てキレられるのが目に浮かぶ。

俺はもう少しだけ様子を見ることに。

やっぱり、たまにカクンとなる。

相変わらず蛇行する。

つてか、蛇行が大きくなってきた。

カクンの周期も短くなり、首の曲がる角度も大きくなってきた。

皆さんわかりますか、この恐怖。

バスの運転手がカクンと落ちている時。

100キロ以上で飛ばしているバスは、人間の意志は全く無く走り続ける。

俺はその度に一人でパニくる。

シローは既に睡魔に蝕まれていた。

目がしょぼしょぼしてカクン。

ガバツと起きてふらついたバスを修正する。

また目がしょぼしょぼ…

この繰り返しだが、完全にしょぼしょぼのペースが早くなってきた。

俺はしょぼしょぼが始まると必死に咳払いや、物音をたてシローを起こす。

しかし、その音にも慣れたようで、しょぼしょぼペースは加速する

…

俺は1人であたふたする。

このままじゃ絶対死ぬ。

音で起きないシローに、俺は勇気を出し軽く肩を叩くこととした。

しかし、起きているシローの肩は叩けない。

俺は数秒単位でシローの変化を捉える。

しょぼしょぼが始まり、カクンとなる瞬間がチャンス！

これが早すぎると、また変な奴と思われる。

遅すぎると大事故だ…

しょぼしょぼ

しょぼしょぼ

しょぼしょぼ

カクン

この周期であることを知る。

カクンの瞬間に肩をポンポンと2回叩く。

するとカクンとはならず、しばらく起きてくれる。

カクンとならなければ、バスも蛇行しない。

こんな危険な旅路だが、コツを掴んだ俺は楽しくなってきた。

しょぼしょぼ3回の後にカクン。

その神すら見逃す一瞬の隙に肩をポンポン。

コツを掴むこの早さに、俺はまた酔った。

このしょぼしょぼポンポンを数回繰り返した頃、俺は少し飽きてきた。

初めはびびっていたので、肩をポンポンした後素早く手を引つ込めていた。

しかし面倒になり、しょぼしょぼが始まり出した時点で、俺は肩の上に手をだしてカクンの瞬間を待っていた。

ちょうどシローの視界に入らないくらいの、左肩後方で待機。

その後も数回ポンポンしたが、完全に飽きた。

ポンポンも適当になってきたその時！

まっすぐな道なのに、突然バスが勢い良く右にギュインと曲がった。

そして、

「うはっ」っと焦った声でシローが叫べんだ。

すかさずハンドルを左に戻す。

倒れるくらいの勢いだったが、何とかバスの体勢を整える。

そしてシローは深呼吸をしながら路肩にバスを停めた。

しかしなぜだ？

俺はしょぼしょぼポンポンを極めた男。

バスが右に曲がった時は、確実にカクンのタイミングではなかった。

俺は真剣に考えていた。

するとシローが突然怒鳴り出す。

「お前は何を考えてんだ！」

は？

シローは誰に怒鳴ってたんだ？

外を見ても誰もいない。

俺はとうとうシローが本当にボケてしまったのかと思った。

俺は怒鳴っている隣のシローと目を合わさないよう、外を見ていた。

すると俺の後頭部に衝撃が！

ゴッソッ！

俺は慌てて振り返る。

「何だその態度は！」とシローが怒鳴る！

?????

シローの顔がめっちゃ怒っていたので、俺は条件反射で謝る。

「す、すみませんでした????」

なぜシローが怒っていたのか？

なぜ後頭部をグーで殴られたのか？

話を聞いてようやく理解した。

シローの言い分はこうだ。

俺がしょぼしょぼポンポンに慣れてきたころ、肩を叩いた後に手を引っ込めるのが面倒だったため、シローの肩の上に手を置いたままカクンを待機していた。

肩の上で待機している手が、シローの目線に入らないよう注意していたが、

どうやらほんの一瞬シローの目線に入ってしまったようだ。

ウトウトしながら運転していたシローは、急に何かが目線に飛び込んできた。

軽く寝ぼけたいいたシローはめっさびっくりしたので、物凄い勢いで首を右に傾け、その「何か」をとっさに避けた。

寝ぼけていたため首だけではなく、ハンドルを握っていた右手も一緒に避けてしまった。

するとバスが勢いよくギュインとなったので、慌てて左に戻しバス

の体勢を整えた。

心臓の速さがハンパじゃなかったので、路肩に止めて落ち着こうと思っただけらしい。

「つてか、自分で「寝ぼけていた」とはつきり言った…」

そんな時にお前がいたずらするもんだからと、めっちゃ怒っている。

俺は起そうと、みんなの命を救おうと、思っただけなのに。

自分が運転中に眠くなるのが悪いのに。

この日に決定した。

俺が「変な奴」ということがシローの中で。

それにしてもグーで後頭部殴るか普通？

でも物凄い気持ち悪そうなお顔で俺を見るので誤った。。

「すみませんでした…」

## 脱走

この章が下級時代最後の話し。

次の章から天国モード！

上級時代の話しです

の前に、2年時代に起きた最後の辛い話をしておきます。

これが無ければ、現在の俺がいないと言っても過言ではありません。

あいつだけには会いたくない。

俺はいつも怯えていた。

しかし、タイミング悪く前からやってきた。

あいつはいつもやってくる。

どこからともなくやってくる。

3年の斉藤（仮名）が…

「おい！お前なに顔逸らしとんねん！」

ほらまた絡んできた。

俺はとつさに笑顔を作る。

「いえ！逸らしていません」

「うつさい！いちいち言い訳すんなや！ちよつとこつち来いや！」

俺は寮の裏に連れて行かれ、意味もなく腹を殴られる。

そして必ず最後に胸の辺りをツネる。

誰にも気付かれることの無いよう、顔などの目立つ所に攻撃はしてこない。

とにかく陰険ないじめでしかない。

その頃、俺の胸や腹は痣だらけ。

それも全部ツネられた内出血の後。

とにかく力いっぱツネって、肉を千切るように引き離す。

地味だがめっちゃ痛い…

殴られる方がまだ。

斉藤は会う度に必ず何かしてくる。

それも俺にだけ…

そう…

俺は2年時代いじめを受けていた。

まゝ下級全員いじめられているようなもんだが…

特に斉藤は俺にだけ、異常な反応を示してきた。

特に何かしでかした訳ではない。

まゝ「顔がむかつくから」とかの類だろう。

毎日、毎日…

来る日も、来る日も…

下級の2年が大勢いても俺だけ呼ばれ、みんなの前で地味な体罰を受ける。

痛がる俺を見て高らかに笑う斉藤。

見ている2年も笑わないと自分もやられると思いき笑いでごまかす。

それがほぼ毎日続いた…

俺の精神状態は野球どころではなかった。

神様が1日だけ上級と下級の壁を無くし、「タイムンOKデー」を作ってくれさえすれば…

俺は迷うことなく斉藤をボコボコにする。

顔に小便をかけ「舐めんなやボケツ！」と、捨て台詞を吐いて立ち去る。

このシュミレーションは100回以上した。

背は俺より10センチ以上低い。

体系はちよいデブ。

顔も冴えない。

120%の確率でボッコボコにする自信があった。

しかし…

上級は何があっても絶対的な存在。

仮に俺一人が革命を起し、斉藤に手を出せば同期のみんなに迷惑がかかる。

うかつに動けないこの状況を良いことに、来る日も来る日も斉藤は俺に体罰を加える。

我慢という長さが最大100メートルあるとすれば、

俺は5、000メートルくらい先にいる。

我慢の限界なんて数ヶ月前に余裕で超えていた。

俺は心に決めた。

こんなクソ野球部辞めてやると…

大学を辞めるのは惜しいが、今はそんな状況じゃない。

心が壊れるよりはました。

あんなデブチビ斉藤にやられっぱなしで、平常心を保つ事は出来ない。

男として一番心の奥底にある最後のプライドだけは守りたかった。

だから！ただ辞めるだけではプライドが守れない。

直接斉藤を殴れば、犯人が俺だと分かり連帯責任で同期もやられる。

夜中に襲っても、目撃されたらおしまいだ。

うーん、何か良い復讐はないか？

俺は1週間以上かけて綿密な復讐計画を完成させた。

この計画を立てている時の俺の顔は、不審者丸出しだったであろう。

俺はこの計画を親友のハルに話した。

「お前そんなの絶対止めた方が良いよ！」

ハルは笑いながら俺に言う。

なぜ笑う？

俺は1週間も練りに練って、

完璧な斉藤復讐計画を考えたのに…

計画はこうだ。

- 1 ・泊まりの遠征1日前に、俺は仮病を使い練習を休む。
- 2 ・翌日も休み、2日も寝込むほど状態が悪いことをアピール。
- 3 ・斉藤を含む遠征組が出発後に、熱が下がらないため病院に行く  
とコーチに伝える。
- 4 ・俺は予め用意していた「あれ」を斉藤のベッドにばらまく。
- 5 ・布団をかぶせ、寝るまで分からないようにする。
- 6 ・そのまま病院へ行くかのように寮を出る。
- 7 ・何か悪いウイルスに感染したことにする。
- 8 ・感染力が強いため、実家でしばらく休むとコーチに電話する。
- 9 ・遠征組が帰ってくる。
- 10 ・斉藤が寝る時には！！！！

どうだ、この完璧な計画。

コーチからしてみれば、俺は遠征組とほぼ同時に病院へ行ったことになっている。

そのため、犯人リストから始めに消される。

後は寮に残っているメンバーも複数いるし、

誰かが外から入ってきた可能性もあるし、

犯人を絞るのはかなり難しくなる。

例えば俺が疑われても、病気が長引いたことにして寮に戻らなければ良い。

何なら辞めるつもりだ。

やっぱりどう考えても完璧だ。

ちなみに斉藤のベッドに仕掛ける「あれ」は俺の「うち」だ！

別に犬のでも良かったが、固形では精神的ダメージが少ない。

俺のはかなり水っぽい。

水っぽいと掃除が大変。

精神的ダメージは相当なものだ。

これを真剣な表情でハルに話したが、笑いながら止めると言う…

俺はめっちゃくちゃ本気なのに。

ハルは言った。

「お前そんなことしたら同じ部屋の奴にも迷惑かかるだろ！」

そっか。

ちなみにハルは斉藤と同じ部屋だった…

ハルは続けて「お前の気持ちは分かるけど、もう少しで上級なんだから我慢しようぜ！」と、苛立っている俺を落ちつかしてくれた。

こうして俺の「うち大作戦」は実行されることはく闇に消えた。

しかし、その後も斉藤のいじめは日々続いた…

やっぱり、どうしても、どう考えても、耐え切れなかった。

俺は大学を「辞める」という3文字を真剣に考えた。

卒業後の大卒の給料？

世間体？

親の見栄？

俺から野球を取ったら何が残る？

野球無しに就職できるのか？

このまま大学で野球を続ける「意味」が分からなくなった。

俺は決めた。

このクソ野球部を辞める。

野球部を辞める。大学も辞めると言う事だ。

その頃、俺と同じタイミングで辞めたいと言っていた藤井と相談し、退学の理由を二人で打ち合わせた。

藤井は元々腰に持病を抱えていたため、医者からこのまま野球を続けることが出来ないと診断されたことにすると俺に言う。（嘘だが、

俺は入学前に肩を痛めており、医者から肩が治らないと診断されたことにした。

しかし、いざ監督室に行こうとすると…

話が嘘なので、バレやしないか心配だった。

中々言い出すことが出来ず、辞める理由を決めてから3日が経った。

今日こそは！

2人は嘘の辞める理由を散々頭の中で繰り返した。

この質問にはこう返す。

こう来たらこう返す。

完璧だ。

2人は意を決して監督室をノックする。

トントン！「失礼します！」

監督室に入り正座する。

「監督さん！お話があるのでお時間いただけますか？」

テレビを見ていたシローがゆっくりと振り返る。

低いトーンで「何だ？」

何とも辞めるとは言い難い空気である。

何年も監督をやっているシローは、きっと生徒の雰囲気に分かるの  
だろう。

こいつら辞めると言いに来たと。

しかし、藤井は怯むことなく辞める理由を冷静に話し出した。

シローはやっぱりなと言う表情で藤井の話を聞いている。

藤井の話が終わると意外にもシローは、「分かった」と、一言！

おー思ったより簡単に辞められそうじゃん！

俺はこの勢いを止めてはいけないと思い、とっさに話し出した。

「私も肩が…」と、言ったところで、「お前は明日にでも俺の紹介する医者に見てもらって来い！」と、かぶせて話してきた。

俺は慌てて「あ、でも、あ、はい！」と言ってしまった。

シローは俺たちを追い出すかのように、用が済んだらさっさと出て行けと言う。

「し、失礼します…」

藤井と一緒に監督室を出る。

藤井はめっちゃ嬉しそうな顔をしている。

俺は自分の不甲斐なさに落ち込む。

藤井は「頑張れよ」と俺に残し、そそくさと寮を出て行った。

藤井が出ていった翌日！

俺は…

今日も…

斉藤にいじめられていた…

やっぱり我慢できない。

俺はもう何回目か分からない「脱走」の二文字を、ようやく実行することにした。

必要な荷物をバツクに詰め込み、バレないように洗濯物と一緒にカゴに入れて寮の裏に運んでおく。

すぐに着替えられるよう、ジャージの下に私服を着る。

部屋で寝ている上級のイビキを確認してから、音をたてないように静かに部屋を出る。

玄関には鍵がかかっているため食堂に向かう。

食堂には食材を運ぶためのドアがある。

そこから寮を抜け出した。

ダッシュで洗濯場に向かいカゴの中に隠していたバツクを取り出す。

予め洗濯場の裏に用意していた、おつかい用のチャリに乗る。

俺はついに寮を脱走した！

本当に脱走したの？

うん！俺脱走できたよ！

あこがれの脱走！

「フリーダム！」と叫びながら緑のタヌキが突き刺さっていた裏の畑を立ちこぎで通りすぎる。

おばちゃんに乗っている原付より早いスピードで駅に向かう。

終電を逃すと寮に戻るしかない…

絶対嫌だ！

俺はゴール前の競輪選手かのようにチャリをこいで駅に向かった。

何とか終電には間に合った。

しかし実家までは行けないため、俺は途中の駅で降りた。

そこそこ栄えている駅で降り、カプセルホテルに泊まる。

何だかドキドキして寝れなかった。

今頃みんなは何をしているのだろうか？

俺の脱走はバレていないか？

明日の朝にはバレるだろうな…

みんなに迷惑かからないかな？

俺のせいで集合にならないかな？

寝付いたのは明け方だったと思う。

疲れていたため、起きたのは昼過ぎだった。

夜には親父に報告しよう…

親の金で入学したのに。

勝手に辞めるなんて…

でも寮に戻れば…

不安で胸が張り裂けそうだった。

しかし、ここ最近色々なことがあり、疲れていたのだろう。

俺はいつ間にか寝ていた。

「10時を越えますと延長料金となりますので…」

館内放送で目覚める。

10時起きなんて、いつ以来だろう。

掃除も、朝礼も、先輩の朝飯もスパイク磨きも何もやっていない。

きつと朝から俺の行方不明ネタで持ちきりだろう。

あゝ…

やっぱり胸が痛む…

これまで共に頑張ってきた同期のみんな。

1試合でも良いから公式戦のグラウンドで立っている姿を見たいと言っていた両親。

時々手紙で励ましてくれる兄弟。

確かに昨日の夜は脱走できて嬉しかった。

まさに自由を手に入れたのだから。

しかし、何だ今の気持ちは…

朝なのに。

まだ眠いのに。

涙がこぼれた。

だけど…

もう後には引けない。

戻れば確実に集合だ。

俺のせいでみんながやられる。

それだけは避けたい。

しょうがない。

自分で選んだ道だ。

実家に帰り、親に謝ろう。

俺は親が仕事から戻るまでパチンコ屋で時間をつぶした。

いつもなら楽しいスロット。

楽しくない…

いつもなら全然当たらないビッグボーナス。

千円で当たる…

いつもなら単発でのまれるコイン。

連チャンする…

夕方には8万ほど勝っていた…

でも心から喜べなかった。

俺はパチンコ屋を切り上げ、親に電話をすることにした。

母親に泣かれるのは辛い。

まずは父親を外に呼び出すことに。

電話をかける手が軽く震えていた。

「もしもし？オヤジ？」

するとオヤジは明るい声で、

「おゝ頑張ってるか？今ちよつどお母さんと、お前の話しをしてたところだよ〜」

俺は脱走がバレたのかと思い焦る。

「な、何の話し？」

「小さい頃は女の子とばかり遊んでいたのに、今じゃ大学で野球をやっているなんて信じられないねって」

あゝ。

タイミング悪かった！

しかし、ここで引き下がる訳にはいかない。

俺は久々の休みってことにして、父親と居酒屋で待ち合わせることにした。

久々の地元。

とても落ち着く。

俺は緊張しながらも、約束した居酒屋に入る。

「おう！こつちこつち！」

オヤジは先に来ており、大好きな日本酒を先に1人でやっていた。

久々に息子と2人で飲める。

心から喜んでいた。

とても大学を辞めたい何て言える雰囲気ではなかった。

相変わらずオヤジは楽しそうに飲んでいる。

は〜。

駄目だ…

やっぱり言えない。

飲み始めてから既に3時間以上経っていた。

俺はしょうがなく、この場で伝えるのは諦めることにした。

「じゃっ！そろそろ帰ろうか？」と、俺が切り上げようとした時。

「お前何か言いたいことがあるんじゃないのか？」

…

続けてオヤジが話す。

「お前から電話があった時に分かっていたよ！辛いんだろ？」

…

ゆっくりオヤジを見ると、とても悲しそうな顔で俺を見つめていた。

俺は何も言わず泣いた。

こんなオヤジの悲しそうな顔は初めてみた。

俺はなぜか、

あの寮に、

戻ろうと思った。

## 脱走2

俺は涙を拭い「何言ってるの！辞めるわけないでしょ！」と、強がって言った。

その場にいると大泣きしてしまいそうで、早くオヤジから離れたかった。

俺は振り向きもせず「じゃ寮に戻るからまたね！」と、ダッシュで駅に向かった。

は

どーしよ

さて？どうやって戻ろうか？

戻ると決めた以上、リスクの少ない方法を考えたい。

しかし、寮の現状がわからない…

誰からも連絡すらない。

もしかして俺が考えているほど、たいしたことは起きていないのか？

確かめてみよう。

俺は恐る恐るハルに電話を試してみた。

ハルは俺が思っていたより普通に電話にでる。

「どした？」

どしたって…

脱走したんですけど…

俺は微かな期待を込めて確認する。

「えっ？何も起きていないわけ？」

この後10分ほどハルの話しを聞き、ようやく現状を理解した。

どうやら今日は休みになったらしい…

奇跡が起きていた。

シローが急用で朝のバスは運休。

練習も休み！

しかも、下級まで外出許可が出ていた。

ちなみに門限は21時。

そして今が21時…

実家から寮まで2時間はかかる。

せつかく奇跡的に、これまでの「脱走」が誰にもバレていなかったのに。

門限に間に合わない…

俺は泣きそうな声でハルに現在地を伝える。

ハルは10秒ほど無言でいた。

とりあえず寮の状況を確認してから折り返すとハルが言う。

俺は取りあえず電車に飛び乗った。

門限があつても寮にうるさい先輩がいなければ何事も起きない。

俺は祈った。

うざい上級がいないことを。

朝は辞める気満々だったのに…

今は必死に戻ることを考えている。

乗り換えの駅に降りるとタイミング良くハルから電話がきた。

するとハルは低いトーンで、こう言った。

「今日は斎藤が点呼とるって…」

終わった…

…  
よりによって俺をいじめの標的にしている斎藤が点呼をとるなんて

…  
しかし、冷静さを失っている俺の代わりに、ハルが悪知恵を働かしてくれた。

「いいか？今から俺の言うことを良く聞けよ！

まず点呼だが、斎藤は俺と同じ部屋だから隙を見て点呼リストにお前の名前を書いておく。

次に、誰かがお前を呼び出しても、俺はグラウンドに行っていると伝えておく。

理由はバッテリーングマシンの調整をシローに頼まれたと。

こんな指令はオワメンにしかない。

さらに今日はシローが戻ってこない。

完璧だろ？」

俺はこの時、ハルを愛した。

「すぐよハル！めっちゃ頭の回転早いやん！」

しかし、ハルがはしゃぐ俺を一喝する。

「ただし！消灯過ぎれば何も出来ないからな！死んでも23時まで  
に帰ってこい！」

現時点で時計の針はちょうど22時を指していた。

全ての乗り換えタイミングに合えば何とかなる！

ただし、昨日の夜に駅で乗り捨てた、おつかい用チャリがあればの  
話しだが…

考えていてもしょうがない。

俺は乗り換えの駅までもうダッシュ。

プルルルルル

「間もなく発車いたします。」

「駆け込み乗車はおやめください。」

又オ〜！

電車が来てる！

これを逃すと出だしでアウト。

俺は切符も買わず自動改札を全力で走り抜ける。

バスツと改札が閉まるより早く駆け抜けた。

テンコンテンコン鳴っていたが気にしない。

階段を2段飛ばしで駆け降りる。

焦り過ぎて、次の足がどこの段に着地するのか一瞬分からなくなり、めっちゃ焦る。

ちよっただけバランスをくずし足をひねる…

しかし、何とか転ばず降り切った。

既に電車のドアが閉まりかけている。

「うあゝ駄目だ！」

諦めずドアの前まで駆け寄る。

ドアがちょうど閉まった。

…

「終わった…」

俺は諦めて電車から離れようとした瞬間！

プシュッ

ドアが開いた！

どうやら他のドアに誰かが挟まっていたらしい。

俺は慌てて飛び乗る。

タイミング良く挟まってくれた君！

どこの誰かは知りませんが、今度会った時には強く抱きしめてあげますよ！

俺は全身汗だくで、何とか1回目の乗り換えを無事にクリアした。

しかし、問題は次の乗り換えである。

路線が変わるため、1度改札を出なければならない。

俺は今電車に乗っているが切符がない。

切符を無くしたことにすれば済むことだが、次の乗り換えは清算している時間がない。

へッ

切符？

それがどうした？

俺に切符なんて必要ねーさっ。

改札のドアが閉まる前に抜ければ済むこと。

自分に言い聞かす。

今日の俺は強気で攻めなきゃならない日。

ファイト俺！

ようやく2回目に乗り換え駅に到着。

ここは焦ってはいけない。

先頭では俺が改札に引っかけたことがばれてしまう。

人ごみに紛れることで、誰が改札を閉めたか分からなくする。

俺は人ごみの真ん中辺りに陣取る。

あと10メートル。

大丈夫。

俺はやれる。

あと5メートル。

改札の駅員は1人だけ。

やれる。

あと1メートル。

ドカツ！」「うわぁ」

思わず声が出てしまった。

テンコン テンコン

!!!!!!

何と俺の1つ前の奴が改札に引っかかった！

ここで他の改札に移動すれば横入りになるので人の流れに乗れない。後ろに回れば人が少なくなるので厳しくなる。

俺はこの間0・2秒ほどで判断した。

どっせい！

強行突破！

俺は前の奴を無理やり押して改札を抜けた。

駅員が飛び出してきたが、前の奴が引っかかったんだからね！って顔をして走って逃げる。

それにしても1つ前の奴が引っかかるなんて、何と言うアクシデント。

しかし、こんなピンチでさえチャンスに変えてしまっ自分にもまた酔った。

俺は乗り換え最後の電車も切符を買う時間がないために、得意の改札ダッシュをかます。

最後の電車もギリギリ間に合った。

ふ〜。

これで電車ステージは全てクリアした。

残るは自転車ステージと、最終難関！地獄寮潜入ステージ。

いやちょっと待て！

その前に問題があった。

俺が降りる田舎駅では改札ダッシュが出来ない…

え？なぜかって？

それはね…

田舎だから自動改札じゃないの…

しかも、この駅に降りるのはせいぜい10人程度…

改札ダッシュもできなければ、人ごみに紛れることもできない。

まいった…

こうなりや…

あの手しかない…

あれは危険なため出来れば使いたく無かったが…

今回はやむを得ない。

この計画こそまさに！

今で言うプリズンブレイク状態。

これから降りる駅は、改札が駅の中央にある。

電車の中央に乗ってしまうと、降りた時に駅員から丸見えだ。

降りる人も少ないため人数を一瞬で把握されてしまう。

このため俺は一番前の車両に移動する。

一番後ろではなく前に移動する理由もある。

そう！

この企画の肝である外への抜け道（便所）が、駅の先頭車両側にあるからだ。

いよいよ駅に到着する。

色々難関を経験してきたが、今日一番の緊張だ。

電車が停まりドアが開く。

俺は軽い駆け足で便所に駆け込む。

便所には無事到着したが、ここで嫌な感じを覚えた。

改札で切符を確認する駅員が、電車到着時にはホームにいたのだ。

その駅員と目が合った気がした。

俺は目が悪いため、相手がこちらを見ていたか確信は持てない。

しかし体型を見る限り、俺がキセルで捕まった時の駅員だった…

大丈夫！

焦るな俺！

頑張れ俺！

ここから勝負。

まず2つある小便器の上にまたがる。

そして、小便器の上にある換気用の小窓に手をかける。

窓を開けただけでは駄目。

窓の枠ごと外すのだ。

作りが古いため、上下に少しずつ移動させると窓ごと外れる。

外すのに少なくても3分ほどかかってしまうが…

この窓を外せば大人1人がギリギリ通り抜ける事が出来る！

俺はドキドキしながら必死に上下する。

額から汗が流れる。

よし！もう少しだ！

俺と一緒に降りた客は全員改札を抜けた頃だろう。

しかし！

なぜか！

足音が近づいてくる。

やっぱりさっきの駅員は俺を見ていたのか？

絶対確認に来たんだ！

やばい。

どしよしよ！

ちょうど窓は外れたが、足音はすぐそこまで来ている。

窓をはめ込み直す時間はない。

焦った俺は外した窓と一緒にうんち用の箱の中に隠れた。

ドキドキMAX！

やはり足音は男子便所の中に入ってきた。

駅員か？

それとも客か？

駅員なら窓に気付くかも…

小便をする音がしない。

やばい…

絶対駅員だ。

「お客さん！」

…

「お客さん大丈夫ですか？」

「ふぁ〜い。らいじよぶねす〜」

俺は駅員の「大丈夫ですか？」で、とっさに判断した。

大丈夫と質問すると言つことは、キセルの疑いではないと確信した。

そこで酔っ払いになりすまし、駅員の警戒を解こうと考えた。

「らいじょふねすから〜」

すると駅員は信じたのか、

「わかりました！もうちょっとしたら、また見に来ますね〜」

見になくていいのに…

足音が遠ざかる。

ドアをゆっくり開ける。

周囲を確かめる。

よし！誰もいない。

あまりぐずぐずしていると、また見にこられてしまう。

作業再開！

改めて小便器に足をかけ、小窓に手をかける。

小窓は大人1人がやっと通れる幅なので、出るにはコツがある。

まず後ろ向きの体勢から両足を一気に外へ出す。

この時、外側の壁にある、出っ張りに足をかけるまでは腕の力だけで体を支える。

出っ張りに足をかけたら、ゆっくりと上半身も外に出す。

最後に粹ごと外した窓をはめ込む。

これで脱出成功と思いきや、最後にちょっとしたものが必要になる。

それは「勇気」だ…

なにせ田舎なので、山や崖が多い。

俺が今ギリギリ立っている、出っ張りから地上までは軽く3メートルほどある。

地上は草村なので、よほど変な体勢で飛び降りない限り大怪我はない。

しかし、真っ暗な草村に飛び込むのは結構な勇気が必要だ。

そろそろ駅員も戻ってきそうだ。

俺は暗くてよく見えないながらも、なるべく草がワサワサしている場所をめがけて飛んだ。

久々の便所脱走のためか、着地までやけに長く感じる。

ようやく草村に着地！

グキッ！

右足に激痛が走る。

体勢を崩し倒れ込む。

着地した右足の下に何かある…

暗いのとワサワサで何か分からない。

ライターで照らしてみると。

何とそこには！

炊飯器？

そう！

確かに炊飯器がフタの空いた状態で草村に埋まっていた。

俺はその炊飯器に、かなりの確率で右足をつっ込んだようだ…

しかも足をつっ込んだ勢いでフタが物凄い早さで閉まり、思いつき  
りスネを直撃する。

突っ込んだ右足をひねった痛さより、フタがスネに直撃した方が痛  
かった。

これはいったい何の罠だ？

誰がこんな所に炊飯器を？

もしかして魔封波？

あのピッコロ大魔王を封じ込めた魔封波なの？

俺は右足をかばいながら歩き出す。

まゝハプニングはあったが駅からの脱出には成功した。

しかし問題が…

時計は23時を少し過ぎていた…

駅員が見回りに来てトイレに隠れた10分のロス。

炊飯器のフタにやられたスネを、右手で100往復以上こすって  
いた5分のロス。

この合計15分で寮まで立ちこぎで行けば間に合ったはず…

すまん。

ハル！

俺は消灯に間に合わなかった。

しかし、ここまでやってくれたハルのため！

くじけそうな気持ちを変えてくれたオヤジのため！

今まで支えてくれたみんなのため！

俺は諦めずに寮まで戻ることにした。

そうだ！

チャリを探さなきゃ！

俺は急いで自転車置き場に向かった。

しかし、いくら探しても、乗り慣れたお使い専用チャリはなかった。

負傷した足で歩いて帰るには時間がかかりすぎる。

いつも2台は待機しているタクシーも見当たらない。

しょうがなく、鍵のかかっていないチャリを探すことにした…

しかし、さすがに田舎でも鍵のかかっていないチャリはない。

どうしよう…

諦めかけたその瞬間！

自転車置き場の一番端っこに！

鍵のかかっていないチャリ発見！

しかし…

ハンドルが真ん中にぐにゃっと曲げたヤンキー仕様になっている…

後ろタイヤはバリバリパンクしている…

しかしチェーンは外れていないので何とか乗れる！

だけど俺は迷った。

本当に歩くより早いか…

このチャリ寮までこげるかな…

本当に体力持つのかな…

なぜこんなに悩むと思います？

パンクしているから？

いやいや、そんなこたゝたいした問題ではない。

じゃ〜何でかって？

だってサドルがないんだもん…

エヘッ

サドルが無くてもオール立ちこぎすれば問題ないじゃん。

後は田舎の坂VS俺の体力勝負だな…

迷っている時間はない。

取りあえず、このヤンキーチャリ（サドル無し）で、行けるとこまで頑張ることにした。

ガッタン ガッタン

ガッタン ガッタン

…

想像以上にパンクが激しい。

空気なんて、これっぽっちも入っていない…

車輪のまわりに薄いゴムが付いてるだけって感じ…

空気穴が地面と当たる度に…

ガッタンと激しい音と共に振動が伝わってくる。

その振動が微妙に負傷した右足を刺激する。

いや、微妙ではなく、けっこう刺激する。

ちょっと「ファ〜」ってなるくらい…

しかし、頭のキレル私は立ちこぎ数回目で「ファ〜」対策を思い付く。

負傷していない左足を踏ん張ってこぎ出す時に、空気穴が地面に来るようにした。

こうすれば負傷している右足は、ペダルに力が入っていない時にガツタンが来るため負担は大幅に軽減できる。

たった数回の、立ちこぎで右足対策を思いついた自分に、またまた酔った。

夜遅くに大学生が、ヤンキーチャリ（サドル無し）を立ちこぎしているだけだが…

思ったより順調だ。

ガツタンのおかげで加速力はないが、立ちこぎが慣れてきた。

しかし自転車ステージ最大の難所が目の前に！

地獄の山越だ。

自転車を左右に蛇行させないと、上りきれないほど急な坂である。

負傷した右足も構ってられない。

痛みをこらえ、ゆっくりと、自転車を蛇行させながらこぎ続ける。

ここを上りきれば、寮まで下り坂の天国モードだ。

そろそろ地獄坂の頂上が見えてきた。

途中何度も自転車を降りて、手で押して上るつもりだった。

しかし降りてしまうと何かに負けた気がする。

歩いた方が絶対早いと思えるような急坂もあった。

でもここまで頑張ったんだ！

最後まで立ちこぎで完走してやる！

「ふんが〜」

あと10メートル。

「ふんぬう〜」

あと5メートル。

「ふらあ〜」

あと1メートル。

「どりゃ〜あ」

地獄坂制覇！

！  
ヤンキーチャリなのに立ちこぎで、1度も降りることなく完走した

俺は地獄坂に勝つたのだ！

ざま〜見る！

今日の俺は無敵やで〜！

俺は何とも言えない達成感と、下り坂に入った安心感でホッとした。

ホッとしたので勢いよくチャリに座った。

パンパンになっている太ももを休めるために…

「ふう〜」

！ 《 ！？

「ぐああああ〜」

地獄の山に俺の叫び声がこだまする。

住宅街なら確実に通報されるほどの大きさで。

さらにその直後。

痛さのあまりチャリを止めることすらできなかった。

ガッシャー〜ン

ガードレールに突っ込み倒れ込む。

ケツを押さえて倒れ込む。

ケツが痛過ぎて軽いショック状態だ。

倒れたまま両足を指先までピンと伸ばし、めっちゃケツを閉じたまま動けない…

うっっ…

変な汗が大量に吹き出る。

俺はふと思った。

肛門とれちゃったかも…

### 脱走3

サドルが無いことを百も承知で乗っていた。

しかし、坂が急過ぎて…

頑張り過ぎて…

下り坂見て嬉しくて…

座っちゃった…

俺がサドルだと思って座った部分は丸い筒状の鉄だった。

もうパイプって呼んで良いと思う。

そのパイプの真ん中に俺は座った。

座った時は肛門周りの肉部分だったので、さほど痛くなかった。

しかし、あまりにも面積の少なさにびっくりした俺は体勢が崩れ、おしりの肉部分から肛門部分にスライドしてしまった。

ガリッて…

そのガリッで、つま先から頭蓋骨まで稲妻が突き抜けた！

だから肛門がそげたかと思った。

「痛い」という言葉では全く足りない表現だ。

既に10分以上は経っただろうか…

相変わらず痛さで立ち上がることができない。

アスファルトにほつたを付けたまま、両足をピンと伸ばし、ケツ筋をめいっぱい使って、肛門をぎゅっとしめている。

どうしても肛門が気になる。

だけど見ることは出来ない。

触ってみる？

えゝ何か怖いよゝ

それも素手はちょっとね…

ティッシュなんて持参して外出したことがない。

ハンカチなんてポケットに入れたことすらない。

何か布っばいものはないかな…

あった！

左手にあった。

リストバンド？

正式名称は忘れたが、確か10年ほど前に流行ったと思う。

元々はスポーツ選手が汗を拭うために手首にはめるタオルみたいなやつ。

それをファッションとして、ラスタカラーなどの柄を手首にはめるのが流行っていた。

さらに、そのリストバンド?の上にGショックなどの時計をするのも流行っていた。

で、俺もその流行に乗っていた…

ゆっくりとGショックを外し、リストバンドも外す。

右手の人差し指から小指までの4本にリストバンドを装着。

体の後ろ側に右手をまわす。

ズボンの後ろからゆっくりとおしりに手を突っ込む。

おしりを開くため少しずつ足も開く。

しかし、後ろからだか肛門までしっかりと手がまわらない。

そのため、今度は体の前から手を入れてみようと仰向けになる。

仰向けになり、両足を開き、今度は前側から手を突っ込む…

今の姿を人に見られたら、確実に警察に通報されるだろう。

大学生が夜中に大きい道路の歩道部分で寝っころがり、両足を大きく開いてズボンに手を突っ込んでいるのだから…

右手はようやく肛門付近に到達した。

本当に肛門が取れていたらどうしよう…

かなり怖いが逃げちゃダメ！

勇気を出して確かめることに。

肛門を一気に触らないよう、ちょんちょんってしてみた。

ちょっと触れるだけで激痛が走る。

俺はこれ以上触れないと思い一旦、右手を退散させる。

恐る恐るリストバンドを見ると血が！

血がああああああああ

俺の肛門から血があああああああ

いゝやくだゝああああああ！

俺は応急処置が絶対必要だと思った。

1秒でも早く寮に戻らねば。

もう時間なんてどうでも良かった。

だって既に24時近かったから…

これ以上この場での診察は意味がないと思い、再び立ち上がる。

しかし、まだまだ歩いて帰れる距離ではない。

しかも、この先は寮まで下り坂。

チャリに乗らない意味がわからない。

しかし立ちこぎスタイルを維持できる体力は既に残っていない。

全神経を肛門に集中したためだ。

精神的に相当やられた。

肉体的にも右足と肛門が…

ふと道路の反対側を見ると、ベニヤ板が落ちていた。

!!!

これだ！

俺は肛門に刺激が加わらないよう、ゆっくりと歩いて反対側に向かった。

落ちているベニヤ板を、ちょうど良い大きさに折る。

できた！

「そ〜く〜せ〜き〜さ〜ど〜る〜」

1人でドラえもん風にやってみた。

この時点で既に精神的に障害が出ていたと思う…

このベニヤをサドルのパイプ部分にのせ、自分のケツでバランスを取りながら座るのだ。

お〜これは新発明！

始めはバランスを取るのが難しかったが、人間やれば何でも出来る！

結構慣れてきた。

しかも快適！

下り坂だしバランスにだけ注意していれば何の問題もない。

夜中のほど良い風を受け、ヤンキーチャリ（即席サドル付き）はグングン進む。

俺はチャリに乗りながら、こんな夜中に傷だらけで、新発明をしてしまう自分にまた酔った。

調子に乗ってスピードも乗ってきた！

空気穴のガツタンのペースがめっちゃ早くなっている。

ガツタンガツタンガツタンくらいだったのに、

今はガタガタガタガタ…と、煙を吐き出す勢いだ。

俺は運転しにくいヤンキー仕様のハンドルを巧みに操る。

しかし、このスピードはかなり危険。

だって右手と左手の間は10センチほどしかないハンドルですから。

絞り過ぎでしょ…

ガタガタガタガタ…

益々加速するヤンキーチャリ（即席サドル付き）

目を思いっきり見開いて、軽くよだれを垂らしながら運転している

俺の顔は、変質者そのもの！

ここで警察に会えば完全に職務質問間違いなし！

ようやく寮が見えてきた！

あと少し！

あと少しだった？



「グサツ」て…

しかも、折れた先はギザギザにささくれていたし。

さらにチャリも普通に止められなかったさつ。

バキッてなった瞬間、左右に蛇行するチャリを必死に軌道修正したけどスピードが早過ぎて無理だった。

今度は農協に突っ込んで、ようやくチャリを止めたよ…

止めたと言うより、激突して止まったんだけどね…

確かJAって看板に書いてあった。

もう俺はボロボロだ…

ちょっと神様やり過ぎじゃね？

ほんの1日だけ寮を抜け出しただけじゃん。

軽く俺で遊んでるよね？

俺はこの時、二度と脱走しないと誓った。

JAから寮までは歩ける距離。

俺はここで相棒？であるヤンキーチャリ（サドル崩壊バージョン）とおさらばした。

このチャリのおかげで、ここまでこれたが、何か心から有難うとは  
言えなかった…

ここまでくると肛門診察は怖すぎてできない。

俺はゆつくりと肛門をいたわりながら寮に向かった。

いよいよ最終ステージの地獄寮潜入だ。

中の様子が気になるが消灯はとくに過ぎているため連絡は取れない。  
(この頃の携帯はメーカーが異なるとメールが出来なかった…)

俺は寮への潜入に、危険な正面を避け、裏手の山側に回る。

シローがいないため寮の電気はついたまま。

シローがいた方がやりやすかった…

まずは洗濯場への潜入からだ。

あらかじめハルにジャージを洗濯場に置いておくよう、お願いしていた。

洗濯場の電気は消えている。

俺は一気に洗濯場へ駆け込む。

急いで電気を付け、ジャージを探す。

私服姿を先輩に見られたら、その場でアウト…

とにかく焦る。

ない！

ない！

俺のジャージがない！

まさかハルが忘れた？

いや、それはないはず。

この計画もハルが考えてくれたんだし。

しかし、いくら探しても俺のジャージはない。

私服では動けない…

最悪俺のジャージでなくても良い。

とにかく私服以外なら何とかなる。

俺は洗濯機の中まで探す。

…

あつた…

俺のジャージ。

びっちょびちょで…

誰かが気をきかして洗濯してくれたようだ…

それも濯ぎまで…

せめて脱水までなら着れたのに。

しかし、私服よりマシ。

俺は大量に水を含んだジャージを洗濯機から取り出す。

必死に絞るが握力が残っていない。

なにせハンドルの幅10センチしかないヤンキーチャリを物凄いスピードで運転してきたのだから。

すると寮の方から足音が聞こえた。

やばい！

俺は急いで電気を消し、びっちょびちょのジャージを持って、再び山の中に飛び込んで隠れた。

草村から足音のする方を覗く。

げっ！

よりによって斎藤…

今見つければ終わりだ。

俺はしばらく山の中で息を潜める。

10分ほど経過しただろうか。

誰の足音も聞こえなくなった。

俺は山の中で私服から、びちょびちょのジャージに着替える。

冷たい…

つてか、水が滴っている。

山の中に私服を隠す。

ジャージになり、いくらか気が楽になった。

でも、水が滴っている。

ついに寮への潜入だ！

忍者のように中腰で走り、食堂の裏手にまわり込む。

食堂の電気が消えていることを確かめ、ゆっくりとドアに手をかける。

そっつと開ける。

すると食堂から近い大部屋から笑い声が。

シローがいないため、上級は飲み会をしているようだ。

大部屋の前を通らなければ2階に上がれない。

なのに…

大部屋のドアは開いている。

きつとこの時間であれば上級は酔っているはず！

素早く通り抜ければ気付かれないだろう。

やるしかない。

俺はゆっくりと大部屋に近づく。

今日1番の緊張だ。

心臓が飛び出しそう！

呼吸も荒くなってきた。

ジャージからは、まだ水が滴る…

上級の会話に集中する。

タイミングを計りながら通り抜けるチャンスを待つ。

行ける！

俺はやれる！

自分に言い聞かす。

しかし…

ばれたら集合…

みんなに迷惑が…

その前にこの場でボコボコかも…

緊張し過ぎて、軽く足が震えてきた。

俺は決めた。

次の笑い声で動くことに。

上級の会話に集中する。

目を閉じて集中する。

「ギャツハツハツハツハ」

今だ！

不安を振り切り一歩目を出す。

右足を踏み出した瞬間！

一番やってはいけないことを…

俺は…

起こしてしまった。

ジャージから垂れていた、

水で滑り、

おもいつきりこけた…

ダーンッ！

一瞬静寂に包まれる。

上級全員が一齐に俺を見る。

終わった…

「おい！お前こんな時間に何しとんねん！」

「す、すみません！」

こくなると思った。

それが…

「おい！お前大丈夫か？」

へっ？

上級はびっくりした顔で俺を見る。

俺は状況がつかめないまま「だ、大丈夫です」と、答えた。

しばらく沈黙が続く。

すると上級から思わぬ言葉が。

「今日は早く寝て、明日病院行ってこい。」

「は、はい…？」

俺は全く状況が理解出来ぬまま部屋に戻った。

俺の部屋の上級は、大部屋で飲んでいたので、すんなりと最終ステージをクリアしてしまった。

なぜだ？

なぜ怒られなかった？

なぜ優しくされた？

普通なら夜中にうるついでる下級を見た瞬間に集合確定か、その場でボコボコだろ？

びしょびしょだから変な奴と思われたのだろうか？

いやいや上級はそんなに甘くない。

じゃ～なぜ？

全く謎が解けないまま、びつちよびちよのジャージを着替えた。

パンツまでびつちより…

すると信じられない光景が目飛び込む！

脱いだパンツが血まみれだ。

さらにジャージも赤く染まっている。

これだ。

水に濡れた影響もあり、ジャージのケツ周辺がほぼ真っ赤だった。

これを上級は、俺がこけた時に血まみれになったと勘違いしたのだ。

あ～神様！

あんたはこの時のためにサドルの無いチャリを用意してくれたのですね！

しかも1回目の怪我では血の出方が足りないもんだから、ベニヤ板

までケツに刺してくれたのですね！

アーメン…

それにしても、こんなに血が出ているとは知らなかった…

部屋には俺1人。

俺はど〜しても気になり再び肛門を診察することにした。

二段ベッドに右手をつき、左手に鏡を持つ。

ゆっくりと股を開き、少しずつ腰を曲げる。

顔が太ももの辺りにきてから、左手の鏡を肛門が見える位置に調整する。

体がかたいので、よく見えない…

作戦を変更し、今度は仰向けになった。

ベッドの中だと明るさが足らず、よく見えないので、部屋の中央に陣取る。

両足を上げて股を大きく開く。

そして左手に持っている鏡で肛門が見える位置に合わせ。

何か映っているが、なにせ初めて見る光景なので、どこの部分が映っているかわからない。

ようやく位置関係がわかってきた。

どうやら切れている部分は肛門の少し横だ。

肛門自体ではなく、少し横ってことは、「お尻」ってことになる。

俺は肛門ではなく、お尻だったことに、何だか嬉しくなってしまう、「よしっ！」と、声に出して軽くガッツポーズをした。

その瞬間、誰かの視線を感じる。

仰向けの状態で、視線だけドアに向ける。

すると！

ドアが完全に閉まっていなかったらしく…

そこには大部屋で飲んでいた上級が立っていた。

冷めた目で俺に言う。

「お前、自分の肛門見て、なにガッツポーズしてんだ？」

俺は慌てて、さっきこけた時にお尻が切れたことにしようと、話そ  
うとした瞬間。

「馬鹿なことやってね〜で寝るぞ！」と、言って電気を消してしま  
った。

俺はパンツもはけないまま慌ててベッドに入る。

「お、お休みなさい！」

ふ

まゝ良い。

とても長い1日だった。

何はともあれ、俺のせいで集合になることは免れた。

俺はパンツもはずずに、死んだように熟睡した。

次の日から普通に地獄生活が始まった…

結局この出来事は俺とハルしか知らない。

あ、あと俺の間抜けな姿は、俺の部屋の上級「後藤さん」しか知らない…

## ウイスキーボンボン（前書き）

この章より上級生です

## ウイスキーボンボン

明日はついに成人式

出来れば地元の、正式な成人式に出たかったが…

きっと同窓会チックに飲みに行つてさっ、

昔は目立たなかった子が、めっちゃ綺麗になってドキツとしたりさつ、

飲めない酒をいつも飲んでいるかのように調子乗って飲んでさっ、

久々の再開で男女共にテンション上がつてさっ、

酔つた勢いでメアド交換しちゃつてさっ、

その後、ちょいちょい遊ぶようになってさっ、

結局付き合つわけでしょ？

あゝ嫌だ嫌だ！

嫌らしいつたらありやしない！

みなさん！

成人式は合コンではありませんよ！

そんなチャラチャラしてっから最近の若者は、何て言われるんだぞ！

成人式と言うものはな〜！

男の生き様を見せ合う場なんだよ！

そんな下心丸出しでスーツや袴を着たって、ろくな大人になりませんよ！

成人式は汚れても良い、ジャージが正装って昔から決まってるの！

ま〜色々と偉そうに言いましたが、私が一番伝えたいのは、とにかく普通の成人式に出たかったと言うことです…

成人式ってね〜

そんな軽いもんじゃござ〜せんよ！

なにせラーメンどんぶりに、なみなみと注がれた焼酎を一気しなれば上級になれないのですから…

ま〜酒なんてこの寮にいれば水みたいなもの。

その辺にいる口だけ達者なチャラ男と一緒にしてもらっちゃ困りますよ。

育った環境が全く違いますからね…

チャラ男が武田鉄矢と言われて赤いキツネと緑のタヌキを買ってこれますか？

どぐせ、ガムをくちやくちや噛みながら「何すかそれ？意味わかんないんですけど、せんぱうい」とか言っちゃうんでしょ！

もう想像するだけで、ポッコポッコにしたくなる！

まゝそんな想像は置いといて…

とにかく俺は一滴も残さず焼酎を飲みきり、見事上級になりましたよ！

一生に一度の儀式でしたが、笑えるエピソードはなかったので話をかなり省略し先に進めます。

で、成人式が終わり1ヶ月ほどでキャンプが始まります。

確かキャンピングはバレンタインデーの数日後だったと思う。

バレンタインデー？

はあ？

鼻くそほじりながら「何それ？」ってなもんですわ…

唯一チョコを貰えるとすれば！

寮の食事を世話してくれる、オバチャンが毎年チロルチョコをくれる程度…

しかし、俺が上級に成り立ての、あの年はレベルアップしてウイス

キーボンボンだった。

俺は適当に一掴みを後で食べようと、枕元に置いた。

置いたと言っか隠した…

そう。

この寮は野生の大国！

食べ物食べたもん勝ち。

食われたくなければ隠すしかないのだ。

カップラーメンなんて買った日にや当日食べるのが鉄則！

俺はたいして好きではないチョコを、せっかくなのでと思い、一掴みだけ貰った。

10個前後だったと思う。

後で食べようと思い、ベッドの隙間に隠した…

「隙間」の説明が難しいのだが、なんとなく感じ取ってください。

まずベッド（木で出来た2段ベッド）が通常の縦幅より長く、2メートルちよいあります。

そこにマットレス+敷き布団を敷いても、30センチほど縦の長さが余ります。

なもんで、空いているスペースにラックを置きます。

ホームセンターなどでよく売っている3段式のラック？棚？みたいなのあるでしょ！

それを横にすると、ちょうどベッドの横幅と、縦の余り幅にスツポリと収まるのです。

しかし、ラックをそのままベッドに置いてしまうと、マットレス+敷き布団の高さとラックとの間に段差が出来てしまう。

この段差を埋めるため、ラックの下にジャンプなどのぶ厚い雑誌を両サイドに2冊ずつ敷いて調整するのです。

すると布団と同じ高さになり、見栄えもよくなります。

で、高さ調整の雑誌は両サイドに敷いたので、中央には空間が出来るのです。

ここにウィスキーボンボンを10個ほど隠しました。

この「隙間」は伝わりましたか？

いまいちの方は、とにかくベッドの枕元付近に隙間があると思ってください。

で、なんだかんだでチャンプイン！

俺は上級になったにはなったが、やっぱりオワメン…

外野で適当に玉拾いをしていた。

するとシローが俺を呼ぶ。

「おいおい、キャンプ初日から雑用かよ」と、愚痴りながらシローの元へ。

しかし、この呼び出しが俺の大学野球人生を大きく変えることに…

シローから思いもしない提示を受ける。

シロー：「お前の肩は、まだ治らないのか？」

俺：「は、はい…」

シロー：「だったら投げる距離の少ない内野をやってみないか？」

俺：「は、はい…」

シロー：「よし！そしたら今日からお前はファーストに入れ！」

俺：「は、はい…」

俺は2年間もオワメンだ。

この立場に慣れた人間に、選手としてのプライドはもはやなかった…

だから、どうせ内野に移ったって何も変わらないだろうと思っていった。

あまりレギュラーになりたいなんて貪欲さもない。

オワメン根性が染み付いて取れないのだ。

いや、本当は逃げているだけ…

小学校からエースで4番。

中学も高校も周りからは一目置かれていた。

しかし、大学では怪我の影響や、まだ下級だったことはあったにしろ、レギュラーでいられない自分が許せなかった。

補欠の立場。

補欠どころかベンチ入り出来ない、スタンド組みの立場。

俺はこの2年間で初めて知った。

とても辛く、とても切なく、とても歯がゆい。

このキャンプ中に何かが目覚めた。

俺の心の一番奥底にある野球魂！

ギリギリ捨てなかった最後のプライド。

レギュラーになりたい！

試合に出たい！

この日から俺は、今まで見ない振りをしてきた「レギュラー」と言う言葉を直視することにした。

今までレギュラーでずっとやってきたと言う、しょーもないプライドは捨て、試合に出たい！そのためにレギュラーでいたい！と言う純粹な気持ちでやって行こうと強く思った。

その日から俺は真剣に野球と向き合った。

高校まで外野を守っていた俺が、大学から内野にコンバート…

学生ではトップレベルの大学野球…

スピードに付いていくのがやっと…

自信のあったバッティングも…

ピッチャーの投げる球がめっちゃ早い…

普通に140キロ出てるじゃんけ…

初めは戸惑いながらも、何とかついていった。

キャンプも終盤に入り、練習試合が組まれる。

明日は今シーズン初の練習試合。

ここでのスタメンが、監督の構想ではレギュラー候補となる。

いよいよ明日！

俺は不安と期待を胸に抱き翌朝を迎えた。

午前中に軽い練習を行い、午後からの練習試合に備える。

午後1番には、いよいよスタメン発表！

だったのに…

俺は昼飯後の一服タイムを、仲の良い先輩と楽しんでいた。

2年がダツシユで喫煙中の俺達のもとへ。

めっちゃ息を切らして焦っている。

「ハ―ハ―ハ―」

俺は上級って素晴らしいな〜なんて優越感に浸りながら、走ってきた2年に語りかける。

「何をそんなに焦っているのかね？」と、貴族気取りで。

すると2年は「やばいっす！もうスタメン発表始まってます！」

…

スタメン発表の流れは、まず対象となるレギュラー組みの全選手が監督の前に集合。

監督に名前を呼ばれたら勢いよく返事をする。

「1番センター、イチロー」「ハイッ!」みたいな感じで。

「ハイッ!」と、返事を返した時点でオーダーが確定する。

シンプルでもとても単純だが、試合前の最もピリピリした瞬間。

この最もピリピリしている瞬間に、俺は先輩とのん気にタバコを吸っていた…

慌てて集合場所に駆け寄るも、発表は終わっていた…

しかも、先輩と俺はスタメンだったようだ。

しかし、返事がないので次のレギュラー候補がスタメンに…  
さらに!

「お前らどこにいたんだ!」と、シローが怒鳴る。

俺はのん気にタバコを吸っていましたが、芝生で昼寝をしていました」と、答えた。

するとシローは鬼の形相で「ばかもん!」と言いながら俺と先輩をビンタした。

熾烈なレギュラー争いを生き残るために必死でやってきたキャンプ中の練習。

さらに今シーズン初のオープン戦（練習試合）で、みんな緊張しているのに…

焦った俺は言い訳を間違えた。

芝生で寝ていましたって…

もう少し気のきいた嘘があったはず。

そりゃ〜叩かれるわな…

せつかくのチャンスをタバコ一本で失った…

途中交替することなく普通に試合終了…

出だし最悪のオープン戦だった。

しかし、次の試合からは俺も先輩も試合に出してもらえた。

楽しい！

野球って楽しい！

やっぱり野球が好き！

こんな感覚何年ぶりだろう…

その後も順調に結果を残し、俺は3年の春によつやく「レギュラー」を掴み取った。

長かった。

あの時に辞めなくて本当に良かった。

俺にとってはターニングポイントとなった3年のキャンプ。

大満足な1ヶ月であった。

そんなこんなでキャンプも終わり、俺たちは1ヶ月ぶりに寮に戻ってきた。

俺は慣れないレギュラー生活で、精神的にも肉体的にも疲れていた。寮に到着後、ぼろっとテレビを見ていたが21時頃には寝てしまった。

疲れていたのだからかなり熟睡していたと思う。

しかし…

ガサガサ…

ガサガサガサ…

ん？

俺はガサガサと言う音で、夜中に起きてしまった。

頭の上の方で音がする。

しかし俺が起き上がると音は止まる。

何だろう？

夢かな？

俺はまた眠る。

ガサガサガサ…

「フンッ！」

俺はがばっと起き、即座に電気を付ける。

やはり音は止まる。

何だ？

絶対何かいる！

しかし辺りを見回しても何も無い。

やべ〜

2年の夏に見た霊の仕業だ…

俺は完全にびびった。

びびったが夜中の3時。

誰かを起しても解決できる問題でもなさそうだし…

俺はびびりながらも無理やり眠った。

チュンチュンチュン

外ですずめが元気に飛んでいる。

あっという間に朝を迎えた。

全然寝られなかったじゃん…

超眠い…

俺は寝不足のまま練習に行く。

過酷な練習に耐える。

疲れたので早めに寝る。

またガサガサする。

また起きる。

やっぱり何も無い。

また寝不足。

この繰り返ししが1週間も続いた。

唯一分かったことは、平均してガサガサは夜中の3時頃に聞こえる。

しかし、原因は分からないまま…

相変わらず練習は過酷。

しかし寝不足…

目の下にはクマが…

俺は体調を完全に崩していた。

本気で御被いに行こうと同じ部屋のタッチンに相談する。

すると、全く霊を信じないタッチンが「ほんじゃ今日は寝る場所を俺のベッドと交換してみよう」と言う。

これでもガサガサが聞こえるのであれば御被いに行けと…

俺は1週間も確実に聞いている。

ベッドを変えたって意味がない。

あの霊は俺の上で絶対にガサガサするに決まっている！

まゝタッチンがせっかく提示してくれた案だ。

期待は出来ないが試してみようと思い、言われるままベッドを交換した。

その日の夜。

俺は不安で寝れなかった。

しかしガサガサは聞こえてこない。

するとタッチンが！

「ギイヤ〜！」

タッチンが夜中の3時に叫び出す！

なに？なに？なに？

霊を信じないタッチンが叫ぶってことは！

本当に出たんだ！

ねっ！ねっ！

やっぱりそのベッドには霊が出るっしょ！

俺も慌てて飛び起き、近くあるバットを両手で握り締め、タッチンの元へ！

タッチンは完全に見てはいけない物を、見てしまいましたと言わんばかりの表情をしている。

俺は恐る恐る何を見たか聞いた。

するとタッチン口から衝撃の真実が！

タッチンは呆然としながら俺に言った。

「おい、マジで出たよ…」

「どんなのだった？」と、俺は聞く。

またまたタッチンから衝撃の言葉が！

「10匹は確実にいた…」

マジ？

確か俺が2年の夏に見た霊はバカでかい女性だったはず…

それが10匹以上も？

この部屋に入りきるのか？

さらに続けてタッチンが言う。

「お前さ、何でこんなとこに隠すわけ？」

はっ？

何だ隠すって？

この会話の流れは変だろ？

俺はタッチンが霊に取り憑かれて、おかしくなったのかと思った。霊に取り憑かれたタッチンを、こっちの世界に戻すため、必死に語りかける。

「何だよタッチン！隠すって何をだよ？しっかりしろっ！」  
するとタッチンは冷静に言い返す。

「しっかりすんのはお前だよ」

うお〜い！

超やつべー！

タッチンが本格的に取り憑かれちゃった…

俺は慌てて誰かを呼びに行こうとした瞬間！

強い力に止められる。

ガシッ

タッチンの右手が俺の肩を押さえつけていた！

俺はゆっくりとタッチンの顔を見た。

軽く笑みを浮かべている…

うっひょ〜超怖っ！

取り憑かれると半笑いになるかよ…

するとタツチンが指を指す。

何だよ！いよいよ何かの儀式が始まるのか？

俺はびびりながら指した方を見る。

するとそこは布団が激しくめくれ上がっていた。

おや？

これが霊と戦った後か？

いや違う！何かある。

よく見ると紙くずのような物が細かく切り刻まれている。

俺は気になり近寄って確認する。

あっ！

キャンプ前に隠したウイスキーボンボン！

しかも中身は跡形もない。

包みだけが残っており、それも細かく切り刻まれている。

いったい誰がこんなことを？

俺は不思議そうな顔でタッチンを見上げる。

タッチンはもう1回俺に同じ質問をした。

「何でこんな所に隠したんだよ！」

…

「いや、特に理由なんてないんだけどね、ちょうど良いスペースだったからさっ…」

俺は照れながら答えた。

「あつそ。まゝ、そんな理由はど〜でもいいんだけど、巢になつたよ。巢に。」

タッチンは呆れ顔で俺に言った。

へっ？

既に何となく霊ではないことが分かっていたが、気になる犯人を聞いてみた。

何が巢を作っていたの？

するとタッチンは

「ネズミだよネズミ〜！」

こゝんなでつかいの！

しかも子供もいたから、このスペースが巢にはちょうど良かったんじゃないね！」

∴

∴

∴

「ギイヤ〜」

## ヘアサロン馬場

「うん微妙だな。」

でも、あの距離なら何とかなるか！」

俺は決心し、同期のトモと床屋に向かった。

下級生時代は集合の度に坊主…

あまりにも頻度が多いので自分でバリカンを買った。

そして自分で刈った…

しかし今は上級！

そりゃ〜髪伸ばすっしょ！

野球小僧は中学時代から坊主であることが多い。

一番異性を気にする中学、高校と多感な時期に髪を伸ばせない…

坊主だよ！

中学時代なんて、五厘刈り（バリカンのアタッチメント無しが一番短いやつ）だったので喧嘩になるものなら、「黙ってるジャガイモ！」の一言で終わらされる。

ジャガイモって…

だからね、こんな暗い過去があるため、髪を伸ばすことには、異常な反応を示す。

坊主の時は、髪をセットする夢を見たくらいだ。

上級になり、やっと髪が伸ばせる！

だから今日は2年振りの床屋に行くのだ！

寮から床屋まで片道20分ほど…

この辺りに唯一ある床屋だ。

俺と同期のトモは歩いて床屋に向かっていた。

寮を出る前に俺は悩んでいた。

悩みに悩んだ。

ウンチ君をしてから行くか、床屋でするかを。

割と寮で済ませてから行きたい位のレベルだった。

ここの判断は軽はずみに出来ない。

なにせ片道20分。

しかし、トモを外で待たせている。

うん。

悩む…

ビビりな俺はトモを待たせているプレッシャーの中、適当な時間内でウンチ君が出来ないと判断した！

急いでいる時に限って、いつ拭いて良いか分からないウンチ君になる。

拭いたとしても、あひゃひゃひゃひゃなことが多い…

あひゃひゃひゃひゃは、拭いても拭いてもティッシュにウンチ君が付くって意味ね！

…

で、俺は20分間ウンチ君を収納したまま床屋に行く決心をしたのだ。

そりゃ〜一大決心でしたよ。

なにせ軽く漏れそうなレベルから20分もお腹の弱い俺が我慢しようってんだから。

20分か…

俺の中では限界すれすれ。

心なしか早歩きになる。

床屋までの道のりは、ほとんど下り坂だ。

一歩踏み出す度にウンチ君が1mmずつ降りてくる気がする。

ちょうど半分ほど進んだ頃だった…

やっぱり…

無茶だったかも…

ウンチ君の我慢レベルはK点を超えかけていた…

猛烈なビッグウェイブが俺を襲う。

一旦立ち止まり、波が治まるのを待つ。

ゆっくと深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。

「ふ〜」

少しずつ波が退いていく。

あと半分。

寮に戻っても、床屋に行っても同じ距離。

ここで引き返すのは何か負けた気がする。

俺は床屋へ新たな一歩を踏み出す。

よし！まだ頑張れる。

さっきとは打って変わって超スローペース。

刺激を与えないよう、ゆっくと歩き出す。

ようやく床屋が見えてきた。

ちよつと待った！

安心するのはまだ早い。

よく素人はここで気を抜いてしまう。

気を抜いた瞬間に奴はやってくる。

あのビッグウェイブが！

便座に座るその時まで！

絶対に気を抜いてはならない。

あと100mほどまで近づいた。

しかし、俺は嫌なものを見てしまった。

床屋のクルクルが回っていない…

確か白と青と赤がうねうね上るように見えるやつ。

いやいやいや。

壊れているか、電源入れるの忘れただけっしょ！

俺は既に床屋までしか我慢する力は残っていない。

この時点でヘアースロン馬場が休みの場合は、俺の死を意味する。

何とか床屋までたどり着いた

のに！

ヘアースロン馬場の入口には

「今日は定休日です」と…

駄目だ。

もうどうしたって駄目だ

肉体も精神もK点を超えた。

俺は決して気を抜いた訳ではない。

物理的に限界を超えたのだ。

物凄い力で閉じている肛門を、奴は簡単にすり抜けてきた…

しかもゆるゆるバージョンで…

ブリッ！

完全に肛門からウンチ君は出た。

あゝ出たさっ！

しか〜し！

ここで諦めては素人。

肛門から出てしまっても、決してケツの力を緩めてはならない！

少しくらいであれば、外に飛び出すことなく、ケツ割れ目の中に収まっているのだ。

これを名付けて！

「肉止め」と言う！

床屋についた瞬間、定休日だと知り、いきなりケツからウンチを垂れ流す友達をあなたはどう思いますか？

変態ですよね？

ただでさえ、シローには変な奴と思われているのに…

ここで漏らしたらトモにまで変態扱いされてしまう…

俺は必死で肉止めを継続させた。

「お、俺大学3年生だけど、ウンチ我慢できないから野グソして帰るわ！」

と、トモに伝えヘアースalon馬場の裏にある森に駆け込む。

俺は適当な場所を見つけ、残りのウンチ君を解放した。

何とか肉止めは成功。

しかし、肉止めとは言え、正確に言えばウンチ君は漏れている。

お尻の間に挟まっていると表現した方が正解だろう。

したがって、お尻の広範囲にウンチ君が…

これをティッシュ無しで処理するにはどうするか？

まゝ素人であれば軽くパニックになるだろう。

しかし、ゆるゆるウンチ君歴20年の私に係れば、こんなもの。

ピンチの内に入らない。

それでは説明しよう！

題して！

「床屋（ヘアースalon馬場）まで何とか持つと判断したが、定休日  
でトイレを借りれず、シヨックでちよと漏れちゃったけど、得意の

肉止めで大惨事は免れたので、この後の処理をティッシュ無しで切り抜ける大作戦！」

まず残りのウンチ君を解放。

次にパンツとズボンを脱いで、下半身だけ真っ裸に…

ズボンは履いて帰らねば本当の変態になってしまうので、大事に草村に保管する。

そしてパンツを犠牲にする。

そう。

パンツをティッシュ代わりにするのだ。

広範囲に渡るウンチ君をぬぐい取る…

しかし、パンツだけでは足りなかった…

さうどうする？

まだウンチ君はお尻に沢山付いているぞ！

素人であれば、ここで絶望感に襲われるだろう。

妥協してズボンを履いてしまう人もいるだろう。

しかし！

まだまだ！

ティッシュの代替品は山ほどある。

次は靴下！

しかし、靴下の場合には面積が狭いため、注意が必要。

逆に靴下の特性を活かすのがプロ。

パンツで拭いたとはいえ、細かい部分には届いていない。

そこで！

靴下に手を突っ込む！

すると！

何と言うことでしょう

さっきまでは届かなかった割れ目部分に、まるで素手感覚で届くではありませんか。

これがプロ！

ちなみに靴下でも駄目ならTシャツを使えば良い。

要は、他人に見られても通報されない格好であれば何でも良い。

着ていなくても、通報されない順に脱いでいけばよいのだ。

パンツは外から見えるの？

靴下なんて履こうが履かまいが自由でしょ。

次のTシャツからは時と場合により判断せねばならない。

真夏であれば上半身裸でも問題ない。

冬であれば何枚も服を着ているので、犠牲に出来る服は選び放題。

しかし！

春先と秋口は注意が必要だ。

薄着だし、裸だと変態扱いされる。

だから、俺がここで言いたいのは、漏らすなら夏か冬ってことだ！

…

俺は何とか、お尻の周りを現状復帰させた。

トモには先に帰ってもらっている。

1人でとぼとぼ寮まで歩く。

何だか情けなくて涙が出る…

どころか！

美味しいネタが出来たと笑顔。

しかし、帰り途中あることに気付。

違和感がある。

お尻に違和感がある！

正確に言うと肛門に違和感がある。

俺はズボンの上から軽く触る。

ワオッ！

腫れている。

俺はダッシュで寮に帰り、またも鏡で自分の肛門を確認する。

今度は部屋に鍵をかけて。

すると…

肛門を蚊に刺されていた…

肛門だけでなく、お尻の周り6箇所ほどを刺されていた。

肛門には2箇所。

正確に言うと1箇所だが、刺された場所の数ミリ横に2度目をくら

っていた。

だから通常の2倍近くに腫れあがっている…

これが歩くと擦れて痛痒い。

どんなに大きく足を広げて歩いても、腫れているから擦れるのだ。

これでは練習どころではないと思い、俺は刺された部分に薬を塗った。

間違えてキンカンを。

それは塗った瞬間でしたよ。

サドルで怪我をしたときのように、仰向けに寝ながら両足を広げ、左手に鏡を持ち、右手にキンカンを。

慣れたもんで、一発で患部に塗れましたよ。

しかしね、

仰向けに寝ているのに、手を使わず起き上がれるほど飛び上がった  
さっ！

もうね、火ですわ。

火！

例えるなら、

熱いのと、

辛いのと、

痛いのと、

何か尖った物が刺さったのと、

サドルのガリツを、

全部たして、

さらに100でかけた位の感覚ですわ！

いいですか！

まずウンチを漏らすなら夏か冬！

そして、キンカンは肛門に塗ってはいけません…

## チームシシナベ

「お疲れ様でした〜！」

今日もようやく長い練習が終わった。

だいぶ疲れていたが、俺は気になるあれを確かめに行った。

打撃練習中にファールボールを取りに行った時のこと。

グラウンドからフェンスを乗り越え、草村の中に打ち込まれたボールを探しに向かう。

かなり奥まで打ち込んだので、草村をかき分け奥へ奥へと進む。

ボールは全く見つからない。

つてか、疲れていたのでも、そもそも真剣に探す気がない。

普通なら柵越えしたファールボールは1年が取りに行くもの。

しかし、今回は俺がファールボールを取りに向かった。

正確に言うとタバコを吸いに向かった。

なもんで、適当に探すふりをして、ユニフォームのポケットからタバコとライターを取り出す。

ヤンキー座りでタバコに火をつける。

プハッ

この吸っちゃいけない時に吸うタバコほど美味しいものはない！

タバコを吸い終わり、地面で消そうとした瞬間！

非常に興味深い物を発見した。

足跡？

何度も言うがグラウンドは超ど田舎にある。

都会では見られない獣もたくさんいる。

俺が発見した足跡はおそらく猪！

これを見た瞬間！

俺の中で今日の夕飯が決まった。

猪鍋

俺は練習終了後に部屋っ子を集め、緊急サミットをひらく。

(部屋っ子とは、寮で同じ部屋になった下級のこと)

俺の独断で猪狩りプロジェクトが発足した！

隊長は俺！

一応、4年の先輩に声をかけたが、「お前といると、ろくなことが無い」との理由で、3年ながらにして俺が隊長に

副隊長は頭の回転が早い2年の安永。

通称ヤス。

突撃隊には1年のコマチとタマゴツチを任命した。

ちなみに秋田出身だからコマチ。

本当の名前は西田…

タマゴツチは単純に太くて丸いから。

この選りすぐり4名のプロジェクトを、チームシシナベと命名。

早速、猪狩りに向かう。

威勢よく出発したが、ヤスが俺に質問する。

「す、素手っすか？」

…

俺は「当たり前でしょ！」って顔で、部下どもに的確な指示を出す。

「1分以内で猪狩りっばい武器を各自で用意しろっ！…俺のぶんもね！」

俺はタバコに火を付け武器の調達を偉そうに待つ。

一番乗りはヤス。

ふむ。

さすが副隊長。

頭の回転も早いが、やることも早い。

ヤスが持ってきた武器はトンボ！

（グラウンド整備の時に、押したり引いたりして地面を平らにする道具）

しかもアルミタイプ。

（トンボは木や鉄、アルミなどの材質があり、特にアルミは軽いので、下級の中でも2年しか使えない）

なるほど。

これなら軽いし、素早い猪にもある程度の距離を保ちつつ攻撃できる。

俺はヤスに10ポイントやった。

ヤスのすぐ後にタマゴツチが、ぜい肉をタップタップ揺らしながら駆け寄ってくる。

何か知らんが、ちょっとだけイラッとしたのでケツをおもいっきり蹴ってやった。

タマゴツチが持ってきた武器は袋に入った大量のボール。

初めは疑問に思ったが、すぐにピンときた。

なるほどね〜

飛び道具は必要だ！

想像以上にでかい猪だったり、想像以上に早かったら接近戦は無理。

遠距離からボールを投げて逃げるしかない。

ここで俺は考えた。

ボールを投げるのならピッチャーの方が命中率が高い。

タマゴツチはキャッチャーだし、動きが鈍い。

そうだ！

「タ、タイム！」

俺はタイムを取り、選手交代を呼びかける。

ヤスとタマゴツチは、俺が誰にタイムを要求したのかオロオロしている。

全く意味の分からない俺の行動に、どうリアクションして良いか分からず困っている。

俺は構わず続ける。

「選手交代をお願いするのでござりまする〜！突撃隊タマゴツチに変わり、ピッチャーキクリン（菊池）！」

？顔のタマゴツチは、何となく状況を理解し、慌ててキクリンを呼びに行く。

訳も分からず1年のキクリンは袋一杯に入ったボールを背負い、俺の前に。

「お前を今日からチームシシナベの第一狙撃隊に任命しちゃいますのよ〜！」

一瞬？顔をしたが、キクリンは何となく理解したようで「有難うございます！」と、でかい声で返事をする。

俺はいきなりキャラをヤクザ風に変え、「いいか！良く聞け！このチームは完全な実力主義だ！遊び感覚でいるやつは即クビだからな！分かつたら返事〜！」

「は、はいっ！」

何もしないままクビになったタマゴツチは、なぜか悲しそうな顔で去っていった。

確かに何も悪いことはしていない。

しかし、武器の選定が悪かった。

デブのくせに飛び道具なんか用意するから。

イメージ的に、肉まんでも食いながら、でっかい棍棒でもかついでりゃ合格だったのに。

俺は実力社会の厳しさを教えてやった。

この世界で生き抜くには、瞬時に状況を判断し、いかに先輩のイメージ通り先読みして動けるかが重要。

一言で言えばセンスだ。

そのセンスがない人間がもう一人いた。

コマチ…

そう言えば未だに戻ってきていない。

既に1分は越えている。

俺はチームシシナベの補欠に降格したタマゴツチにコマチを呼んでくるよう指令を出す。

威勢の良い返事をしたタマゴツチは、またもぜい肉をタップタップ揺らしながら走り出す。

またもイラツとしちゃった。

俺は練習代わりに、キクリンに狙撃を命じた。

ターゲットは肉の塊タマゴツチ。

キクリンは袋からボールを取り出し、ゆっくりと振りかぶる。

左足を高く上げ、大きく前に踏み出す。

しなやかな腕からボールが放たれる。

ちなみにキクリンは140キロを超える強肩。

ボールは一直線にタマゴツチに向かっている。

バチンッ！

太ももの裏に見事命中

タマゴツチは痛がってケンケンしている。

ケンケンの度にぜい肉がゆさゆさ上下する。

また、その姿にイラッとしてしまい、続けて2投目もキクリンに指示。

しかし、今度はこちらを見ているため、簡単に避けやがる。

その避ける顔から余裕さえ感じられる。

えくえく、わたくし身軽なデブでございますが何か問題でも？って顔をしている！

この表情にイラッを超え、ブチっとなり、総攻撃をかける。

俺とヤスも加わり、3人で一斉に攻撃する！

それすらも避ける身軽なデブ。

ムカツ！

こんのデブが！

俺はボールを持てるだけ抱え、デブに降り注ぐよう、空に向かって高く投げる。

ちょうどボールが落ちてくる頃にヤスとキクリンが弾丸ライナーを投げ込む。

上から降ってくるボールを避けながら、真横からくる弾丸ライナーは避けられまい。

ベチ！

キクリンの140キロを超える豪速球がタマゴツチのスネに命中した…

タマゴツチは痛さのあまり、辺りを走り回る。

しばらく痛がると、ボールをぶつけられたのに、こちらに深々とお辞儀をしてから、再びコマチを呼びに行った。

よし！

これで狙撃隊の射程距離、命中率、威力が把握できた。

タマゴツチに呼ばれ、ようやく汗だくのコマチが戻ってくる。

コマチが持ってきた武器は…

プラスドライバー

これだけ時間をかけて、プラスドライバー一本だけを武器として持ってきた。

かなりの接近戦を想定しているのか？

つてか、プラスドライバーで、どうやって猪を？

俺が悩んでいるとコマチが理由を口にした。

「目です。最悪の場合はこれで目を突くんです！」

ほ

なるほど…

これで目をね

やっぱり超接近戦を想定している…

まゝコマチが猪の目を突いてる間に、俺は逃げれば良いと思い、す

んなりOKを出した。

肝心な俺の武器は誰も持ってこなかったので、その辺に転がっていたノックバットを手に取り、いざ出発！

フェンスを超え昼間に見た足跡をたどり山の中へ。

日も暮れ始めてきた。

急がねば逆にやられる。

俺は歩く速度を上げ、ぐんぐんと進む。

しばらく歩くと猪の足跡が複数に！

おゝ

この辺りが猪の住処か？

俺は慎重に辺りを見渡す。

すると！

40メートル位先に何か動くものが！

「しっつ！」

俺は全員の足を止めさせ、動いている物の方向を指さした。

間違いなく何かいる。

しかし怖い…

想像以上に怖い…

猛烈に怖い…

ブヒブヒ言いながら、物凄い早さで突進されたら…

きっと恐怖で動けなくなると思った。

俺は考える。

一番安全な方法を。

ここは飛び道具で様子を見るのが無難。

射程圏内ではないが、俺はキクリンに狙撃を命じた。

指令を受けたキクリンが肩をぐわんぐわん回しながらウォーミングアップを始める。

まだ奴は動いている。

キクリンはアップが完了したことを、俺に目で合図する。

俺は大きく頷いた。

キクリンがゆっくりと振りかぶる。

足を高く上げる独特のフォームから、第1投が放たれた！

相変わらずの豪速球が周りの木々を上手く交わし、生き物に向かって行く！

球威が落ちることなく一直線！

これは命中する。

そう確信した瞬間！

バチッ！

命中

しかし次の瞬間！

「ウアアア〜！」

???

へっ？

まじ？

猪がしゃべった！

いや、そんなわけない！

すると「ゴラアアア〜！」と、怒鳴り声！

俺は一斉に退散の指示を出す！

ってか何も言わず走り出した。

それを見て隊員も走り出す。

「オラアまでーっ！」

とにかく夢中で逃げた。

なぜあんな山の中に人が？

俺たちは恐怖のあまり、相当山奥まで逃げこんだ。

ここまでくれば大丈夫だろう。

地面に座り込み息を整える。

いや〜びっくりした。

山の中にいた人間を狙撃してしまうなんて…

あんな所にいる方が悪い。

いったい何をしていたのか？

既に日もだいぶ落ちてしまった。

とんだハプニングで戦意も喪失しつつある。

今日は諦め下山するか…

それにしても、かなり山奥に入ってしまった。

帰る方向がいまいち分からない…

俺は元々方向音痴だ。

ここは頭のキレるヤスに判断を委ねる。

ヤスは凜々しい顔で、「こっちです!」と、言い先頭を歩く。

この瞬間ちよつとかつこ良いと思ってしまった…

抱かれても良いかな何て…

冗談です…

やっぱりだ!

俺が思っていた方向とは逆にヤスは歩き出す…

この帰り道。

さっきのハプニングで緊張感は全くなかった。

ってか猪なんかいるわけない!

いたって捕獲できるわけない!



横切っていった。

…

人間びびり過ぎると声が出ないって本当だった。

いないと思っていた猪が、俺たちの前をリアルに横切ったのだ。

それも4匹も。(3匹は子供だった)

4人はしばらく固まったまま動けない。

俺は我に帰り、「キ、キクリン！狙撃や！狙撃開始！」と指示を出す。

キクリンは慌ててボールを取り出し、猪の走りぬけていった方向にボールを投げ込む。

しかし、既に猪の姿は見えない。

何と言うことだ！

猪狩りに来た俺たちが、猪を見て一步も動けなかった…

「ちつくしよ〜！」

俺は急に悔しくなり、プラスチックドライバーを武器としているコマチに追跡を指示！

さらにキレ気味で「コマチもつとダッシュ!」と怒鳴る!

すると!

なんと!

ありえないことが!

「ウワアアアアア!」

コマチが急に叫びだす!

しかも倒れこんでいる。

「ギヤアアアア」

転んだだけだろ?

いや、何か様子が変わだ!

俺は何事かと思い、コマチに駆け寄り。

マジかよ…

俺は自分の目を疑った。

コマチが…

コマチは…

人間なのに…

猪の…

罨にかかっていた…

罨がどんな構造なのか未だに分からないが、ガツシってなるやつに足が挟まれていた。

何と言うか、両方から真ん中に向かってガツシってなるやつよ！

恐らく、真ん中辺りを踏むとガツシってなるんだと思う。

それにコマチが挟まっていた！

俺はめっちゃ焦った。

コマチの声にならない声を聞き、さらに焦る。

俺たちのイメージでは相当強い力で足を挟まれているに違いない！

へたすりゃ足が取れちゃうんじゃないかと！

俺は冷静にコマチの脚が挟まれている罨を覗き込む。

ヤスの持っていたアルミ製のトンボを罨の隙間に入れる。

グツと力を入れて罨を無理やり開こうとした瞬間。

バキッ！

俺はアルミ製のトンボが折れたと思ったが、罨が壊れた。

良く見ると錆だらけの古い罨だ。

何年も前に仕掛けたのだろう。

コマチはそれを見て安心したのか、気を失ってしまった。

コマチの足を恐る恐る見ると、ちよつとだけ皮が剥けている程度…

古い罨だったので、挟む力はさほどなかったのだろう。

しかしコマチは罨のガッシつと言うイメージでパニックっていたのだ。

俺たちはホットする半面、がっかりもした。

続けて、ちよつとだけ焦らされたコマチにイラツとした。

だから俺たちは…

気を失ったコマチをそのまま置いて下山した。

皆さん！

立ち入り禁止の山には入っていきませんよ！

あっ！

そうそう！

コマチはちゃんと帰ってきましたよ！

はんべそで23時頃に…

気が付いた時には真っ暗で迷ったんだって。

## ペンギン村

俺も3年になり落ち着き始めた秋の出来事…

「まさか、あれじゃないよね？」

俺は小さい声で聞く。

しかし、返事がない。

「ね〜ね〜、

いくら何でもあれはないよね？

ね？

ね〜ってば〜！」

タケルは何も言わない…

「やっぱあれなのか…！」

そう。

今日はタケルの彼女の女友達を紹介してもらった日！

俺はめちゃくちゃ楽しみにしていた。

アスカと別れてから早1年。

しばらく彼女なんかいらなと思っていたが…

上級になり自由な時間が作れるようになった。

やっぱり彼女が欲しい！

俺は以前からタケルに紹介をせがんでいた。

始めは面倒臭そうにしていたタケルも俺のしつこさに負け、紹介してくれることになった。

その紹介の日がやっときたのに…

あのね、

何と言いましようか。

上手く説明出来るか分かりませんが…

背は160センチほど。

髪は長いけど…

帽子をかぶっている。

流行りか知らんが、オーバーオール…

上着は黄色と赤の横シマ柄…

靴はフルマラソンにも耐えられるくらいのごっついスニーカー…

フチが紫色の大きいメガネをしている…

長い髪は耳の後ろで両サイドに結んでいる。

さく誰でしょう？

はいっ！

皆さん全員正解です！

そう…

アラレちゃん！

完全にアラレちゃんがいる！

実写版のアラレちゃんが俺の目の前にいる！

今にも両手を水平に広げ、キーンって言いながら走り出しそう。

しかも、めっちゃ笑顔。

意識しなきゃ絶対あんなコーディネートはできない！

今で言うコスプレ状態。

酔った勢いで「ガツチャン元気？」って言ってしまっそう…

俺が一番苦手な不思議系…

ドタキャンも考えたが、タケルの彼女に申し訳ない。

しかし、何とかキャンセルしたかった。

「おいおいタケル、

何とかならんのかね？

アラレちゃんが来てますよ！

何かの手違いでしょ？」

俺が文句を連呼するとタケルがキレる。

「お前が紹介しろって言ったんだろ！」

ムカツ！

俺は歯を食いしばったまま反論する。

「あのな、俺は髪が長くてジーパンの似合う爽やか系の女の子と言ったはずだ！

誰が髪を後ろで2つに結んでいる、オーバーオールを着たアラレちゃんを連れて来いと言ったんだ！あん！」

タケルは数秒黙った後に、笑顔でこう言った。

「ま、飲めば何とかなるべ！ほれ行くぞ！」

俺が「うん」と言う前に、待っている2人のもとへ行ってしまった。

「どくもどくも！遅くなってごめんね〜！」

タケルが勢い良く2人の中へ。

アラレちゃんが振り返る。

俺たちは瞬時に固まる…

…とりあえず1次会の居酒屋へ。

タケルと彼女は先に歩く。

次に俺とアラレちゃん…

何かずつと俺を見てる…

ダメだ…

完全にはめられた。

これはタケルの罠だ。

ぜって仕返ししてやる！

そう心に誓い、俺は今日と言つ日を諦めた。

今日はアラレちゃんと飲む！

そう！

ここはペンギン村！

居酒屋到着…

やっぱりアラレちゃんは笑っている。

もう覚悟を決めて飲むしかない。

俺のやる気はアリのふくらはぎ程度。

自己紹介もなく、何となく飲みが始まる。

さすがのタケルも黙ったまま。

この沈黙を破ったのがタケルの彼女。

「あつ！忘れてた！自己紹介しなきゃね！」

おいおいタケルの彼女さんよ！

余計な事はお止めなさい！

俺はタケルの彼女にすら怒りを覚えた。

本当にアラレちゃんを俺に相応しい彼女候補に選んできたのか？

もしかしたらタケルの彼女もおかしいんじゃないのか？

そんなことを考えていると、タケルからの自己紹介が始まった。

「タ、タケルです。今日は楽しく飲みましょう！」

なぐにが楽しくだ！

ぜってー復讐してやつからな！

続けてタケルの彼女。

「今日はお2人のために頑張ります！」

…

怒りで言葉にならない。

そして俺の番に。

俺は気を使いながらも、低いトーンで挨拶する。

さく次はアラレちゃん。

アラレの番だよ！

「ノリマキアラレです」なんて言ったら殺す。

すると、衝撃の言葉が！

「うんちゃー!」

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

お~~~~~い!

山が動いたぞー!

やっほ~~~~~!

ウッホ!

ウッホ!

言ったよ!

本当に言ったよ!

「うんちゃー!」って!

みんな集まれー

ペンギンむらーにー

どーんなことがおこるかなー

…

俺の想像すら超えたよー!

「うんちゃ!」は反則でしょ?

何だか楽しい1日になりそうだ…

完全に不思議ワールドに迷い込んだ。

さすがのタケルも眉がピクついている。

しかし、タケルの彼女は全く気にしていない。

「うんちゃ」って言ったのに全く気にしていない…

「うんちゃ」って言ったのに…

むしろ笑っている。

やっぱりタケルの彼女もおかしい。

初めの衝撃が強すぎて、アラレちゃんの自己紹介はほとんど覚えていない。

分かったことは、アラレちゃんが大好きらしい…

言わなくても「知ってる!」って言いたかった。

ちなみに7つ離れた弟のあだ名はターボ君…

やばい。

完全にオタクワールドだ。

会話も弾まず1時間ほど経過。

俺は早く酔いたくて、ハイペースで酒を飲む。

強制的だが結構テンションが上がった。

ちったあゝ絡んでやろうと、俺の中で知っているDr・スランプネタの全知識から、最もオタクに通用するであろう話題をふってみた。

「あの宇宙人みたいな緑のやつは、頭がおしりって知ってる？」

するとアラレちゃんは冷めた顔で言った。

「何がですか？」

…

「ほ、ほらアラレちゃんに出てくる顔から足と手が出る宇宙人みたいな奴よ！」

「あゝ、ニコちゃん大王ね」と、またも冷めた態度。

…

「そ、そうそう！それ！」

俺は一瞬でも話が噛み合って嬉しかった。

しかし、アラレちゃんは…

「いきなり宇宙人とか言われてもわかんないよ。急に話題を変えるならDr・スランプの登場人物とか言ってくれなきゃ。もしかして天然キャラなの？」

…

た、確かに俺の頭の中では常にアラレちゃんネタが飛び交っていたが、俺以外の3人は野球の話をしていた…

急に緑の宇宙人と切り出した俺が悪い…

やばい。

これじゃ俺の方が不思議キャラになってしまう。

しかも、アラレちゃんに天然キャラと言われた…

この時点で俺の爆発レベルは表面張力。

しかし、奴は続けてしまった。

「私天然の男の子って苦手なんだよね」

俺のこめかみの少し上が、ブチッとキレる音がした。

「てめえ、調子乗るんもいい加減にしろよコラッ！」

俺は低いトーンで言ってやった。

ついにやっちゃった…

タケルごめん！

タケルの彼女には、ちったあゝ責任あるから半分ごめん！

アラレちゃんは泣いている。

場を壊してしまった俺は、この勢いで帰ろうとした瞬間！

アラレちゃんから…

意外な一言が。

「叱ってくれて有難う」

????

アラレは続ける。

「私今まで他人に叱られたことがなかったから感動したの。本当に有難う！」

おいおい叱ったんじゃないやなくてキレただけなんすけど…

しかも、今まで叱られなかったと言うより、「相手にされていなかった」が、正しいのでは？

アラレの勘違いぶりに、俺は呆れた。

これをチャンスと思ったのか、タケルの彼女は乾杯のやり直しを仕切る。

結局、帰るわけにいかなくなった…

しかも…

さらに事態は悪化する。

本当の試練はここからだった。

だってね。

アラレちゃん…

ずっと俺を見てる。

目を輝かせて…

何か物凄い勘違いされてると思う。

怖いよ…。

さっきより距離も近くなって…

最終的に俺の隣に座ったアラレちゃん。

何度も携帯番号を聞いてくる。

俺は持っていないと嘘をつく。

タケルの彼女が嘘だとバラす。

普通なら嘘をつかれて落ち込むはず。

しかし、アラレちゃんの捉え方は違っていた。

「いい大人が照れないくださいよ」

俺はこの日、初めて人を殺そうと思った。

あまりにもしつこいので番号を教えてしまった。

タミヤの番号だけど…

そんなこんなで、ようやく飲み放題コースの時間が終了

本当に長い2時間だった。

2次会なんて、とんでもございせん。

俺たちは門限があることにし、バイバイすることに。

タケルの彼女とアラレちゃんは見えなくなるまで手をふっていた…

見えなくなった瞬間。

タケルが言った。

「本当にごめん」

俺は思った。

本当だよ！

その後も…

あ〜でもない！

こゝでもない！

色々言い合ったが、最後は笑いのネタにしようと仲直りした。

しかし笑っていられるのは、この時までだった…

この日、この直後から、約1年間悩まされることになるとは…

寮に着くなり、タミヤが駆け寄ってくる。

何だか嫌な予感。

タミヤは言った。

「お前彼女いつ出来たんだよ！」

は？

やっぱり嫌な予感が。

「さっきお前の彼女から俺に電話があつたんだよ!」

へ?

何か凄いことになつてる?

「彼女なのに、なんでお前の携帯番号を知らね〜んだよ!」

∴

何となく理解できてきた。

「だいたい何で俺の携帯番号知つてんだよ?」

∴

それは俺が教えたから∴

「ま〜いいや。今度紹介しろよな〜!携帯番号は教えといたから!感謝しろよっ!」

ま〜ど〜でも良くないし、携帯番号を教えたのは非常に迷惑だし、感謝なんか絶対にしない。

そう。

アラレちゃんは早速、俺の教えた携帯番号に電話してきたのだ。

しかし、俺が教えたのはタミヤの番号。

タミヤは訳も分からず電話に出る。

知らない女からで、一瞬テンション上がる。

しかし、俺の名前を連呼するアラレちゃん…

タミヤは俺との関係を問う。

アラレちゃんの答えは…

か・の・じよ

タミヤのテンションは一気に下がる。

俺の携帯番号を教えて欲しいと言われ、タミヤはすんなり教える。

以上…

タミヤ君！

君はなぜ自分の携帯番号を会ったこともない女が知っていたのか疑問に思わなかったのかね？

僕は君に1万円の布団を10万円で売る自信があるよ。

は〜。

その直後から俺の携帯は鳴り出す。

もちろん出ない。

数分後にまた鳴り出す。

当然でない。

結局この日だけで8回ほど電話があった。

しかも！

タミヤにも3回ほど電話があったらしいが、絶対に出るなと指示をした。

つてか、知らない番号は全部出るなと指示をした。

ここから俺とアラレちゃんの壮絶なバトルが始まる。

翌日。

携帯が鳴る。

朝の6時30分…

はえ〜。

また鳴る。

6時31分…

こえ〜。

次に鳴るのは昼の12時に2回。

その次が15時に2回。

少し間をあけて20時に2回と、23時に5回ほど。

これがアラレちゃんのパターンになった。

朝から夜まで各2回かけ、最後の23時は怒り気味に5回以上…。

1日15回前後の着信履歴が毎日溜まる。

この頃の俺は着信拒否の機能も知らない。

俺はこの番号を軽い気持ちで「悪魔」と登録した。

これが失敗だった。

毎日「悪魔」の着信履歴でいっぱいになる…

これが結構凹む。

友達から着信があっても、悪魔の着信で押し出されていく。

(昔の携帯は着信履歴が10件程度だった…)

おかげで友達には「電話してもシカトかよ！折り返しくらいしろっ  
！」って怒られる。

こんな感じで悪魔からの電話が1週間続いた…

既に俺は軽くノイローゼぎみ。

相手が分かっているとしても、これだけ毎日続けばおかしくもなる。

タケルの彼女にアラレちゃんを止めるようお願いしたが全く意味なし。

俺は怒りより恐怖を感じていた。

このままでは精神的に追い込まれる。

上書きされる着信履歴のせいで友達も無くす。

俺はついに決断した。

まだアラレちゃんから着信中の携帯を！

思いつ切り！

ぶん投げた！

湖に！

おもっくそ！

憎しみを込めて！

ノーんって。

でも1つだけミスを犯した。

携帯が手から離れる瞬間に気づいたけど。

遅かった…

「あつ！」

友達のアドレスを控えていなかった！

チャポーン。

静な水面に小さな波が円状に広がる。

でも終わった〜。

友達のアドレスは失ったが、ついに悪魔の着信から解放された。

本当に安らかな気持ちだ。

俺は広がっていく波が消えるまで湖をぼくと眺めていた。

アラレちゃん！

あばよ！

いや。

奴はそんなに簡単じゃない。

3日後にはアラレちゃんの声を聞くことに。

悪魔は…

死ななかったのだ。

1年が俺のもとへ駆け寄ってきた。

「原田さんという女性の方からお電話です。」

原田？

知らんぞ！

もしかして隠れファンか？

軽くテンションが上がる。

電話の前で咳払い。

自分でカッコ良いと思っている声を作り電話に出る。

ちょっと低めの声で。

「もしもし？」

次の瞬間！

俺は氷ついた。

「やっと出たわね…」

俺より低い女の声。

しかし、完全に聞いたことのある、しゃべり方。

さらに！

「なぜ逃げるの？」

やばい…

俺は電話を切ることもできないほど恐怖で固まっていた。

声も出ない。

「逃がさないから…」

ガチャ！

ま、まじかよ。

あつちから電話を切りやがった…

何だったのか？

もしかして存在の確認だけ？

だとしたら…

必ず…

何かが起こる。

しゃべり方で分かったが、声のトーンは飲み会の時とは別人。

何か凄くやばい精神状態だと簡単に想像できた。

俺はすぐさま全下級を食堂に集めた。

急に呼び出された下級は「集合」と勘違いしたようで、正座して待っている。

何か引くに引けず、俺は正座をさせたまま命令した。

俺宛てにかかってきた電話は、今後一切とりつながないようにと。

さらに、退学して寮にはいないと伝えるよう指示をした。

「以上！いいなっ！」

「は、はい」

集合のつもりで集まった下級は、拍子抜けしたのか返事がバラバラ。

電話の指示を下級に出してから数日後のことだった。

下級の間である噂が…

お化けから電話がかかってくる…

その電話の内容とは？

「こちら軍隊大学野球部でございます」

「……」

「もしもし〜？」

「……」

「もしもし〜？」

初めは無言が続く。

もしもし？と呼びかけても何も応答がない。

「もしもし？切りますよ〜？」

電話を切るうとすると、かすかに声が。

「カ……ラ……フ……ウ……テ……ル」

初めは聞き取れない。

録音した声を、繰り返し替えているようだ。

電話を受けた下級は周囲を黙らせ耳を澄ます。

「カ……ラ……フ……ウ……テ……ル」

「カナラ…フク…ウ…テヤル」

「カナラズフクシユウシテヤル」

必ず復讐してやる!?

!!!!

聞き取れた時点で、下級は怖くなり電話を切る。

復讐って…

何もしてまへんに!

こんな恐ろしい電話が…

消灯後の0時ちょうどに毎日かかってくる。

そりゃ噂になるわな…

でも、自分を名乗ることも、俺を呼び出すこともない。

奴はジワジワと苦しめる気だ…

その頃でも携帯電話がかなり普及していたので、俺は独断で決めた。

この事件以来、消灯後の電話は受け付けないことに。

しかし、0時に電話は鳴る…

出ないと鳴り続ける…

俺は更に指示を出した。

23時55分〜0時05分の10分間だけ受話器を外しておくようにと。

寮の電話は昔の公衆電話タイプで、デジタルではなくアナログ…

着信拒否などの設定は出来なかった。

この対策のおかげでこの日以来、お化けの声を聞く下級はいなくなつた。

しかし…

奴は諦めない…

この受話器外す作戦の数日後…

俺宛に手紙が届く。

差出人は書かれていない。

俺はまさかと思い手紙を開ける。

!!!

手紙には文章1行だけ。

「逃げられませんから。」

しかも…

手紙の下の方には何か書いて消した後が残っている。

良く見ると…

ね！

「ね」は確実に見えるが、の部分が薄くて見えない。

の部分って、もしかし「死」？

「死ね」はまずいっしょ！

やべ～～～～～～～～～～！！

超！

こえ～～～～～～～～～～！！

何もしていないのに殺される～！

しかもよ！

さらだ！

手紙の中には何かがう本ほど入っている。

ワ、ワラ？

ワラ人形のワラ？

だから？

超！

こえ~~~~~！

この手紙は1週間ごとに届くようになった。

さすがに手紙を拒否することは出来ない。

初めの2通ほどは読んだが同じ内容…

それ以降は読まずに捨てた…

奴は確実に迫っている。

次は何だ？

友達のアドレスを失いながらも、携帯まで捨てたのに…

奴はまだ…

本気を出していなかった…

1通目の手紙が来てから約2カ月。

ぱったりと手紙は止まった。

やっと諦めてくれたのか？

手紙は読まずに捨てていたので、俺的に大きな心境の変化はなかった。

やっと野球に集中出来る！

こんな程度であった。

秋季リーグ戦も終盤に入り、万年Bクラスの俺たちは奇跡的に優勝争いに加わっていた。

今日の試合に勝てば、明日の優勝決定戦にもつれ込む。

もの凄い大事な試合。

しかも4年にとっては最後の試合。

俺のせいで負けることだけは避けたい。

レギュラーメンバーはピリピリムード。

OBまでもピリピリムード。

何せ前回の優勝は17年前…

超プレッシャー…

超緊張の中、試合開始。

0対0で向かえた4回の表。

2アウトながらランナー3塁のピンチ！

ファーストを守る俺は集中した。

「ここでのエラーは先制点を許すばかりか、試合の流れを変えてしまっ」

自分にプレッシャーをかけながらボールに集中する。

この集中を切らすかのように、今日はやけに光の反射が目立つ。

秋ながら日差しは厳しく、太陽は容赦なく照りつけていた。

時計の反射？

カメラの反射？

ビデオの反射？

いつもより光がチラつく。

俺はその光の発信源を探す。

!!!!!!!!!!!!!!

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

俺は自分の目を疑った！

アラレちゃん？

しかも…

笑ってる。

手鏡を持ちながら。

その瞬間！

カーン！

左バッターがおもいつきり引っぱった打球はファーストに！

もの凄いスピードで俺のもとへ。

俺はアラレちゃんに気を取られ、1歩目が遅れる。

打球は1・2塁間を抜けていく。

ライト前のクリーンヒット！

先制点を許す。

判定ではヒットになっているが、確実に俺のスタートが遅れたせい…

俺はこの日、試合どこではなくなった…

あれは絶対アラレちゃん…

以前のようにアラレちゃんスタイルではない。

白のワンピースを着て、長い髪はおろしている。

変なメガネもかけていない。

めっちゃまともな格好をしている。

それが逆に怖かった。

先制点を許すも、次の打者から三振を奪い、4回の表が終わる。

ベンチに戻り、慌ててセンターを守るタケルに報告！

「まじで…」

これまでの経緯を全て知っているタケルは青くなる。

さらに、手鏡反射チラチラ攻撃を受けていることも報告。

「まじで…」

さらに青くなる。

優勝のかかった4年生最後の大事な試合。

俺たちは…

相手チームだけでなく、アラレちゃんとも戦うことに。

次は俺の打順。

打席に入る前に、さりげなくアラレちゃんの位置を確認する。

おいおい！

座ってる位置が変わってるやんけ。

右バッターボックスから見て正面にいる。

またチラチラすんのか？

色々考えている内に、早くも2ストライクと追い込まれる。

ダメだ…

全く集中できん。

3球目のクソボールに手をだし、3球で三振…

手鏡反射チラチラ攻撃はしてこなかったが、気になってしょうがない。

結局、この回は無得点。

俺は手鏡反射チラチラ攻撃対策として、5回の表よりサングラスをかけて守備についた。

ざまあゝ見ろ、アラレちゃん！

俺がお前に負けることはない！

徹底的に戦ってやる。

どっからでもチラチラするといい。

アラレちゃんは諦めたのか、俺がサングラスをしてから攻撃を止めた。

へッ。

まず1勝。

俺とお前の力の差はこんなもんよ。

俺の不屈の精神に勝てる奴はいない！

俺は自らのテンションを高めた。

よっしゃゝ試合に集中！

次の打席！

空振り三振…

まだまだ〜！

その次の打席〜！

見逃し三振…

何のこれしき〜！

最終打席！

ようやくバットに当たる！

でも、

バットの根元…

ヴァイン！

めっちゃ鈍い音…

手もめっちゃ痺れてる。

つてかバット折れた…

結局5打数0安打3三振…

おまけに…

8回にエラーをして途中交代…

むむむ…

中々やるやんけ。

アラレちゃん。

今日の所はこれ位にしといてやる。

どうせ明日も来るんだろ？

しかし、明日は勝った方がリーグ優勝！

こんな大事な試合に、アラレちゃんと遊んでいる暇はない。

まゝ好きにすれば良い。

俺は試合に集中させてもらっぜっ！

この日、終わってみれば6対1と大差で勝利。

ぶっちゃけ俺は足を引っぱっただけ。

しかし、明日の優勝決定戦に駒を進めることはできた。

試合終了後。

ビビリながらタケルと球場の外へ。

辺りを見回しながら帰りのバスに向かう。

しかし、奴は姿を現さない。

いない！

奴がない！

どこに隠れているんだ？

超こえ~~~~~。

やっぱこえ~~~~~！！

翌日…

試合前から嫌なものを目にする。

アラレちゃん…

やっぱ来たんだ。

今日はTシャツに細みのジーパン。

この日もアラレちゃんスタイルではない。

しばらく様子を見ていると俺は異変に気付く。

誰かと話している。

誰とだ？

今日の相手チームの選手と話している。

????

色々考える。

むむ！

スパイか？

スパイなのか？

俺たちの弱点やブロックサインを相手チームに流しているのか？

何て恐ろしい奴なんだ。

やべ〜、やべ〜よ！

俺たちは試合前から負けた気分だった…

で、試合は…

1対0で向かえた9回の裏。

2アウトでランナー無し。

ズバン！

「ットラ〜イク！ ゲームセット！」

一斉にベンチから皆が飛び出す。

マウンドで抱き合う選手達。

スタンドからはカラフルな紙テープが飛んでくる。

「やった！優勝だ！優勝だ！」

まずはキャプテンから胴上げが始まる。

「ワッショイ！ワッショイ！」

「皆ありがとうー！」

4年生最後の試合が終わった。

相手チームが騒いでいるのを俺たちは黙ってベンチから見ていた。

クソッ！

17年ぶりの優勝が…

アラレちゃんのスパイ情報のせいだ！

打線に自信のあった俺たちが3安打に抑えこまれた。

1対0の僅差。

ぜってー奴のせいだ。

球場から出ると！

やっぱりアラレちゃんは相手チームの選手と話している。

それも楽しそうに！

おのれ〜。

俺とタケルは怒りが頂点に達し、アラレちゃんの下へ駆け寄った。

近づくとアラレちゃんが振り返る。

俺たちは一瞬で固まった。

「他人やん……」

そう。

俺たちは相手チームの選手と付き合っている彼女をアラレちゃんと勘違いしていた。

全く知らない彼女と、俺たちは戦っていたのだ。

そして散々な結果だった。

ま〜実力ってことが…

確かにアラレちゃんが俺たちの弱点やサインを知るはずもない。

手鏡も化粧直しをしていただけだろう…

アラレちゃんだと思い込んだ俺たちは、勝手に想像を膨らまし、見えない敵と戦っていた…

エヘヘッ。

まゝ相手チームのピッチャーは、今じゃメジャーリーガーだし…

3安打に抑えこまれて当然っちゃ〜当然だ。

うん！

当然だ！

ただ単純に相手チームが強かったのと、俺たちの実力が無かっただけだ…

で、気になるアラレちゃんはと言つと？

俺への嫌がらせが無くなった。

え？

なぜって？

彼氏が出来たのです。

え？

相手？

お、俺たちの同期ですけど…

俺とタケルはこう言ったよ。

どんな子かって聞かれたから。

「一途な子」って。

## 俺のせい シーズン1

オシッコしたくて便所に行った。

ちょうど同じタイミングで同期のキャプテンは大の方に入った。

ちよっとしてから1年のコマチが小便をしにやって来た。

俺はあることを思い付く。

キャプテンの大便姿をコマチに上から覗かせたらどうなるだろうと。

俺はコマチに命令した。

「おい、足を広げろ！」

「はい？」

コマチは不思議そうな顔で聞き返す。

俺はイラッとしながら、もっかい言った。

「いいからそこで足を広げろっつってんだよ！」

「は、はいっ！」

コマチは訳も分からず立ったまま足を広げる。

俺はコマチの後ろに回り込み、又の間に頭を突っ込む。

そしてコマチを持ち上げた。

いきなり肩車をされたコマチは焦っている。

俺はゆっくりとキャプテンの入っている奥から2番目の大便ボックスに歩き出す。

想像しただけで笑いがこみ上げる。

俺は我慢出来ず、笑ってしまう。

一部始終を聞いていたキャプテンは、コマチに覗かれるのを察したのか、突然怒鳴りだす！

「コマチてめえ、覗いたら、ぶつとばすかな！」

ここでコマチはようやく何をされていたのか気付く。

キャプテンの入っている便所まで後1歩という所で、コマチは突然天井に手をつき、俺が前進するのを制止する。

ぬぬ！

コマチのくせに抵抗しやがって！

俺はむきになり、無理やり前進！

すると今度は天井に手をついたまま体を後ろに反らす。

キャプテンは相変わらず「えめえ〜見たらマジで殺すからな!」と、叫ぶ。

俺は爆笑しながら、何とか覗かせようと必死に進む。

コマチは全力で逆らう。

めっちゃ強い力で後ろにのけぞる。

とにかくのけぞる。

あんまりにも、のけぞるもんだから。

バランスが崩れる。

俺は便所のかたいタイルの上に。

コマチをバックドロップした。

音で理解したのかキャプテンも大便しながら大爆笑している。

コマチが軽く後頭部から血を流しているのは…

俺のせい。

## 俺のせい シーズン2

皆さん！

お風呂で溺れたことがありますか？

お風呂を舐めていませんか？

溺れるんですよ！

たががお風呂でも。

そう。

今日も始まるのです。

風呂リンピックが…

これは俺が高校の時に開発した立派なスポーツです。

簡単にルールを説明しましょう。

まず絶対条件として縦2 m、横4 m程度の大きめの風呂が必要です。

この風呂にお湯をなみなみと溜めます。

たったこれだけで風呂リンピックを開催することが出来るのです。

さゝ競技開始です。

この競技は4人で行います。

まず各選手は四隅に座ります。

四隅の選手はスタート音と同時に一斉に風呂オケを蹴って、時計回りで隣りの隅へ進みます。

隣りの隅へ移動したら休む暇なく、すばやく体勢を変えて次の隅へ移動します。

これをお湯が無くなるか、誰かが溺れるまで繰り返すのです。

要は4人が同時に四隅を蹴り続け、時計回りで人口渦を作ります。

すると、スピードについていけない初めの脱落者が渦に飲まれます。

飲まれると起き上がることすら出来ず、溺れるのです。

もう、でんぐり返しやら、後ろ回りやらグルングルン回っちゃって息継ぎするのが精一杯。

こうして脱落者が本気で溺れる前に競技は終了となります。

競技が終了するころには、風呂のお湯は半分以下になっています。

これを4年に1回。

いや4ヶ月に1回。

いや4週間に1回。

いや4日に1回の間隔で開催されます。

今日もその日がやってきました。

参加選手は俺、タケル、ハル、ゴツチ（タマゴツチ）の4人。

ゴツチだけ1年…

俺たち3人の入浴タイムが遅れたため、下級の時間と重なってしまっただけ。

通常は上級、2年、1年の順に風呂へ入る。

たまたま遅れて入浴していた、いたずら大好き3人組の上級とゴツチは一緒になってしまった。

めっちゃ運の悪いタマゴツチ。

普通は風呂場の前に脱いであるスリッパで、誰が入っているか確認するもの。

上級がいれば時間をずらすのが当たり前。

それを怠り地獄へ飛び込んできたゴツチが悪い。

ゴツチは風呂場に入るなり、「あっ！」と発してから、「失礼しました」と言いながら出ていこうとした。

「コラコラ！ゴツチ君！一緒に入ろうじゃないか！」

俺は優しく言っただけだ。

さういよいよ風呂リンピックの始まりです。

4人は四隅で風呂オケを蹴る体勢に入る。

「よいドン！」

ばっしゅん！

一斉に蹴り出す。

ゴツチは出だしから遅れぎみ。

遅れると、次の奴が飛んでくる。

それに押され、体勢を崩す。

4週目当たりでゴツチが脱落。

皆に潰されグルングルンしている。

俺が渾身の力で風呂オケを蹴ろうとした瞬間！

グルングルンしているゴツチの顔面が足元へ。

ポッコーン！

おもいつきり顔面を蹴られたゴツチの鼻から流血！

風呂の色が変わりだす。

俺たちは気持ち悪くなり一斉に外へ飛び出す。

ゴツチは渦の中から、何とか外へ脱出。

風呂オケの横で寝そべっている。

「大丈夫です！大丈夫です！すみませんでした」と言っている。

わざとではないが、顔面を蹴られたのに謝っている。

ちょっと可愛そうだったので、何も言わず風呂を出た。

出る間にゴツチの様子を窺う。

既に流血は止まっていたが、1点だけ気になることが。

明らかに鼻が曲がっていたのは、

俺のせい…

### 俺のせい シーズン3

「脱走」の章で少し触れたキセルのお話し。

何度も言いますが「地獄寮」いや、上級なので「天国寮」は田舎にあります。

もちろん駅もしょぼいです。

自動改札？

ありまへん。

なもんで、定期を購入しても改札では駅員に見せるだけです。

ここで俺は後先考えず悪知恵を働かせてしまいました…

定期は見せるだけ！

ここにピンときませんか？

見せるだけなら誰でも、何度でもOKってこと？

例えば定期を持っているバーゴン（久々の登場なので説明しますが、猿に似たKYな同期です）が改札を通る。

まだ改札を抜けていない俺が、駅員にはれないよう、バーゴンからフェンス越しに定期を受け取る。

受け取った定期で改札を通る！

ねっ！

いけるっしょ！

だから例えばじゃなく、実際にやったわけさ。

そしたら見事に成功したわけよ。

そりゃ〜テンション上がるっしょ！

この企画に前向きじゃなかったバーゴンに、自信满满で「なっっ！」  
って言ってやりましたよ。

出る時も同じようにすれば全部タダ！

定期を持っている奴と出かければ交通費はかからない！

うお〜！

なんて素晴らしいアイデア。

学生にとっては電車賃もバカにならん。

久々に素晴らしい悪知恵を編み出した自分に酔う。

目的の駅に到着！

同じ要領で考えていたが…

自動改札やん…

出れないやん…

いや、諦めるのはまだ早い。

乗車駅で自動改札を通していない定期は、降車駅でどうなるのか？

何食わぬ顔でバーゴンは自分の定期で自動改札を通る。

お〜。

何事もなくスルー。

つてことは、もっかい通しても大丈夫だべ！

勝手に思い込む。

フェンス越しに嫌がるバーゴンの定期を無理矢理借りる。

降車駅2連チャン自動改札通しに挑戦！

緊張の瞬間。

定期を改札に入れる。

おっ？

行けたのか？

パソコン！

…

普通に改札が閉まる…

何気にびびっていたので立ち止まってしまった。

やばい！

2回通したことが判明すればキセルがバレる。

俺は強引に扉をこじ開け、ピンポンピンポン鳴っている自動改札から遠ざかる。

青ざめて突っ立っているバーゴンの手を引き、慌てて近くの喫茶店に入った。

「だから嫌だつていったのに！」

バーゴンが怒鳴る。

むむ。

バーゴンのくせに。

俺は鼻をほじりながら「ほっときや大丈夫だべ！」と、軽くあしらう。

すると今度はキレル。

「名前も電話番号も定期に登録されてんだぞ！絶対バレるに決まってる！ど〜してくれんだよ！」

名前はともかく電話番号はやつかいだな。

俺は遠くを見つめながら言った。

「電話に出なきゃいいじゃん！」

バーゴンが言い返す。

「実家の電話なんだよ！」

…

めっちゃ怒っているバーゴンは余計な行動に…

「今から正直に謝って定期取り返してくる！」

おいおい止めてくれ。

「やだ！絶対行ってくる！」

バレやしないって！

「お前のせいだからな！」

定期代なら払うからさっ。

「うるさい！」

必死に止めたが行ってしまった…

むむ…

クソバーゴンめ！

余計なことを。

しばらくすると携帯が鳴る。

嫌な予感…

やっぱりバーゴンから。

しょうがなく電話にでる。

予想通りの言葉が。

「やべ〜って！」

そりゃそ〜だろ！

「今からお前を連れてこいだって！」

そりゃそ〜だろ！

「連れてこないと大学に言い付けるって！」

おい…

バーゴンよ。

お前はご丁寧に大学まで教えたのか？

本当に余計なことばかりしやがる。

さすがKY王子…

仕方なく思い腰を上げる。

最悪だ。

自首するってこんな感覚なのかな…

さて、どんな言い訳をしようか？

窓口にいる駅員に理由を話し、改札を通らせてもらう。

案内された駅員室のドアをノックする。

愛想の無い声で、どうぞと言われ部屋の中へ。

初対面の駅員の第一声は…

「こんなやろ！お前かつ！」

お前って…

その前に初対面の人に、こんなやろって…

エリマキトカゲみたいな顔してるくせに！

まゝ悪いことしたのは俺だから我慢するけどさ。

「ほれ！こっち来い！」

来いって…

いちいちムカつく！

薄暗い機械室へ俺とバーゴンは通される。

エリマキトカゲが1つしかない椅子にドカッと座る。

俺達は立たされたまま…

エリマキトカゲは机にあった30センチ定規を右手に持つ。

発する言葉に合わせて、俺の太ももを叩きながら駅員は言った。

「お・ま・え・は・な・に・を・やっ・た・の・か・わ・かっ・て・  
ん・の・か？」

マジでキレそう…

定規で17回も叩きやがった！

しつかり数えた。

俺はふてぶてしく「は〜？」と答える。

すると駅員はエリマキトカゲ面のくせに怒鳴り散らす。

「お前はキセルしたくせに、その態度は何だ！」

俺はこの瞬間、8割程度キレた。

「実際に見てもね〜くせに決め付けてんじゃないぞ！コラア。」

8割キレなので「コラア」は小さめにした。

俺の武器としては、「バーゴンが改札を通った直後に落とした定期を拾い、自分の切符と間違えて改札に入れた」って言う、かなり無理のある言い訳を貫き通す予定でいた。

無理があると自分でも思っていたので、8割キレに留まったのだと思っ…

するとエリマキトカゲは更に怒り出す。

「嘘をつくんじゃないっ！」

8割キレが10割に達する。

「決め付けんなや！ポケット！」

10割キレなので「ポケット！」は大きめに言ってやった。

しかし！

ここでエリマキトカゲは秘密兵器を出してきやがった。

「防犯カメラに全て映ってんだよ！」

！！！！

むむ…

一気に怯む。

改札にカメラ何てありましたっけ？

いやいや、エリマキトカゲが俺を動揺させただけだ！

でも改札周辺にカメラって普通にありそうだよな…

マジでカメラに映っていたら、考えていた言い訳が通用しなくなる…

しかも、俺の武器はその言い訳1つしかない…

こんだけ序盤に勢い良くキレた手前、コロツと寝返る訳にもいかな  
い…

ぬうお〜！

さらに逆キレか？

ゴロンと寝返るか？

どうする俺！

罪を犯したくせに、カバの態度がむかつくと言っ理由でキレてしま  
った俺……

悪いのは百も承知だ。

めっちゃ不利な状況だが、どうしても引き下がりはくない！

こんなカバヤローに頭なんて下げられっか！

ぜって〜謝らね〜！

俺はついに腹を決めた。

テンパっているバーゴンを横目に、俺は不適な笑みを浮かべる。

この後を取った驚愕の行動とは！

自分が悪いくせに〜、逆ギレしてる人がいたんですよ〜。

な〜に〜！？

やっちまっとな！

男は黙って！

土下座！

男は黙って！

土下座！

しかも涙ぐんでるし。

さっきまでの態度とは180度転換！

そう！

勝負に勝てないと判断した俺は、簡単に寝返った…

しかし、逆ギレし暴言を吐きまくった若僧を、大人のカバが簡単に許すわけない。

俺は長期戦を避けるため、一気に畳み込んだ。

軽く目に涙を浮かべ、「大変申し訳ありませんでした！」と、周囲が引くほどでかい声で謝った。

土下座で…

すると予想通り、他の駅員が様子を見に来る。

さっきまでのやり取りを何も知らない野次馬駅員は、どう思う？

涙ぐんでいる若僧に土下座までさせている、非道なカバの姿しか映らない。

「おい、おい、分かったから頭を上げなさい。」

周囲を気にして焦ったカバは案の定、俺たちをすんなり許した。

へん

所詮こんなもん。

作戦が見事にはまり、むかつくカバに圧勝した俺は上機嫌

(土下座したけど)

しかし…

勝負に勝って、試合に負けた…

大学にチクられることなく許してもらったのに…

罰金があった…

たった1回のキセルでも、1ヶ月分の定期代を払わされることに…

しかも精算は乗車駅。

ほぼ毎日使う乗車駅。

これのせいで、乗車駅側の駅員に目を付けられること…

まく俺には便所の小窓から飛び降りる荒技があるから何とかなるが

…

(全く懲りてない)

ちなみに、定期を貸したバーゴンも同罪で罰金に…

1万7千も…

2人分だから3万4千に！

もちろん折半

この月にバーゴンの小遣いが無くなったのは…

確実に…

俺のせい…

## マックス狩り その1

アラレちゃんのせいで!?

優勝決定戦に負けた…

あれから半年。

俺たちはついに!

ついに!

神に!

ゴッドに!

上りつめた!

そう!

俺たちは神に一番近い!

4年になったのです。

だれにも気を使わなくて良い。

天下の4年!

いや〜長かった。

本当に長かった。

今思えば…

おそろしかった、

せんばつしゅつじょう！

せんばつしゅつじょう！

あさからパニックる、

ちようれい！

ちようれい！

めがあうだけでなぐられた、

あのひ！

あのひ！

つめたすぎて、いたかった、

そこなしぬま！

そこなしぬま！

よなかにひっしにこいだ、

ママチャリ！

ママチャリ！

はたけにとんでった、

みどりのタヌキ！

みどりのタヌキ！

すべて！

わすれることのできない！

おいしいです！

おいしいです！

とにかく平和。

よく募金とか献血とかしちゃったもんね。

その位、心に余裕ってもんがあったわけよ。

例えばよ！

焼きそばUFOのソースを失くさないようにするには？

ハイッ先生！湯きりの時に気付けるよう、フタの上に置きます。

そうだね！フタの上に置いとけばソースを失くして、ブルドックソースを代用したけど、えらいまずかった！何て事故は起きないね！

ほら！そろそろ3分経つよ。

麵が出ないよう慎重に湯を切ります。

さ〜あともう少して完成だ！

最後にソースをかけようね。

ソースをね！

ソースを！

ソース…

うん…

ソースの袋が中々開かない…

焼きソバのソースが入っている袋ってビニールタイプっしょ？

だからお湯を注いだ後のフタの上に乗せると、ビニールが熱でふにやふにやになるよね。

すると、ギザギザになっている切り口もふにやふにやになるよね。

だから中々切れない…

もうきつちり3分待った。

あとはソースをかけるだけ！

この段階でハサミを取りに行けるほど、大人の精神力は持っていない。  
い。

だから必死に開けようとする。

まだふにやふにやになっていないギザギザ部分を探しながら！

必死に切れ込みを入れようと力を入れる。

それでも中々切れないので、さらに力を入れる。

「フンッ！」

びちゃっ…

力を入れすぎると、一気に開くので飛び散るよね？

で、そんな時に限って白いＴシャツだよね。

ソースのほとんどはＴシャツ側に飛び散って、袋の中のソースは半分も残っていないよね。

やむを得ず半分以下になったソースをかける。

ませる。

胸から下がソースだらけのＴシャツで焼きそばをませる。

軽く涙目でませる。

焼きそばの色が薄い。

Ｔシャツの染みより薄い…

この時点で味の予想が付く。

予想出来るが、悔しいので食べる。

やっぱり薄い。

ブルドックソースをかけてみる。

やっぱりまずい。

ね〜ね〜！

この状況どうします？

普通ならキレルっしょ？

キレルしかないっしょ？

だって、いい年して焼きソバーつも、まともに作れないんだよ！

不甲斐ない自分にキレルっしょ？

いいえ！私はキレないわ！

だって心に余裕がありますから！

それに、また買ってくればいいじゃない。

「お〜いクソ1年！ピンクレディーを5分で買ってこ〜い！」

ねっ！

めっちゃ心にゆとりがある人の思考でしょ？

えっ？

いまいち伝わらない？

ったくしょうがないな〜。

この例えなら伝わるっしょ！

夜中にどうしてもカップ焼きそばが食べたくなる時ありません？

でき〜、1回そう思ったたら寝れなくなるよね？

だから結局食べるわけよ。

ただ夜中の寮って怖くてね。

ちようどお化けを見た後だったし…

でも焼きそばへの想いの方が強く、UFOを握り締め1人で食堂に行ったのよ。

真っ暗…

こえ〜〜〜

電気を点けてもし〜んとしてるし。

びびりながらもお湯を沸かす。

すると突然！

「ふうあ〜！」

ブイーンと音をたてて飛んできた虫を避けるのに思わず声が出る。  
くっそ！虫の分際で脅かしやがって！

少し経ってからお湯が沸く。

今度はソースをフタの上ではなく、ズボンのポケットに入れておく。

これだと失くさないし、ふにゃふにゃにならない

3分待つ。

やけに長い…

そして怖い…

すると今度は！

カチャ！

「ふうあ〜！」

またびびる。

俺がお湯を沸かす時に避けたフライパンと、その下にあつた食器が  
ずれただけ…

マジでこえ〜。

俺は3分を待たずにお湯を捨てることに。

ステンレスの流しにお湯を捨てる。

ジヨジヨジヨジヨジヨ...

すると突然！

ポコン！

めっちゃでかい音がした！

俺はびびって焼きソバを流しに落とす。

落ちた反動でフタが開く。

開いたフタから焼きソバがこぼれる。

反射的にもつたいないと思い、麺をカップに手で戻す。

めっちゃ熱くて軽くやけどする。

急いで水を流し手を冷やす。

麺が水に流される...

こんな時どうする？

キレルよね？

自分の不甲斐なさにキレルよね？

だって、「ポコン」って鳴った音は流しにお湯を急に流したから、熱でステンレスが伸縮して鳴った音だよ！

その音にびびって焼きソバを落としたんだよ？

そりゃ〜キレってるしょ！

いいえ！それでも私はキレないわ！

どう？

これでどれだけ心にゆとりのある人間かって伝わったでしょ？

本当に人生で一番良い時期だったよ！

えっ？

どれくらい良かったかって？

ったくしゃ〜ないな〜。

例えばよ！

めっちゃ晴天だったのに…

突然、黒い雲に覆われて…

雷がゴロゴロなって！

稲妻がピカッ〜ン光って！

その光の中からシエンロンが現れて…

「どんな願い事でも叶えてやろう」ではなく！

「人生をやり直せるとしたら、いつからにする？」って言われたとしよう…

え〜っ！

願い事が選べないの〜？

ドラゴンボールめっちゃ必死に7つ集めたのに。

畑の中にチャリごと突っ込んだり、

電子ジャーに片足突っ込んだり、

猪の罠にかかったり、

めっちゃ必死に集めたのに！

願い事が限定なん？

ま〜しゃ〜ない。

せつかく人生をやり直させてくれると言っているのだからお願いしよう。

それではシェンロン！

大学時代からでお願いします！

ただし！

1年からじゃございませんよ！

1年からじゃないと駄目とかぬかすなら死を選ぶね。

舌を「イツ」ってやって自殺するよ。

絶対に4年からお願ひします！

100歩譲つても3年からで！

つてくらい良い時代だったのよ。

上級時代って。

伝わりました？

で、ちょうどその頃でした。

エアマックスが流行ったのは。

ご存知ですよね？

ナイキのエアマックス。

俺たちの寮でも流行ったね。

確か黄色が一番人気で、青や赤も人気があった。

俺は流行に敏感だったのでもちろん！

持っていませんでした！

どこに行っても売り切れで買えなかつたんだもん…

なにせ、当時は中古でも高く売れた！

中古でも高く売れると言うことは、高いお金を履いているのと同じ。

そりゃ〜ヤンキーは見逃さないでしょ？

弱っち〜くせに、いきがってエアマックスなんか履いてごらんない。

「おい、おい、兄ちゃん！いいクツ履いとるやないかい！」

なんて声をかけられ…

薄暗い路地裏に連れて行かれ…

遠まわしに「ちようだい」って言われ…

殴られたくないから、差し上げるよね…

当時は街をうつつむきながら裸足で歩く、弱っちく奴がいたのをよく見かけたもんよ。

これが世に言う「マックス狩り」

こんな事件が起きるほど流行っていた。

だから寮で運良くエアマックスを購入できた奴は大はしゃぎ！

数日はみんなに自慢していた。

めっちゃ嬉しそうな顔で！

この自慢が後々痛い目に合うとは知らず…

当時の寮には物凄い数のエアマックスがあった。

上級だけでなく下級も持っていたので、確認出来るだけで15足はあった。

後々聞くと、盗まれるのを恐れて公表していない奴もいたので、少なくとも20足はあったと思う。

この20足が…

ある日を境に…

1足…

また1足と…

消えていくのです。

「ほれ早く出かけるぞ！」

今週4回目の合コンに遅れそうだったので、もたついているタミヤをせかす。

すると突然タミヤが叫ぶ！

「な~~~~~い！」

何が？

「な~~~~~い！」

だから何がよ？

「一昨日に買ったエアマックスが！」

マジ？

誰かに貸したんじゃないの？

いや、一昨日買ったばかりの靴を他人に貸すわけないか…

盗まれた！？

そう！

初めに消えたエアマックスは、タミヤの赤エアマックス！

タミヤはこの日、ショックのあまり合コンをドタキャン…

意地でも探すと言って聞かなかった。

突然のメンバー不足に俺たちは慌てる。

急いで同期に声をかけるも、これだけ急だとみんな予定が入っている。

しょうがない…

最後の手段に…

俺は合コンメンバーの許可を得る。

やむ得ずバーゴンに声をかける…

KYなので本当は嫌だったが。

今回ばかりはしょうがない。

しかし…

ってか、やっぱり！

予想通り！

バーゴンのKY劇場で合コンは散々に終わる…

いつも通り、帰りの電車でバーゴンへの駄目だしをしながら寮に戻る。

合コンの報告とエアマックスが気になり、タミヤのもとへ向かう俺たち。

タミヤはうつむいていた。

やっぱり見つかっていない…

ちょっと涙目だし…

結局、タミヤの赤エアマックスが見つかることは無かった。

タミヤの赤エアマックスが盗まれてから2週間が経過した。

犯人は未だ捕まらず…

寮の話題からも消えかけていた。

さすがのタミヤも諦めた。

そんな状況を知ってか知らずか！

なんと！

また消えた…

今度はハルの黄エアマックス！

前回からたった2週間後の犯行。

寮に激震が走る。

ハルはタミヤの事件後、盗まれないよう複雑な場所に隠していた。

それなのに…

奴は簡単に奪っていった。

ハルはタミヤと違って冷静だ。

大切な黄エアマックスが盗まれたにも関わらず顔色一つ変えていない。

しかしハルの目は殺意に満ちていた。

必ず犯人を見つけ出し、殺ると！

しかし、犯人は俺たちをあざ笑うかのように犯行を続けた。

また消えたのだ！

3人目の被害者はタッチン！

色は青！

これで人気の3色は全てやられた。

しかも、ハルの黄エアマックスからたったの3日！

気付いたのが3日後で、下手すりゃ同じ日に盗まれた可能性すらある。

完全に舐められている。

俺は被害を受けていなかったが、めっちゃ頭にきていた。

地獄寮でも3つだけやってはいけない暗黙のルールがある。

一つ目は同期の裏切。

いつもギャグで（半分マジで）名前を出しているが、例えばバーゴンでも先輩に売るようなことは、しちゃいけない。

二つ目は女！

人の彼女に手を出すことは許されない。

例えば付き合う前でも、狙っていることが分かった時点で、手は出さない。

そして3つ目が盗みだ。

人として最も許されない行為。

この掟を破った時点で、地獄寮にはいられない。

どんなに悪ふざけをしても、外してはいけない道がある。

しかし、マックスハンターはこれを平気で破ってしまった。

俺は3つ目のエアマックスが盗まれた時点で気持ちを抑えきれなかった。

俺がぜつて〜捕まえてやる！

そしてボッコボコにしたる！

ボッコボコにするため、俺は緊急捜査本部を設立。

本部は俺の部屋205号室！

本部長はもちろん俺！

後は信頼出来る俺の部屋っ子だけでチームを組んだ。

司令官には3年になっても頭のキレるヤスを任命。

(チームシシナベ副隊長兼務)

次は捜査班にコマチを任命。

(チームシシナベ突撃隊兼務)

最後はゴツチ！

特に役職は用意してなかった。

めっちゃ悲しそうな顔をしているので、しょうがなく役をやった。

あぶない刑事…

(チームシシナベ補欠&風呂で俺に蹴られたので鼻がやや右曲がり)

以上4名編成だ！

まずは今後の捜査方法を決めるため、緊急会議を開催！

俺は当時流行っていた古畑任三郎になりきり、会話を進める。

「うーん、今泉君！君ならこの事件をどう捉えるかね？」

今泉君は誰と決めていなかったが、俺はコマチの目を見て質問した。

2秒ほど間は空いたが、このむちゃ振りにコマチは応えた。

「わ、わたしは、ふ、古畑さんに、おま、お任せします。」

！！！！

かなり似ていたのでビックリした。

あ

良かったな

コマチよ。

人間、何かしら特技はあるものだ。

申し訳ないが、コマチの人より優れた所を挙げると言われても、鼻がでかいとしか言いようがない。

野球部なのに野球が苦手…

笑いを取れる話術もない。

どっちかって言うと、どんくさい。

人間なのに猪の畏にかかるし、

便所でバツクドロップされ後頭部から血を流すし、

本当に冴えない奴だ。

(最後の2つは俺のせいだが…)

しかし！

ようやくコマチの取り柄が見つかった！

それは！

今泉警部の物真似！

他にも真似をさせたがいまいちだった…

「よし！俺が古畑キャラの時は、お前今泉キャラでいる！」と言っ指示に、コマチは笑顔で「ハイッ」と答える。

なんで笑顔なん？

久々に誉められ、よほど嬉しかったのだろう。

コマチの物真似が似てたせいで、めっちゃ和やかムードになってしまった。

「おめえくらへラへラしてんじゃねー！」

俺は一喝する。

寮内でエアマックスが3足も消えた異常事態。

俺が物真似を振ったせいで和んだのに、数秒後にはへラへラが気に入らず、改めて引き締めてやった。

何というジャイアンっぷり。

しかし、部屋っ子はいつもの事かと、引き締まった顔で俺を見つめる。

よし。

聞く準備が出来たようだな。

俺は今回のエアマックス連続殺人事件を、分析する前に状況を整理した。

まず盗まれたのは4年だけ。

全て休み前の犯行。

盗まれたエアマツクのサイズはバラバラ。

色もバラバラ。

箱ごと盗まれている。

部屋を荒らされた形跡はない。

以上！

古畑であれば、この情報だけで十分だ。

まず犯人は内部の人間で間違いないだろう。

野球部員以外が寮をうろつけば目立ち過ぎる。

しかも、寮に誰もいない日は1日もない。

さらにだ！

寮の部屋は鍵がないため、いつ誰が入ってきてもおかしくない。

部屋も荒さず、そして素早く盗むには、ある程度隠し場所が推測できる内部の人間と言うことになる。

これで部外者の線は消した。

次に内部の人間だとすれば何年の犯行かだ。

これは絶対下級の犯行と見た。

一般的に考えれば上級と判断するべきだろう。

誰にも拘束されず、自由な時間が多い。

さらに誰の部屋にでも出入りは自由。

動き易さから言えば完全に上級が怪しい。

それでも上級ではないと言い切れる！

なぜ？

答えは簡単。

絆の差だ。

上級であれば少なくとも3年以上、同じ釜の飯を食った仲間！

苦しい下級時代を支え合ってきた。

今まで付き合ってきたどんな友達より、気心しれた家族なのだ。

こんな家族を裏切れる奴は絶対にいない！

現に俺たち4年も、初めは28人いた。

しかし、残ったのはたった8人…

それも、レギュラーと学生コーチのみ。

生き残り確率は30%弱。

だからこそ、仲間の裏切りは絶対にありえない。

3年もようやく上級になれば、精神的に安定している。

さらに俺たちとは下級時代と一緒に過ごしているため、1つ上を裏切ることは考え難い。

それに比べて今の下級はと言つと。

精神的に不安定。

やれ集合だ！

やれ掃除だ！

やれ武田鉄矢だ！

絆を感じる前に、日々のプレッシャーに追われ、それどころでない。

さらに、数々の修羅場と一緒に潜り抜けてこそその絆。

下級にはまだまだ修羅場が少なすぎる。

これが学年が下がるごとに薄れていく。

だから、犯人は下級で決まりだ！

では1年と2年どちらの犯行か？

2年は上級の恐ろしさを、集合で理解している。

ましてや神様4年の物を盗むなんて、見つかったことを考えれば震えが止まらないはず。

さらに！

集団生活でタブーとされている盗みを簡単に犯している。

それは、仲間にも先輩にも、この寮にさえ、何も思い入れがない確たる証拠！

今まで天下の高校3年生だったのに、4月から矛盾だらけの大学1年生。

そりゃ精神的におかしくなる。

犯人の学年は1年だ！

犯人を1年に絞ってはみたが、さすがに「誰？」までは推測できない。

ましてや4年と1年が接触する機会はめったにない。

歳の近いゴツチとコマチに聞くも、予測すらつかないらしい。

ここで俺は、1つの作戦を指示した。

ゴッチとコマチ（2人を指す時は以下コマチ）で、怪しい1年を5人まで絞り込ませる。

その怪しい5人と、コマチで飲み会を開く。

ガンガン酔わせる。

1年のテンションが上がった所で、こんな話をふっかける。

最近4年のエアマックスが盗まれているけど、いいきみだと。

コマチも昔は2人で上級の金を盗んだことがあると嘘をつく。

これで、この寮は盗まれた方が悪いんだと、犯人を正当化する。

その勢いで、エアマックスの犯人を知っているか質問。

恐らく、この時点では白状しないので、さらにふっかける。

改めて4年を良く思っていないことをアピールしてから、エアマックス犯を応援すると。

さらに、次回は一緒に盗もうと提案。

この時点で酔った1年は混乱するはず。

このタイミングで、まるで知っていたかのように、この中に犯人がいることを宣言する。

仮に5人の中に犯人がいれば、この時点で精神的に、相当追い込まれているはず。

ダメ押しにゴマチも昨日の昼間に4年のエアマックス（ヒデの所持品）を盗んだと、実物を見せながら嘘をつく。

最後に！

明日、寮中のエアマックスを全て盗む計画を立てたので、見張りなどの応援を頼むと、ニッコリ笑う。

OKなら後でメールしろと伝え、ここで飲みは終了。

後はメールを待つだけ

別れ際にダメ押しのダメ押し！

冗談か本気が分からない感じで、同盟を組まないなら4年に言いつけちゃおっかなろと、ほのめかす。

これ完璧！

では早速、5人挙げてもらおうじゃないの！

## マックス狩り その2

ゴマチ対談が始まる。

まだ1年が入学してから2ヶ月弱。

この短期間で犯人を見極めるには、見かけに騙されない「観察力」と、研ぎすまされた天性の「勘」が必要になる。

しかし、怪しい1年の絞り込みを行うのはゴマチの2人。

どう考えても天性の勘はない…

観察力は中の下程度。

あまり期待はできない…

30分程でゴマチがリストを作り上げた。

選ばれた5人は次の通り。

ひよろ長でマザコンの太田。

しゃくれで友達の少ない久保田。

メガネでロリコンな村上。

マッチョなのにオタクな後藤。

ハンサムのくせにワキガな大塚。

この5人。

あくまでも見た目と俺の想像だが。

リストを見ると、欄外にもう1人いる。

チビデブでDSの中井。

どうやら補欠らしい。

どうしても5人に絞り込めなかったようだ。

俺からみても、それなりに怪しい奴ばかり。

せっかくなので補欠含め全員で飲み会を開催するよう、指示を出した。

ゴマチに早速、金を渡し買い出しを依頼。

なぜ俺が犯人探しのために金を出さねばならんのか？

まゝ良い。

犯人を捕まえたら飲み代と今回の企画料を請求してやる。

指示した酒は強いばかり！

ジン、ウォッカ、ウイスキー、ブランデー、焼酎

これを全部ロックで飲ましゃ、どんなに酒が強くて短期決戦になるだろう。

善は急げとゴマチに買い出しを急がす。

しかし、酒の量が半端じゃない！

ドリフト八段の俺は先輩としてアドバイスしてやった。

自分の運転技術にあまり酔うなど。

スピードを落とさずカーブを曲がると…

遠心力で一旦酒が車体から離れる！

しかし、カーブを曲がりきった途端！

物凄い勢いで戻ってくる。

すると車体にぶつかり、

ハンドルをぐわんぐわんして、

ねばるも！

ハンドルが小刻みにぐりんぐりんしちゃって、

結局！

畑に突っ込むこともあると注意してやった。

あの急カーブは絶対調子に乗るなど。

しかしながら買い出しタイムは30分以内と指示

指示通り30分後に戻ってきたゴマチ。

息づかい荒く汗だくのゴマチだが、買い物帰り30秒後には色々なゲームと一気コールを教える。

なかなか覚えが悪い…

ちよつと面倒になり、最後は適当に一気させるとアバウトな指示に切り替える。

これで準備は整った。

怪しまれないよう、候補生をお呼びしなさいと、ゴツチに指示。

残ったコマチは飲み会の会場である俺の部屋で酒の準備。

俺は隣の部屋で待機する。

なぜか拳ほどの穴が壁にあいているので、隣にいても話しは筒抜け。

べ、別にこの日のために壁をグーパーンしたわけじゃない…

あいた穴がバレないように、安室のポスターを貼る。

これで完璧だ

早くこい！

クソ1年！

続々と1年が集まる。

疑われているとも知らず。

5分ほどで全員集まり、早速飲み会が始まる。

飲み会名は、「ゴマチ主催！第1回！チキチキ！使えそうな後輩と飲もうパーティー！」ってことにして…

本当は「犯人は誰だ！みつけたらマジでボコボコにしたるから覚悟せよ、このボケエ！」である。

まずは指示通り、乾杯一気から。

ゴマチが全員分の酒を作る。

ストレートなので、作ると言うか注ぐ。

すると、早くも事件その1が！

「自分、いつも初めはビールなんすけど！」

なんすけど？

はん？

だから何や？

チビデブ中井がほざいた…

どの口が言ったんだ？

ビールなんて高価なものは初めからねーよ！

1年の分際でビールを飲めるとでも思っちゃたのか？

おめえはクソ安い焼酎でも一気してろっ！

危うく隣から叫ぶところだった。

ゴマチは優しく「ごめん！今日はビールなしなんだ。」だって！

もっとバシッと言ってやりなさいよ！

全く俺の部屋っ子らしくない。

俺は1人でイライラしていた。

「それではグラスを持ってください！」

コマチが仕切る。

「それでは恒例の乾杯一気を行います！ちなみに飲み終わるのが一番遅い奴は続けて2杯目も一気です！」

ほ〜。

コマチなりに考えているやないかい。

「それでは、かんぱ〜い！」

グビグビと酒が喉を通る音が聞こえる。

「プハ〜」

どうやら全員、一気はしたようだ。

ビリは誰だ？

最後にグラスを置いたのは…

コマチ

何でやねん！

コマチは周りに乗せられ、普通に2杯目も一気した…

先が思いやられる。

ようやく歓談タイム。

前半30分はクソ1年を安心させるため、全くの嘘だが寮の上下関係が緩いことを話せと指示。

適当に盛り上がる。

しかし、話を聞いてるだけの俺だが…

どうしても許せないことが…

チビデブ中井と、しゃくれの久保田の口調だ。

理由はスカ語。

大して仲も良くないのに「いいっすか?」「マジっすか?」「俺っすか?」と、いちいち腹が立つ。

「よろしいですか?」「本当ですか?」「自分でしょうか?」「じゃ!」  
「しまいにや」「これ食っていいっすか?」と、来たもんだ。

「こちらの、おつまみを頂いてもよろしいでしょうか?」「じゃ!

頭の中で怒鳴り散らした。

俺が隣でイラついているとも知らず、ゴマチ達は1年を早く酔わせ  
るため、4年の愚痴をすっ飛ばし、早々にゲームを開始した。

「ピンポンパンゲーム!」

「イェーイ!」

「ピン!」

「ポン!」

「パン！」

「うわぁ〜」

「それぞれ〜いつき〜き〜のき〜！」

(ふるっ)

順調に一気コールが飛び交う。

ピンポンパンゲーム3回目辺りから、隣で聞いている俺もテンションが上がってきた。

心の中で一緒に一气コールしてるし。

何なら一緒に飲みたくなってるし…

だから1人で飲んでるし…

で！

気になることが1つ。

なぜか2回に1回はコマチが一气している…

俺はどんくさいコマチがどうしても気になり、壁をふさいでいるポスターに、針で穴を開けて覗くことにした。

バレないよう、なるべくポスターの色が濃い部分を探して針を刺した。

すると突然！

「ギィヤアアアアー！」

隣のゴツチが突然騒ぎ出す。

そのバカでかい声に俺もびびり、刺した針を急いで抜く。

飲み場が一瞬にして静寂に包まれる。

「ごめん！ごめん！肩が急につつただけ。」

ゴツチが右肩を押さえながら1年に言った。

俺はこの時、死ぬほど笑った。

もがき苦しむほどに。

隣にすることがバレないよう、必死に声を殺す。

どうやら刺した針が、壁に寄りかかっていたゴツチの右肩に刺さったらしい。

確かに変な感触はあった。

プスツて…

このミラクルに俺は10分以上笑い泣きした。

それにしても「ギィヤアアア〜」って！

漫画みたいな叫び方をしゃがって！

思い出すだけで笑える。

ようやく笑いが収まり、今度はゴツチに刺さらないよう、別の場所に数力所穴を開ける。

これで微かだが隣を覗けるようになった。

しかし、さつきより面白いことは無さそうなので、一気ゲームが終わるまで稲中（3巻）を読みながら暇をつぶすことに。

つつい夢中になり5巻まで読んだ所で、時計を見る。

うわっ！

既に2時間が経過していた。

雑談とゲームは長くても1時間程度の予定だったのに。

さゝそろそろ遊びは終わりだ。

マックスハンターにトラップを仕掛けようじゃありませんか。

俺はゴツチの携帯を鳴らし、ワン切りした。

ワン切りが次の展開へ移る合図。

気付いたゴツチはキリの良い所でゲームを終わす。

まずは改めて4年の愚痴を垂れ、仲間意識を作り上げる作業から。

コマチが切り出す。

「うちの4年つぶえ、むかつくほな」

！！！！

コマチよ…

俺が稲中を読んでいる間に、どんだけ一気したんだ？

完全にろれつがまわっていない…

お前が先に酔ってどうする！

コマチは完全に出来上がっていた…

1年の本音を聞きだすはすのコマチは、酔ったせいか自分の本音を言ってしまう…

「真夜中に起こされてよ、寝起きなのに焼酎を一気させられてさ、お前のせいで酒が無くなったんだから30分以内で酒を買ってこいって、飛ばされるのは止めて欲しいよな」

あれ？

俺のことか？

「真夜中にめっちゃ出るって有名な心霊スポットのトンネル中央で、一人だけ降ろすの止めて欲しいよな」

ん？

俺のことか？

「夜中の3時に失神するほど美味しいラーメン屋に連れて行けとか無茶振りは止めて欲しいよな」

やっぱ俺のことか？

「あいつの洗濯するときよ、パンツに毎回クソがついてんだけど勘弁して欲しいよな」

それは俺なのか？

慌ててパンツを脱いで確認するがセーフ。

そう言えば俺の洗濯係はコマチではない。

軽はずみにパンツを脱いでしまったが、ふと我に帰る。

酔ったコマチの本当か嘘か分からない話に踊らされている自分に気付く…

しかも他人の部屋で。

タイミング悪く部屋の主であるタケルが戻ってきた。

「おい！お前、人の部屋で何してんだよ！」

タケルは変態を見るような目で俺に言う。

その時の俺はTシャツ1枚で下は生まれたまま。

右手に稲中、左手に自分のパンツ…

「稲中でじゃ無理だろ〜？」

タケルは俺がパンツを脱いでいたので、稲中で変なことをやること  
していたとか完全に勘違いしている…

「ちげ〜よ！コマチがクソついてるっていつから！」

「はっ？」

返答の意味の分からなさに、タケルは頭の痛い子を見るような目で  
俺に言った。

「取りあえずパンツ履けば」

「うん…」

俺は黙ってパンツを履く。

こんなやり取りをしていたので、隣の話しを聞き逃していた。

タケルに事情を説明し、隣に耳を傾ける。

「セブンイレブンで買ったコーラと、ローソンで買ったペプシが飲みたいとか止めて欲しいよな」

まだコマチが愚痴ってる…

あいつ相当溜まってやがるな。

「プリンに醤油かけるとウニになるって聞いたらしく、早速ご飯の上にかけて食べたけど、やっぱり鬼まずくて、隣にいた俺に全部食わせるのは止めて欲しいよな」

タケルが俺を指さす…

俺は首を横に振る。

「食べ物じゃないのに、温めてください！と意味不明な事を言われ、女性店員がレジをしているコンビニで、エロ本を買と指示するの止めて欲しいよな」

今度は俺がタケルを指さす。

タケルは首を横に振る。

「風呂リンピック止めて欲しいよな」

俺とタケルは大きく頷く。

「ゴミ袋に1週間以上溜めた、「屁」をシンナーのように吸わされるの止めて欲しいよな」

タケルだけが大きく頷く。

今度は俺が変態を見るような目で、タケルを見る。

タケルは自信満々に小声で言った。

めっちゃおもろいんやで！

屁シンナー！

吐いた奴もいるし。

俺は更に変態を見る目で首を横に傾ける。

「よし！今度ふぁお前ら1年の番ら〜！4年の愚痴を言ふえ！」

酔ったコマチからストレートな指示が飛び出す。

いよいよ1年の本性が出る時！

犯人探しはここからが本番だ。

俺はタケルとビールを小声で乾杯。

ようやく本格的な心理戦が始まる。

### マックス狩り その3

「じゃ〜俺から言っちゃっていいっすかっ!」

お!

めっちゃ積極的やないかい!

しゃくれの久保田よ。

その前にスカ語は止めろといってるだろ!

しかも俺って…

まじやつぞ!

隣の会話を初めて聞いたタケルは片眉がピクピクしている。

こりゃ〜犯人じゃなくても、ボコボコかもな!

「4年って何であんなに偉そうなんすか?」

偉いからに決まっとするやる!

「ぶっちゃけタイマンなら負ける気しないんすけど!」

ブチッ!

気の短いタケルがキレた。

その場で急に立ち上がる！

その瞬間！

バイン！

2段ベッドの下で盗聴しているのに、怒りに任せ急に立ち上がる。

膝が伸びる前に、思いつ切り2段ベッドの裏側に頭をぶつける。

ベッドがバインと変な音を立て、少しずれる。

立ち上がる時よりも数倍の早さで、その場に座り込む。

しゃくれ久保田の発言に我慢できなかったようだ。

どうやら隣に乗り込み、その場で思いつ切り鉄拳を喰らわしてやる  
うと思ったらしい。

しかし、自分がベッドに喰らわされた。

目から火が出たと涙目のタケル。

痛いし、腹立つし、ど〜しよもないらしい。

俺はこの日2度目の爆笑をいただいた。

ずれたベッドをそのままに、再び隣の会話に集中。

タケルは頭を撫でながら聞いている…

まだ痛いらしい。

何か口の中が鉄の味がするって言ってるし。

状況から言えば、下級の愚痴を隣でコソコソと、聞き耳をたてている情けない上級生…

しかも、酔っ払った下級の一言に過敏に反応している。

パンツを脱ぐは、頭でベッドを突き上げるは…

タケルは頭にコブができた程度だが、俺なんて稲中で変なことしてたと勘違いされた上に変態扱いだ…

何だかとても怒りが込み上げてきた。

いつもなら、その場で昇竜拳を喰らわしておしまい。

しかし、今回は隣で聞いているだけ。

こんなに焦れたいものとは思わなかった。

タケルは頭を撫でながら既にキレている。

しかし、今回は犯人をあぶり出すのが目的。

俺とタケルはビールから日本酒に切り替え、気持ちを落ち着かす。

小声で2回目の乾杯をした。

その後は落ち着いて隣の会話を分析する。

一通りクソ1年の愚痴は全て聞いた。

分析結果はこうだ。

マザコン太田。

こいつは白だ。

話し方や、場の空気は読めるが、4年の愚痴を遠慮なく言いまくっていた。

愚痴を言う奴ほど怪しい？

ふっ。

甘いな。

現場を荒らさず、一切証拠を残していない慎重派のマックスハンター。

4年いや、全部員の裏をかく入念な計画を練っていたはず。

ゴマチの下手な揺さぶりくらい、簡単に見破るはずだ。

下手すりゃ、この飲み会が罠だと言うことも見抜かれているだろう。

しかし、太田は酔っ払いコマチの誘いに簡単にのってきた。

間違いない。

候補からは消した。

たゞし！

悪口ランキングでは見事トップに輝いたマザコン太田君。

おめでとう。

一番辛い、夜番（0時～4時）のパシリ隊長に任命しましょう。

さ～次！

しゃくれ久保田。

お前も白だ。

太田同様、気持ち良いほど言っちゃったね。

タイマンなら勝てる時まで。

しかも俺の一番ムカつく「スカ語」を多用しやがる。

候補からは消すが、俺とタケルで「ホモ集」だ。

ホモ集？

やっぱ気になる？

ほんじゃホモ集の説明は後程。

で、次はロリコン村上。

こいつは完全に消し。

なぜゴマチが選抜したかわからん。

気の利かない生意気な奴かと思いきや、ただの天然だった。

会話の流れも読めず、ゴマチの質問に対し、全くトンチンカンな回答をする。

こんな奴が計画的な盗みを出れるわけがない。

ってか、こいつに盗まれる方が悪いくらいだ。

そして4人目、マツチヨ後藤。

こいつはかなり頭が良い。

チクられても問題ない程度の愚痴しか言わなかった。

完全に先を見越している。

さらにゴマチの質問に対し、的確に返答していた。

おめでとう。

2回戦進出だ。

さう残りは2人。

まずはワキガ大塚。

こいつも頭の回転が早い。

さらに先輩を気持ち良くさせるコツを知っている。

コマチが飲まされたのも、こいつのノリと話術にやられた。

おめでとう。

ワキガ君。

君も2回戦進出だ。

そして最後に。

選抜補欠で、ついでに加えたチビデブ中井。

なぜコマチが補欠に挙げたか理解できた。

こいつは特徴がない。

全く目立たないタイプだ。

いや、むしろ意識的に目立たないようにしているようにも見える。

何も無さ過ぎるのが逆に怪しい。

ゴマチの目も捨てたもんじゃない。

とりあえずこいつも残しだ。

これで6人から半分の3人に絞りこんだ。

さうこの勢いで次のステージへ行こうじゃないの！

いよいよ確信に迫る最終ステージへ！

その前に、こちらで絞った3人をゴマチに知らせる必要がある。

俺は既に酔っているゴマチを見捨て、ゴツチの携帯を鳴らし、こちらに呼び出した。

コンコン！

「失礼します」

呼び出し10秒後にこちらの部屋に。

俺は何よりも先に、右肩を見せると、Tシャツをめくった。

あった！

プチって。

俺が針で刺したあと

しかもTシャツに血が！

マジでワザとじゃないよ！

またまた思い出し、爆笑する。

ゴツチは「何を刺したんですか？何ですか？」と、超不安そうに質問する。

同時にタケルも、何があったのかと質問する。

俺は2人に、その時の状況を詳しく話した。

ゴツチとタケルは安室のポスター（裏側）に開いた無数の穴を見ながら大爆笑。

その数秒後にタケルが悪代官のような顔つきでニヤ〜と笑う。

「おい、ゴツチ！バカコマチも安室ポスターに寄りかからせろ」

ゴツチも不適な笑いを浮かべ「任せてください！」と、力強く返事をした。

こちらで絞った3人を中心に揺さぶれと指示を出す。



## マックス狩り その4

その前にやることがある。

既に犯人候補から外れた太田・久保田・村上は邪魔だ。

自然に飲み会から外すため、3年に協力してもらおう。

3人に仕事を指示してもらった。

マザコン太田には、おつかいとスパイク磨き。

しゃくれ久保田には寝るまでマツサー。

(先輩が完全に熟睡するまでマツサージを続ける)

ロリコン村上は別に開催されている飲み会の、つまみ作り。

これで残りは3人。

マックスハンターはこの中に必ずいる！

さあ、勝負だ！

悪いが頭脳戦なら自信がある！

あと数時間後には、寮にいられなくしてやる。

俺とタケルはウィスキーロックで4回目の乾杯をした。

と、その前に！

忘れていませんか？

「ホモ集」を！

俺は下級時代、これが嫌だった。

それでは説明いたしましょう。

【軍隊野球部ファイリング】

儀式名：ホモ集

痛い度：

恐怖度：

屈辱度：

痛さと恐怖はそれほどでもない。

なのに、一番受けたくない儀式だったのはなぜ？

そうです。

屈辱度合いが半端じゃないのよ…

まず大きめのニンジンと果物ナイフを用意します。

ニンジンを綺麗に洗い、

果物ナイフで、

彫刻します…

皮を剥いたり、細かく切ったりはしません。

彫刻と言つ言葉が一番相応しいのです。

何を作るかと言つと。

例えるなら…

マツタケ？

まゝ色々想像してください…

で、出来たマツタケを上級に提出します。

一発でOKは滅多にできません…

「もっとでかくしろ！」

こう言われて作り直すことが多い…

平均3回程程度の再提出でOKがでます。

OKが出たマツタケのサイズはドキドキするくらい…

大丈夫かな？

切れないかな？

ってかこんなの本当に入るのかな？

こう思うことでしょう。

大抵、この儀式は上級が酔っている時が多い。

マツタケを受け取った上級は、先端を油に浸します。

そしてマツタケを作った本人が！

突然複数の上級に取り押さえられ…

ズボンとパンツをペロリンチョされ…

マツタケが！

少しずつ…

あ~~~~~~~~~！

何と言うことでしょう。

自分で作ったマツタケが…

今は自分と同化している…

まさこ！

この時に使う言葉は！

すごい！

こんなの初めて…

すみません…

ちよっとお下品な方向へ傾きましたが、話しを戻します。

部屋に戻ったゴツチは、早速タケルの指示通り動く。

何気なくコマチを安室ポスターの方へ移動させた。

隣でじっと待っている俺とタケル。

ポスターの裏側がコマチの背中であがれたことを確認！

コマチはピンポイントで安室ポスターにもたれてくれた。

俺はタケルと目を合わせ、ニタツと笑みを浮かべる。

結構、酔いもまわってきた俺達は、高めのテンションで何を刺すか議論した。

出来ればさっきの針よりインパクトの強い攻撃力が欲しい。

俺達は悩んだ。

別に何か刺さらなくても良い。

しかし、刺す以上に攻撃力の強い武器が思い当たらない。

スタンガンでもあれば間違いなく使っていたのに。

と、なれば刺すことは決定だ。

しかし、攻撃力を上げなければならない。

どうする？

増やすしかないっしょ！

何を？

本数よ！

どのくらい？

ありっただけ

きっとコマチは小さいころBCGの予防接種を受けていないだろうとタケルが言う。

（完全な空想です）

俺達は部屋にあるだけの針を集めた。

1年の裁縫道具を物色し、全部で14本の針をゲット！

14本あっても同時に全ての針を刺さなければ意味がない。

俺は机の上にあった消しゴムを手取る。

その消しゴムに針を刺す。

全ての針を均等に貫通させる。

出来た

俺とタケルはドキドキしていた。

刺す行為ではなく、即席BCGの鋭利さに。

だ、大丈夫かな…

しかもゴツチを刺した時は、壁の向こう側にいることは知らなかった。

しかし今回は確実に知っている。

コマチの大きな背中だったことを。

はたしてどんな勢いで刺せば良いのか？

一気にグサツと行ってもギャグで済むか？

イタズラなのに、なぜこんな気を使わなければならないのか？

ビビリの自分にイラツとする。

俺は覚悟を決めタケルの顔を覗く。

タケルは俺と目が合うと、ゆっくりと頷いた。

微かに震える手で、恐ろしく尖ったBCGを、ゆっくりとコマチの背中に近づける。

人間に刺してはいけない針の長さ和本数が、最後の決断を鈍らす。

よし！

いよいよ刺すと決めた瞬間。

「ガサガサッ！」

向こう側のコマチが突然動く。

俺はめっちゃ緊張していたのでビクツとしてしまい、BCGを持つ手を勢い良く引っ込める。

BCGから数十センチしか離れていなかったタケル。

俺が勢い良く引っ込めたBCGを持つ手の甲が、タケルの顔面を捉える…

タケルはその瞬間「オプシュ」と意味不明な音を発し、俺の裏拳に鼻水をたっぷり付ける。

尋常じゃない威力で裏拳してしまったので、慌てた俺はBCGを落とす。

落としたBCGが俺の太ももに刺さる。

さらに慌てた俺は、その痛さに任せ、足をビンと伸ばす。

伸ばした足がタケルの脇腹にクリーンヒット！

タケルは2度目の「オプシュ」を発し、今度はよだれを俺の足に垂らす。

コマチが動いてから、タケルの2度目の「オプシュ」まで、この間約3秒。

タケルは右手で鼻と、左手で脇腹を押さえながら俺を睨む。

え〜。

今のはしょうがないやん。

俺はタケルの頭を撫で、悪いのはコマチだと言い小声で言い聞かす。

少しずつ怒りでつり上がっていた目が、元のたれ目に戻っていく。

俺は取りあえずホットした。

しかし！

突然タケルの目が見開いた。

次の瞬間、落ちていたBCGを広い上げ、迷わずコマチの背中に力いっぱい刺した。

それもグサツと…

「ハアツ！」

コマチは声にならない声を発した。

きっと、何かに刺されたどこの騒ぎではなく、人間が日常生活で感じてはいけない痛みだったので、声にならなかったのだろう。

完全に根元まで刺さったBCGは、コマチの背中に刺さったまま、向こう側の部屋にもっていかれた。

同時に安室のポスターもベリベリと剥がれる。

ポスターが剥がれてしまったので、開通していた拳ほどの穴が丸見えになった…

振り向いたコマチと穴越しに目が合う。

コマチはこんな状態ながらも俺とタケルに軽く頭を下げた挨拶した。

背中に安室のポスターをBCGでとめたまま。

意味わかりますよね？

順番を説明すると、コマチ、安室、BCGになります。

ちなみに安室とBCGは部屋またぎでした。

今は向こうの部屋で全部一緒だけど。

俺とタケルは突然のことに軽く動揺していた。

しかし、コマチのなんとも言えない表情と、背中にとめられている安室の笑顔に、大きなギャップを感じ笑いが込み上げる。

こちらに振り返ったコマチの背中を1年が凝視する。

次の瞬間、だらっとしていた姿勢を直し、青ざめた表情で正座に切り替える。

そりゃびびるだろ。

背中に針が何本も刺さっているのだから。

俺があんなに迷っていたのに、タケルは何の迷いもなくBCGを刺した。

それも根元まで。

肺に刺さったのではないかと心配するくらいの長さだったのに。

俺はあいてしまった穴越しに1年へ指示を出す。

BCGを抜けと…

コマチの一番近くに座っていたチビデブ中井が「俺っすか？」と、言わんばかりの顔でキョロキョロする。

「てめえ〜に言っただよ!」と、俺は中井の目を見て言い放つ。

中井は「ハ、ハイッ」と、力のない返事。

恐る恐る、そしてゆっくりとコマチの背中に右手を近付ける。

その右手がBCGに軽く触れた瞬間!

「ぬオあああ〜」

コマチが何とも言えない声を出す。

その声にびびって中井は手を離す。

それでも抜けと俺は中井に目で合図する。

中井は小さく頷き、再度右手をBCGへ。

「みやあああ〜」

やっぱりコマチが奇声を発する。

もはや日本語だと書き表せない言葉だ。

やっぱり中井もびびって手を離す。

また俺が目で合図する。

また中井が頷く。

「ぬはおおお〜」

奇声を発する。

この繰り返しにタケルは大爆笑。

ゴツチと他の1年も、必死に笑いをこらえている。

しかし、コマチは半べソ。

中井は真剣。

これがまた笑える。

4回目くらいだったと思う。

「 ; / ! ? 」と言う奇声と共にBCGが抜けた！

中井は捕ったど〜！ばりにBCGを高らかに上げた。

俺達は笑顔と拍手で中井を讃える。

しかしコマチだけは表情が固い。

BCGの針の長さに目を疑ったようだ。

そりゃびびるだろ…

少なくとも2センチは出てたし…

焦るコマチをなだめ、再び安室で穴を塞ぐよう指示をした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4841e/>

---

行け！軍隊野球部！

2010年10月10日02時26分発行